長崎県文化財調査報告書　第121集

県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ

1995

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第121集

県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ

・永　瀬　貝　塚（加津佐町）
・名　切　遺　跡（郷ノ浦町）
・杉　峰　城　跡（瑞　穂　町）

1　9　9　5

長崎県教育委員会

発刊にあたって

長崎県教育委員会では，県内の重要遺跡の範囲・性格・時代などの解明のために発掘調査を実施し，積極的に遺跡を保護することを目的として，平成３年度から重要遺跡範囲確認調査事業を実施しております。

本書は平成５年度に発掘調査を行った加津佐町永瀬貝塚，郷ノ浦町名切遺跡，瑞穂町杉峰城跡の調査結果を記録したものです。

この調査報告書が本県の埋蔵文化財についての理解と愛護の精神を深め，学術，教育，文化財保護のために広く活用されることを念願するものであります。

発掘調査の実施にあたって御理解と御協力をいただきました地元の関係の皆様と教育委員会に深く感謝申し上げます。

平成７年３月31日

長崎県教育委員会教育長
宮　崎　政　宣

例　　言

1．本書は長崎県教育委員会が平成３年度から実施している県内重要遺跡範囲確認調査の結果報告である。

2．本書には，平成５年度に調査を行った永瀬貝塚（南高来郡加津佐町），名切遺跡（壱岐郡郷ノ浦町），杉峰城跡（南高来郡瑞穂町）の調査結果を収録した。

3．本書では各遺跡について分担執筆した。それぞれの遺跡についての執筆者は，以下のとおりである。

永瀬貝塚　寺田　正剛

名切遺跡　福田　一志・寺田　正剛

杉峰城跡　福田　一志・本田　秀樹

4．詳細は各項の例言を参照されたい。

5．本書の総括編集は寺田が行った。

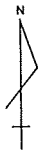
総　目　次

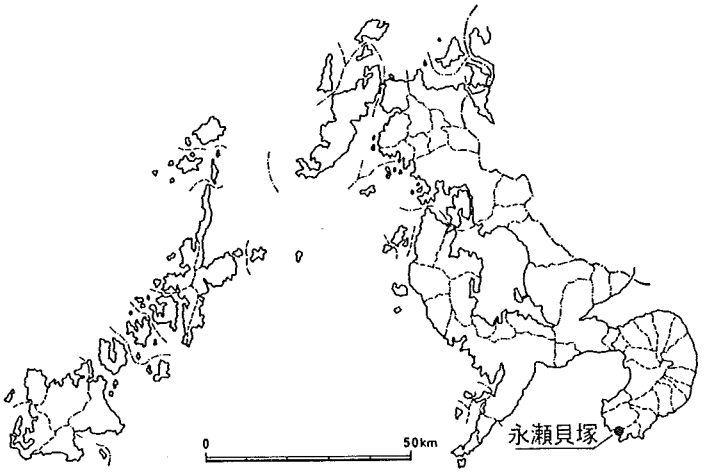
Ⅰ　永瀬貝塚…… 1
南高来郡加津佐町所在
1．遺跡の立地と環境…… 5
2．調査の経緯…… 8
3．重要遺跡範囲確認調査の概要…… 11
4．まとめ…… 20

Ⅱ　名切遺跡…… 31
壱岐郡郷ノ浦町所在
1．遺跡の立地と環境…… 35
2．調査の経緯…… 38
3．重要遺跡範囲確認調査の概要…… 42
4．まとめ…… 49

Ⅲ　杉峰城跡…… 57
南高来郡瑞穂町所在
1．遺跡の立地と歴史的環境…… 61
2．調査に至る経緯…… 64
3．重要遺跡範囲確認調査の概要…… 64
4．遺構…… 66
5．遺物…… 78
6．まとめ…… 85

I 永瀬貝塚





例　　言

1．本報告は，平成５年に実施した長崎県南高来郡加津佐町に所在する永瀬貝塚の重要遺跡範囲確認調査の報告書である。

2．調査は，長崎県教育庁文化課が事業主体となり，加津佐町教育委員会の協力を得て，平成５年５月25日～５月28日に実施した。

3．調査担当

長崎県教育庁文化課

文化財保護主事　　本田　秀樹

〃　　寺田　正剛

4．調査協力

加津佐町教育委員会

教　育　長　　松藤　　進

社会教育係長（現副主幹社会教育主事）　松藤　幸利

（土地所有者）　　金子　　寛　松藤キジュ　柳川フミエ

5．本報告の執筆編集は寺田による。

本 文 目 次

1．遺跡の立地と環境…… 5
(1) 地理的環境…… 5
(2) 歴史的環境…… 5
2．調査の経緯…… 8
3．重要遺跡範囲確認調査の概要…… 11
(1) 調査の目的と方法…… 11
(2) 調査の概要…… 11
(3) 出土遺物…… 14
4．まとめ…… 20
(1) 遺跡の時代別・時期別変遷について…… 20
(2) 遺跡の範囲・取り扱いについて…… 20

挿　図　目　次

第１図　永瀬貝塚周辺表層地質図（１／100,000）…… 5
第２図　永瀬貝塚周辺の地形と遺跡分布図（１／50,000）…… 6
第３図　永瀬貝塚推定範囲と今回の調査区（１／2,500）…… 8
第４図　永瀬（加津佐）貝塚出土縄文土器（１／８）…… 9
第５図　永瀬貝塚出土弥生土器（１／９・１／６）…… 10
第６図　永瀬貝塚試掘壙位置図（１／90）…… 12
第７図　永瀬貝塚土層図（１／40）…… 13
第８図　永瀬貝塚出土縄文土器(1)(1／２）…… 15
第９図　永瀬貝塚出土縄文土器(2)(1／２）…… 16
第10図　永瀬貝塚出土石器（２／３）…… 18
第11図　永瀬貝塚ゾーニング図（１／2,500）…… 21

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景・遺跡近景…… 25
図版２　遺跡からの展望・調査風景・第８試掘壙東壁土層…… 26
図版３　第８試掘壙北壁・南壁土層・貝殻堆積状況・第８試掘壙近景…… 27
図版４　第１試掘壙・第７試掘壙・第９試掘壙…… 28
図版５　永瀬貝塚出土遺物（土器・石器）…… 29
図版６　永瀬貝塚出土遺物（動物遺存体・貝類）…… 30

1　遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

永瀬貝塚は南高来郡加津佐町水月名に所在する縄文～弥生時代の貝塚遺跡である。

遺跡の所在する加津佐町は，島原半島の南端部にあたり，隣接する口之津町と共に古くから『笠津』として口之津に次ぐ港町として栄えた町である。加津佐町を含む島原半島南西部の橘湾沿岸域には島原半島東岸では稀な海浜が形成されており，夏場には大勢の海水浴客で賑わっている。

長崎県『土地分類基本調査』の表層地質図によれば，この一帯は火山性基盤層と堆積岩層により形成された地域であり，特に加津佐町・口之津町・北有馬町の山間部は「大屋層」と呼ばれる固結度の低い砂礫と泥岩の互層により成立している。加津佐町西部津波見海岸に干潮時に露頭するこの大屋層の上層には，洪積世のナウマン象をはじめ古脊椎動物の化石等が多産する。

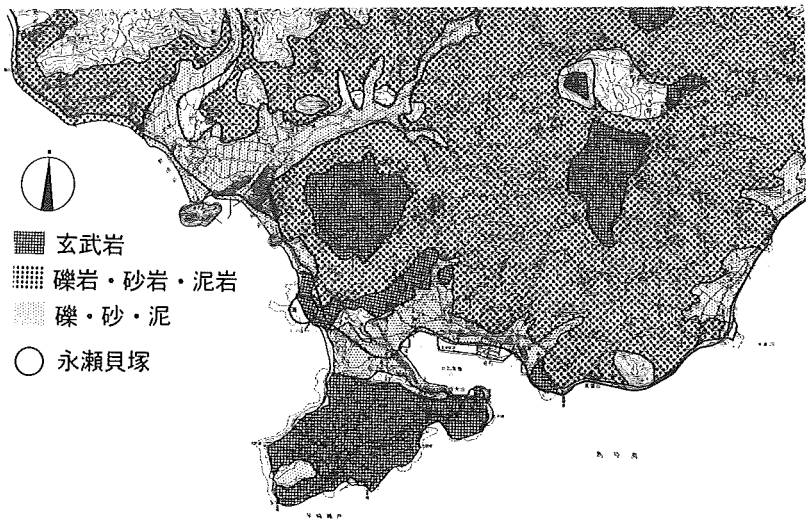
また，永瀬貝塚が立地する愛宕山南麓と山頂付近，早崎半島，北有馬町上原は玄武岩を基盤とし，現在の加津佐・口之津町中心地は，礫・砂・泥が堆積する沖積低地であることが記されている。この表層地質図から遺跡周辺一帯の旧状地形を復元すれば，早崎半島は孤島となり，加津佐中心地より掘川沿いに遡った内野周辺まで深い入り江または比較的大きな河川が入り込んでいた事が推察される。内野貝塚が前浜から約200m奥まった場所に形成されていることは，この旧状を見ると納得できる。

永瀬貝塚から天草灘に向かって眺望すれば，眼下に玄武岩の露頭を見ることができる。地名の由来ともなっているこの岩礁は，干潮時には約20mほど延びることもあり，現在でも魚貝類の好採集場となっている。

(2) 歴史的環境

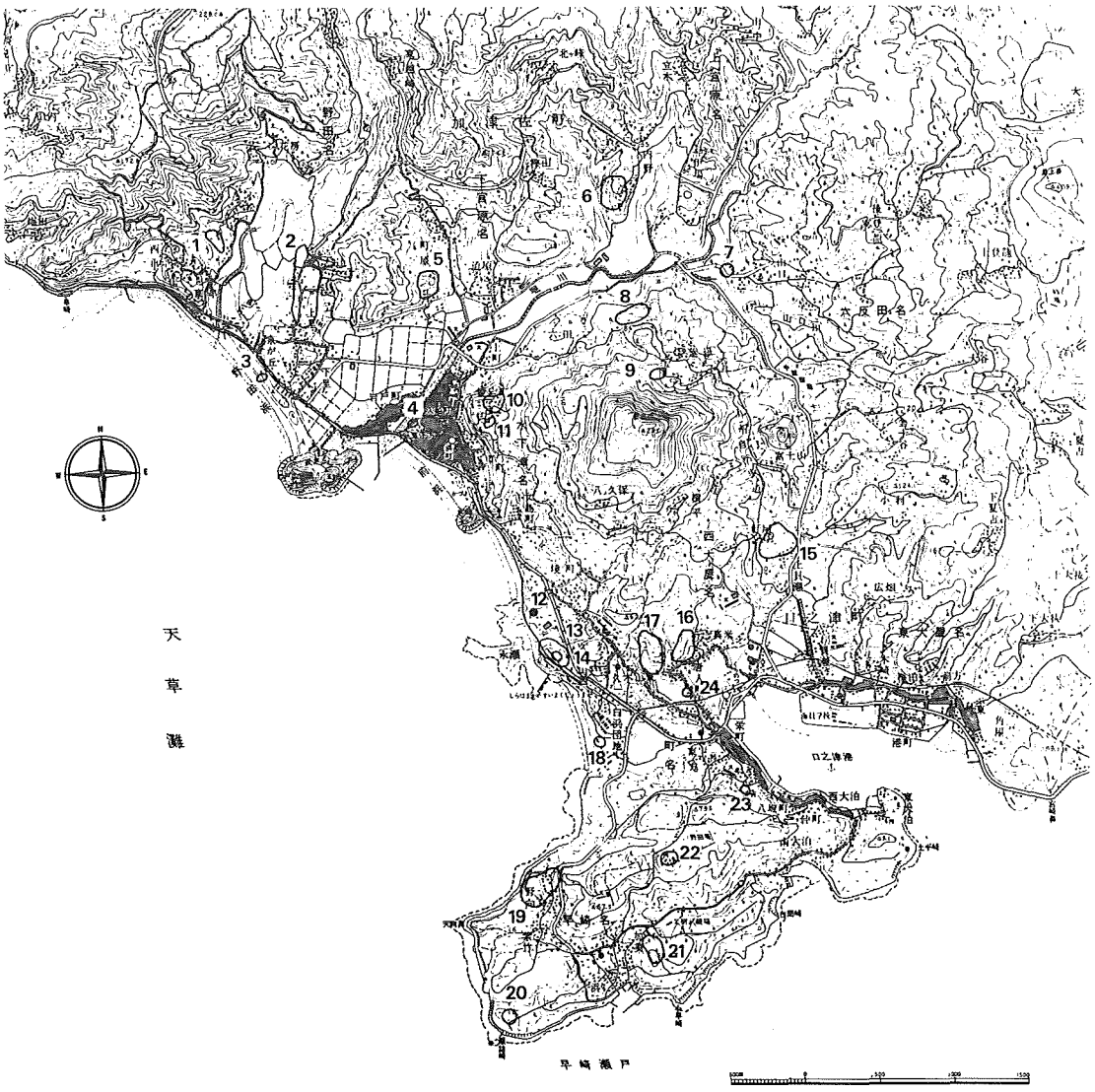
加津佐・口之津町周辺の遺跡を概観すると，主に縄文時代から弥生時代にかけての貝塚と，中世から近世にかけての城跡・寺院跡・キリシタン関連遺跡が集中している。

貝塚としては，永瀬貝塚をはじめ，加津佐町掘川北岸の丘陵端部に辻・千壇・内野貝塚，口之津町貝瀬川上流に三軒屋貝塚がある。辻貝塚は，平成２年保育園建設工事に伴い発掘調査が実施され，方形に区画された溝，柱穴等弥生後期から終末期の遺構・遺物が多数出土している。特に製塩土器支脚・土錘・双角状礫器等漁撈関係の遺物が顕著であり，漁撈を生業とする弥生集落の存在を示唆する遺跡といえる。千壇貝塚は，辻貝塚からやや奥まった丘陵端部に立地しており，小規模な発



第１図　永瀬貝塚周辺表層地質図（1／10,000）

第2図　永瀬貝塚周辺地形と遺跡分布図（1／50,000）



周辺遺跡一覧表

［加津佐町］

1	小松寺屋敷跡（中・近）	2	辻貝塚（弥生）	3	砂原キリシタン墓碑（中世）
4	須崎キリシタン墓碑（中世）	5	千壇貝塚（弥・古・中）	6	内野貝塚（縄・弥）
7	宝寿庵跡（近世）	8	古城跡（中世）	9	蓮岳寺跡（中世）
10	円通寺跡（中世・県指定）	11	コレジオ跡（中世）	12	永瀬貝塚（縄・弥）

［口之津町］

13	波止の上古墳（古墳）	14	久木山西遺跡（先土器）	15	三軒屋貝塚（弥生）
16	本長谷遺跡（弥生）	17	口之津城跡（中世）	18	白浜キリシタン墓碑（近世）
19	野向遺跡（先・縄）	20	瀬詰崎台場跡（近世）	21	早崎城跡（中世）
22	烽火山遺跡（近世）	23	不断河庵跡（中・近）	24	南蛮船来航の地（近世）

掘調査がかつて実施されたことがあり，出土遺物は現在加津佐中学校に保管されている。弥生中期から終末期土器を主体とし，そのほか須恵器・土師器・青磁等古墳時代から中世にかけての遺物の散布も確認されている。内野貝塚は，調査の経歴はないものの農道工事の際貝層が確認されており，弥生土器の表採も可能である。三軒屋貝塚は，昭和41年水害に伴う溜池復旧工事の際発掘調査が実施され，貝塚や埋葬跡，柱穴等の生産工房的遺構と，弥生後期の壺形土器・甕形土器・高坏・器台・土製支脚・双角状石器・鉄鏃など漁撈関連の遺物が出土している。

島原半島全域を見渡した場合，これほど弥生時代の貝塚が集中した地域は現在まで確認されておらず，この地域が当時から良好な魚貝類の採集場であったことを示している。

中世は愛宕山山麓を中心とした遺跡の分布が確認されている。加津佐町古城跡は，松平藩時代の調査書島原大概様子書の「古城跡一箇所六反田名にあり。城主不知。今は野になる。」の記述により存在が記された城跡であり，現在「古城」として小字名に残っている。領主については明確な文献が発見されておらず不明であるが，『深江文書』『吾妻鏡』等で名が記されている高来郡東郷惣地頭職越中氏が有力とされている。東郷とは今の深江町を中心とする地域であり，郷域は定かではないが『深江文書』「高師直奉書」や『広福寺文書』「菊池武照寄進状」に「肥前国高来東郷加津佐村云々」という記載が見られることから，加津佐村が高来東郷に含まれることは明確である。また越中氏は同じ東郷深江村地頭職安富氏との所領争いが絶えず両氏が拮抗した立場にあったことは間違いない事実である。ただ，越中氏がすなわち加津佐村を本拠にしていたという根拠とは言えない。

一方，口之津城は有馬氏の支城と考えられている。有馬氏は1215（建保３）年藤原経澄が高来郡の地頭職として赴任し，日野江城を築き有馬氏と称したといわれている。1358（北朝暦正平13)年には有馬直澄が禅宗曹洞派の大智禅師に加津佐町の土地を寄進しており，当時はすでに有馬氏の所領であったことを裏付けている。つまり口之津城は加津佐古城に後出するものであり，その後も16世紀後半宣教師を領内口之津に呼びキリスト教の布教を許可した際の港の監視場所として利用されたのではないだろうか。

そのほか関連する遺跡としては，加津佐町小松寺屋敷跡，蓮岳寺跡，円通寺跡，口之津町不断河庵跡があり，周囲から宝篋印塔・五輪塔が出土し寺院跡として周知している。円通寺は大智禅師により創設された有馬氏の菩提寺であり，老人ホーム造成の際多数の陶磁器片が出土したといわれている。また，キリシタン関連遺跡としては，加津佐町コレジオ跡，砂原・須崎キリシタン墓碑，口之津町白浜キリシタン墓碑，南蛮船来航の地などがある。コレジオ跡は，1590（天正18)年有家から移転したもので，天正遣欧少年使節に同行し入国した宣教師アレキサンドロ・バリニャーノが印度より持参した活版印刷機をコレジオに据え付け，日本最初の活版印刷による出版を刊行した場所でもある。ただその所在については明確でない。

参考及び引用文献

1　長崎県南部地域総合開発地域　「土地分類基本調査」　口之津・三角　長崎県　1976

2　長崎県文化財調査報告書第111集　「長崎県遺跡地図－島原市・南高来郡地区－」長崎県教育委員会　1994

3　村川逸朗ほか　「辻貝塚」加津佐町文化財調査報告書第１集　加津佐町教育委員会　1991

4　古田正隆ほか　「口之津貝塚および口之津烽火遺跡調査報告」　百人委員会埋蔵文化財報告第５集　百人委員会　1975

5　林田第壹號　「加津佐郷土誌　加津佐史話（改訂増補）」　加津佐町　1981

第３図　永瀬貝塚遺跡推定範囲と今回の調査区（1／2,500）

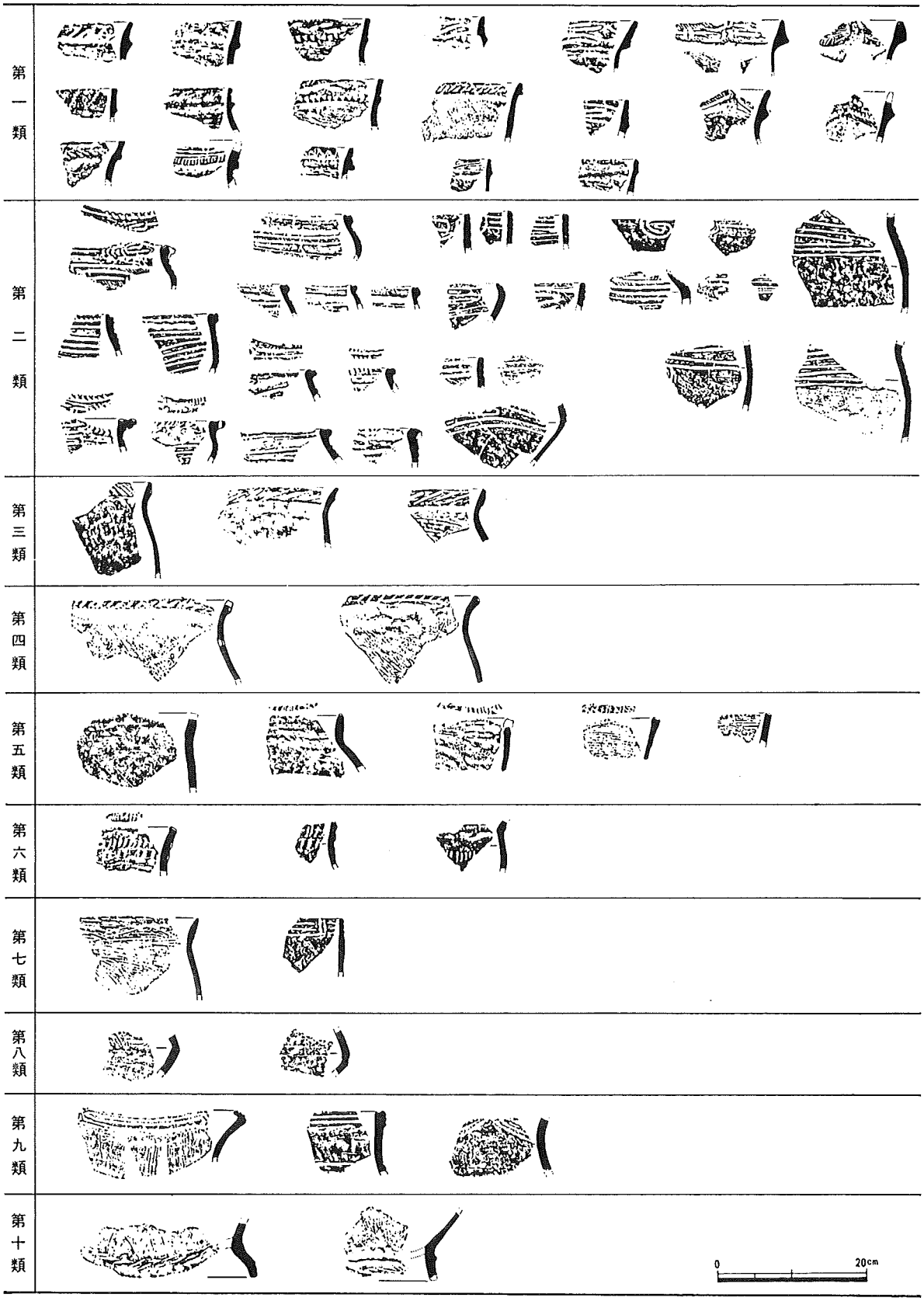
2　調査の経緯

永瀬貝塚は，昭和４年12月加津佐読書会員によって発見され，翌５年１月久留米の旧九州医専教授八重津輝勝氏によって発掘調査が行われた。調査では縄文時代と弥生時代の２枚の貝層が観察され，時期差をおいて同じ場所に貝塚が形成された状況が確認されている。当時掘り出された遺物はその後九州大学に運ばれ，２名の研究者により報告されている。

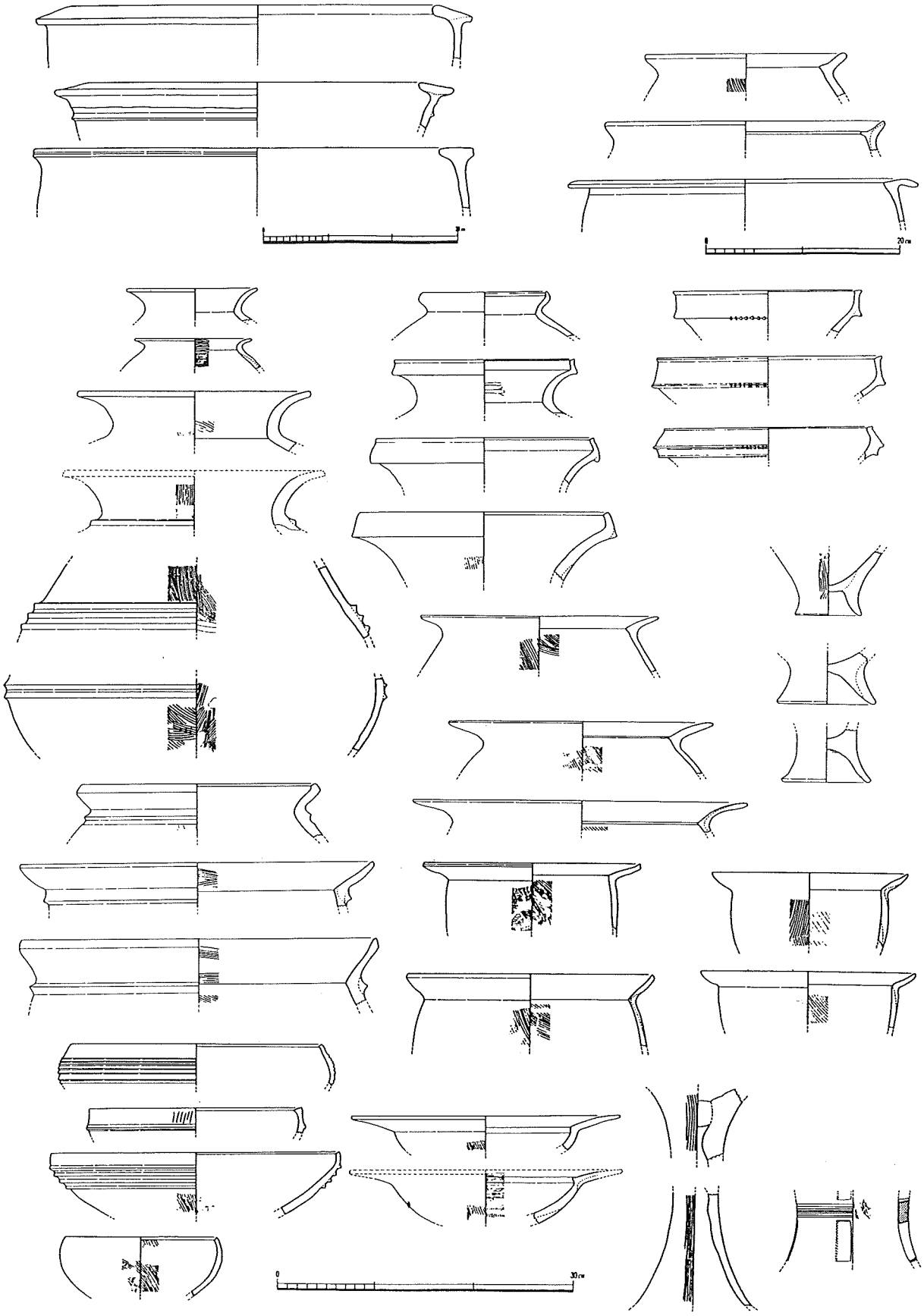
前川威洋氏は縄文土器について器形と施文，調整方法の詳細な観察により，10類に分類している。

第１類には南九州市来式土器に比定される一群，第２類には鐘崎式土器を一括した。第３・４類は口縁部に粘土帯を張付し，その上に刻み目及び沈線を施すもので北久根山式に分類される。以下第５類は口縁に数個の山形をもち，口唇にのみ刻み目を施すもの，第６類は二枚貝腹縁等による爪形文を有する土器（御手洗Ａ式），第７類は口縁に直線文や複線山形文など文様が集中する出水式系統の土器，第８類は磨消縄文を有しない胴位屈曲部，第９類は異質の土器，第10類は台状の底部に分類される。特筆すべきは，南九州系の市来式土器と北九州系鐘崎式土器が共伴することであり，九州全土を覆っていた鐘崎式土器に対し，南九州から派生した市来式土器が急速に広がりを見せ，有明海沿岸にまで及んだ，その接点部の遺跡として据えられている。

松藤和人氏は永瀬貝塚出土の弥生土器を，島原南部の貝塚出土土器との比較検討から器種別に分類し，各個別ごとに胎土や器面調整の詳細な観察が行われている。



第4図　永瀬（加津佐）貝塚出土縄文土器（1／8）（前川　1979より抜粋）



第5図　永瀬貝塚出土弥生土器（1／9・1／6）（松藤　1975より抜粋）

器種分類は，壺形土器として二重口縁壺（壺Ａ類）・広口口縁壺（壺Ｂ類）・短径広口壺（壺Ｃ類），甕形土器として口縁下に突帯を有する「く」の字口縁甕（甕Ａ類）・黒髪式甕（甕Ｂ類）・「く」の字口縁を有し脚台を持つ黒髪形甕（甕Ｃ類），高坏形土器として口縁屈曲部内面に突帯を有するもの（高坏Ａ類）・水平またはやや内傾する口縁部を有するもの（高坏Ｂ類），口縁部が逆「く」の字状に内屈するもの（高坏Ｃ類），その他器台形土器・鉢形土器に大分され，各類を詳細な形態分類により更にａ・ｂ・ｃ…と細分する取り組みが行われている。なお，永瀬貝塚では甕Ｂ類の出土はなく，その後の加津佐町辻貝塚・北有馬町今福遺跡等近隣遺跡の調査から鉢形土器として分類された口縁下に数条の突帯を有するものは高坏であることが明確となった。

永瀬貝塚ではこうした土器についての解釈は十分に行われているものの，調査地点を始め，遺跡の範囲，遺構の検出，遺物の出土状況，貝輪・石器・獣骨等その他の関連遺物等の報告がなされておらず，遺跡の実態については未周知であった。

引用文献

1　前川　威洋　「九州後期縄文土器の諸問題」　『九州縄文文化の研究』　1979

2　松藤　和人　「第Ｖ章　島原半島南部の弥生時代遺跡」『口之津貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告』　百人委員会　1975

3　重要遺跡範囲確認調査の概要

(1) 調査の目的と方法

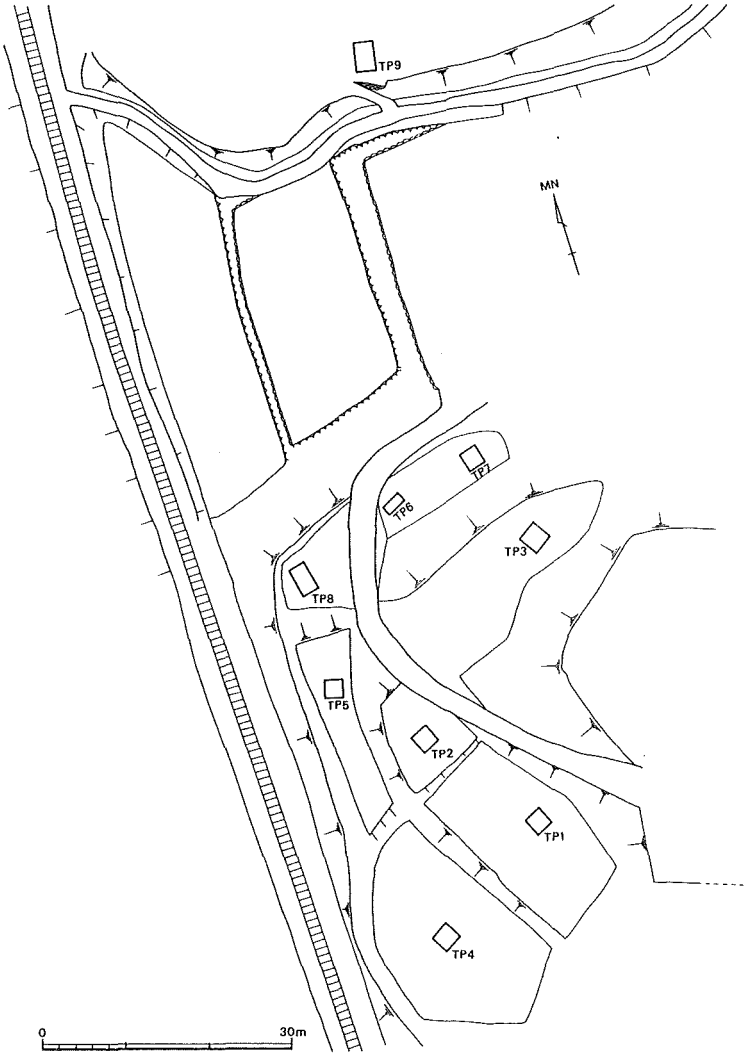
県内には約3,500箇所の遺跡が周知されており，県教員委員会ではそのうちの155箇所を長崎県重要遺跡として選定し台帳の整備を行っている。この重要遺跡の大半は規模・性格・内容について不明瞭な部分が多く，遺跡の保存・保護または開発事業に伴う調査・協議資料としての基礎的なデータが不足している。そのため県教育委員会では，平成３年度から重要遺跡の範囲確認調査を実施し，遺構・遺物の確認，遺跡範囲内の重要度に沿ったゾーニング図の作成を手掛けてきた。平成５年度は永瀬貝塚と，壱岐郡郷ノ浦町名切遺跡，南高来郡瑞穂町杉峰城跡の３遺跡を対象としている。

永瀬貝塚は，昭和５年に発掘調査が行われ，その後は考古学マニアによる度重なる遺物の採集が行われたと聞いている。遺跡の範囲は東西50m，南北100mと推定されているが，現状は丘陵先端部の傾斜地と谷間低地部にあたり，遺跡の立地に不適合性に感じられた。そのため，遺跡の位置の確定，二枚の異文化貝層の再確認を主な目的として，試掘壙９箇所を設定し38m²の発掘調査を実施した。ただ丘陵先端部には島原鉄道が通り，谷間の低地部は現在ビニールハウスが設置されていることから試掘壙設置場所にかなり制限を受けた。

(2) 調査の概要

調査は，加津佐町教育委員会の協力を得て，平成５年５月25日から28日にかけて実施した。

その結果，第１・２試掘壙(TP.１・２）では耕作土直下に地山が露出し，また第３～７試掘壙



第6図　永瀬貝塚試掘壙位置図（1／90）

（TP. 3～7）では1層耕作土と，2層として茶褐色粘質土の推積があったが，遺物や貝層はまったく確認されなかった。

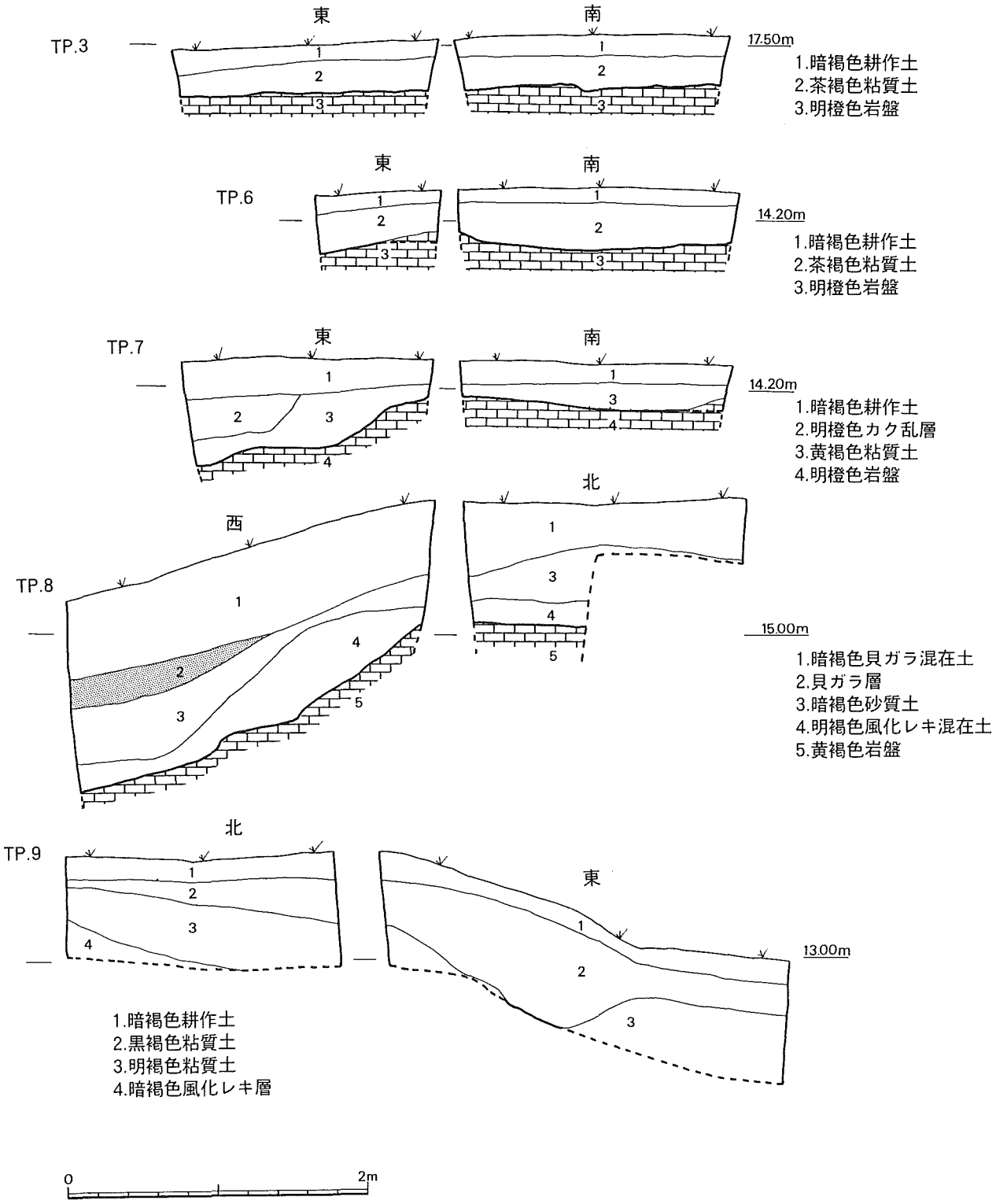
その後土地所有者の指摘から，丘陵先端部の北西側傾斜面に第8試掘壙(TP. 8)を設定したところ貝層の堆積が確認された。第8試掘壙から北側は比高差が約5m程の断崖となっており，大雨時には土砂が流れ落ちるといわれている。かつて島原鉄道布線時に掘削されたとも聞いており，昭和初期の現状からはかなり変化していると考えられる。

第8試掘壙では表土を含め2枚の貝層が確認され，第1層は貝殻混在土，第2層に純粋な貝殻層が観察された。2層以下はトレンチの半分を掘り下げ第3・4層を確認している。3層は貝殻をほとんど含まない暗褐色の砂質土，4層は明褐色の風化礫混在土で，その下に黄褐色の岩盤が北側に傾斜した状態で検出されている。遺物は1層と2層に縄文土器・石器が出土しており，弥生土器は1点も出土していない。また，貝層中にはイノシシ・シカなどの獣骨片を混在する。貝塚の主体は海浜性のハマグリであり，サザエ・カキ・アワビ等岩礁性貝類がそれぞれわずかずつではあるが含まれている。

最後に対面する丘陵の傾斜地に第9試掘壙(TP. 9)設定した。現状は竹林であり，土層の堆積は乱れがなかった。層位は南側丘陵と異なっており，2層に黒褐色の粘質土，3層に明褐色の粘質土が厚く堆積している。3層からはわずかに1点であるが黒曜石フレイクが出土している。貝殻の堆積層はまったく観察されなかった。

したがって，永瀬貝塚の遺跡範囲は第8試掘壙周辺の丘陵先端部に限定され，集落等の生活の痕跡は貝塚周辺からは発見されなかった。また，遺物として縄文土器の包蔵は確認できたが，弥生土器は全く出土せず，二時代にわたり形成された貝層の確認は出来なかった。

第7図　永瀬貝塚土層図（1／40）



(3) 出土遺物

縄文土器（第８・９図　図版５）

縄文土器は合計で185点，すべて第８試掘壙から出土したものである。層位別の個数は１層から173点，２層はわずか12点である。そのほとんどが胴部無文帯の小片であり，どうにか文様や部位が判断できる破片25点を図化した。

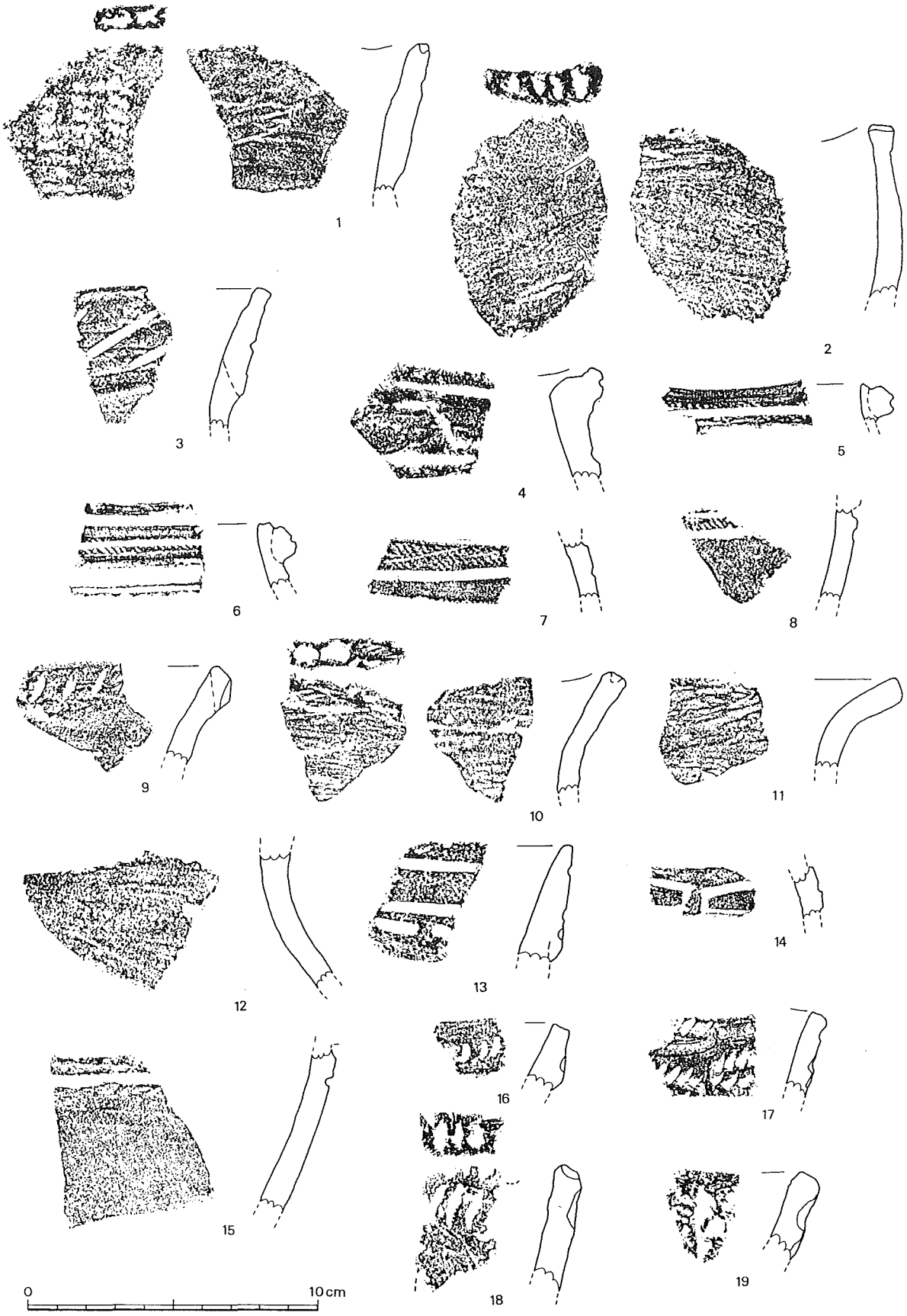
１は巻貝の回転押圧による施文が行われた口縁部であり，口唇に刺突が見られる。内面はヘラ状工具による浅い条痕文が観察される。焼成にしまりがなく外面に多少風化がみられるが，施文は判断できる。胎土に貝殻粒であろうか白色泥粒子の混在が顕著である。２は口縁部を肥厚し，口唇にのみ刻み目を施す形態で，おそらく山形口縁の最頂部にあたる。以下口縁から胴部にかけては無文で，内外面にヘラ工具による削りを施し，稜を残す。焼成は極めて良好で，色調は外面は暗赤褐色，内面は黒褐色を呈する。３は口縁下位に浅い突帯を張り付け幅広の文様帯を形成，その上に斜行沈線を施している。焼成は良好で，外面は黄色がかった灰色，内面は黒褐色である。胎土には多量の金雲母が混入されている。４は口縁に粘土帯を貼付し重厚な口縁部を成形しており，口縁内面に丸い高まりを有する。山形口縁でその頂部付近と考えられ，口縁粘土帯上に１条と口縁下位に２条の沈線を有する。焼成はややしまりがなく，内外面とも暗い灰褐色の色調である。胎土は石英・黒雲母とともに赤色土粒子の混在が観察される。

５～８は磨消縄文有する精製土器口縁部及び胴部である。５・６は口縁に粘土帯が貼付され，粘土帯頂部に１条の沈線と沈線両側に縄文を施す。また７は幅広の磨消縄文帯，８は２条の沈線に挟まれた比較的狭い縄文帯を有する胴部。すべて内外面ともに丁寧なヘラナデ及びヘラ磨きが施され，色調も暗褐色～黒褐色と均一である。胎土ではいずれも黒雲母と赤色粒子が顕著に観察される。

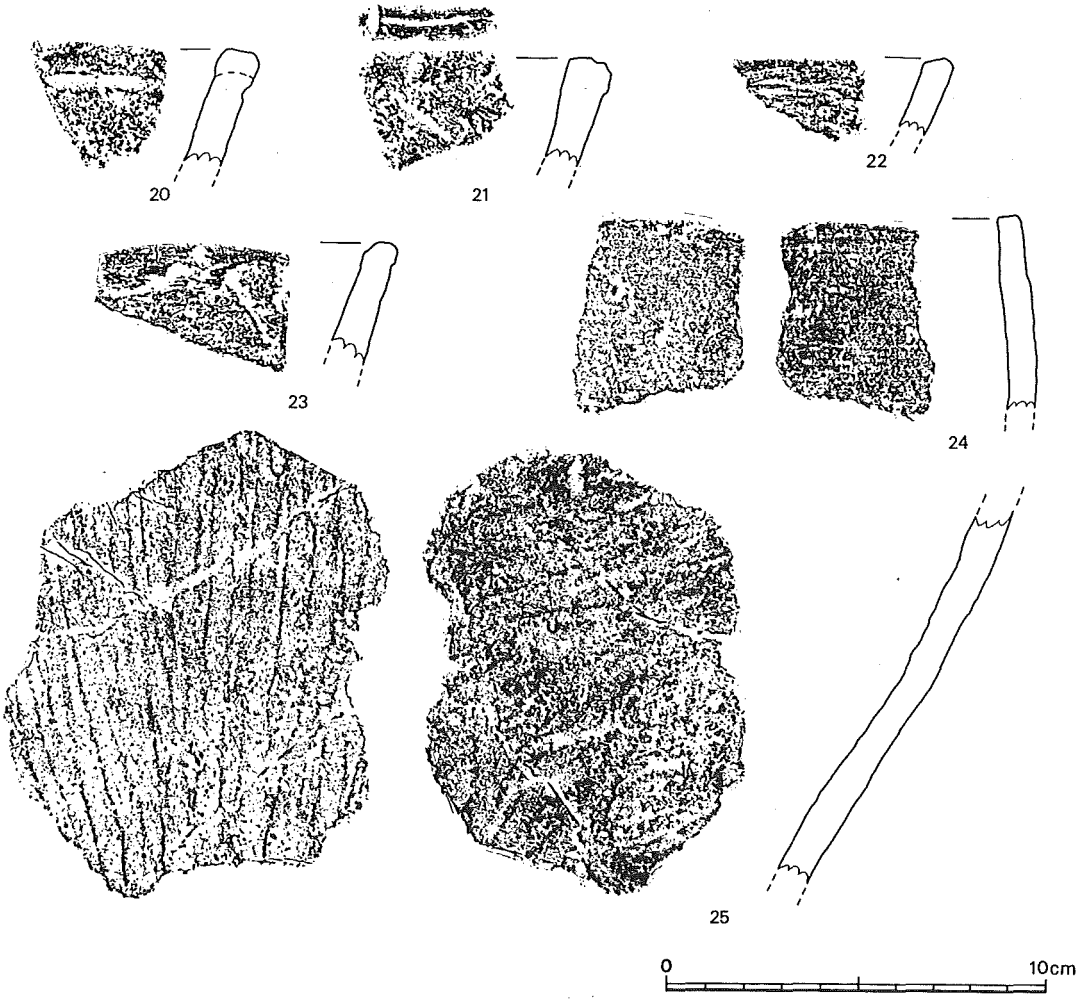
９は口縁部を肥厚しその外面に切れ長の浅い斜行線を施した形態であり，色調は内外面とも鈍い灰褐色，胎土に石英・黒雲母・赤色粒子が観れる。10・11は口縁部が短く，丸く外反する形態である。10は波状口縁の頂部であり，波長部のみ口唇に３つの凹点を施す。色調は暗い赤褐色，胎土に白色粒子と金雲母をわずかながら混在する。11は口唇に厚みを持ち，作りは端麗である。焼成は極めて良好で，多量に金雲母が混入されている。12は同形態の頸部であり，文様はない。色調は外面灰褐色，内面黒褐色と異なるが，金雲母の混入は同じである。

13～15は沈線のみの施文が観察される一群である。13は口縁下位が肥厚する口縁部で，口縁に平行して３条の沈線が横行している。各沈線の間隔は均一でなく最下位の沈線は途中寸断している。色調は黄褐色，胎土として3mm程の小石と白色粒子が顕著である。14は極めて小片で部位・上下方向の観察は困難である。おそらく口縁に平行した沈線の胴部文様帯で，その端部に縦沈線を施し矩形にまとめている。色調は外面灰褐色，内面暗褐色で胎土に白色粒子が観られる。15は毬状に膨らむ胴部下半位にあたり，沈線から以下の施文はない。色調は赤褐色で胎土の粒子は粗い。

16～19はヘラ状工具か貝殻縁辺および腹縁による列点文が施文された一群である。16は口縁部を断面三角形に肥厚させ，頂部に稜を有する。口唇のつくりは辺が明確で，口唇と稜の間の下位に列点文



第8図　永瀬貝塚出土縄文土器（1）（1／2）



第9図　永瀬貝塚出土縄文土器（2）（1／2）

を施す。色調は赤褐色で胎土に金雲母を多含する。17は胴部から口縁部にかけてほぼ一定の器厚であり，口縁が若干外反する。施文は貝殻側縁による列点と棒状工具による浅い凹線の複合文様である。色調は赤褐色で，胎土に白色粒子・金雲母を混在する。18は口縁部の把手状突起で，口唇に深い刻み目，外面に貝殻腹縁の押圧による列点文が施文される。焼成は極めて良好，色調は外面暗褐色，内面黒褐色で，胎土に3mm程の小石が観察される。19は貝殻腹縁による深い押圧文の口縁部。施文具は腹縁の襞が顕著であることからハイガイ類を使用したものである。色調は鈍い黄褐色で，白色粒子が顕著に観られる。

20～24は文様が簡素な直口する口縁部を一括した。20は口唇が肥厚し，外面に浅い凹線が横行する形態。焼成はしまりがなく，色調は暗赤褐色で胎土の粒子は粗い。21は口唇を粘土の貼付により肥厚させ，口唇に浅い沈線とそれに直行した刻み目状の沈線が１本施文されている。色調は外面黒灰色で胎土に3mm大の石灰石ほか黒雲母・白色粒子を多数混在する。22は外面に貝殻条痕が観られ，色調は赤褐色，白色粒子を胎土に有する。23は口縁部が丸くおされめられる形態で，胴部に下がるにしたがって器厚の厚みをもつ。色調は内外暗灰褐色で胎土に黒雲母・白色粒子が多含する。24は平縁でほぼ直口する無文の口縁部。口唇部のつくりは辺が明確で，外面は粗いヘラナデ，内面は横位の緻密なヘ

ラナデが施されている。焼成は極めて良好で赤褐色を呈し，胎土粒子はかなり細かい。25は今回出土した最も大きい破片であり，鉢形土器の胴位から底部にいたる部位である。文様はないが外面に縦位のヘラ状工具によるナデ調整，内面に多方向からの粗いヘラナデ及びナデ消し痕が観察される。

これらの土器を概観すると色調・胎土で共通する部分がみられ，大別することができる。

色調では，外側器壁面および胎土が赤褐色を呈するもの（1・2・10・11・15・16・17・20・22・24・25），灰褐色及び黒灰色を呈するもの（3・9・12・14・21・23），黒褐色を呈するもの（4・5・6・7・8），その他黄褐色～暗褐色(13・18・19)に分類できる。

また胎土では，石英についてはすべての土器から観察されるものの，金雲母を混在するもの（3・5・8・10・11・12・16・17),黒雲母を多含するもの(21・23),赤色粒子を多含するもの（4・5・6・7・9）などの特徴が観察できる。

したがってその他の施文・器形要素を鑑みて，明らかに同一形式に分類されるものはA類（3・12),B類（4・5・6・7），C類（10・22），D類（16・17），E類（18・19），F類（21・23）の6類が指摘できる。

最後に前川威洋氏の分類と照合してみる。

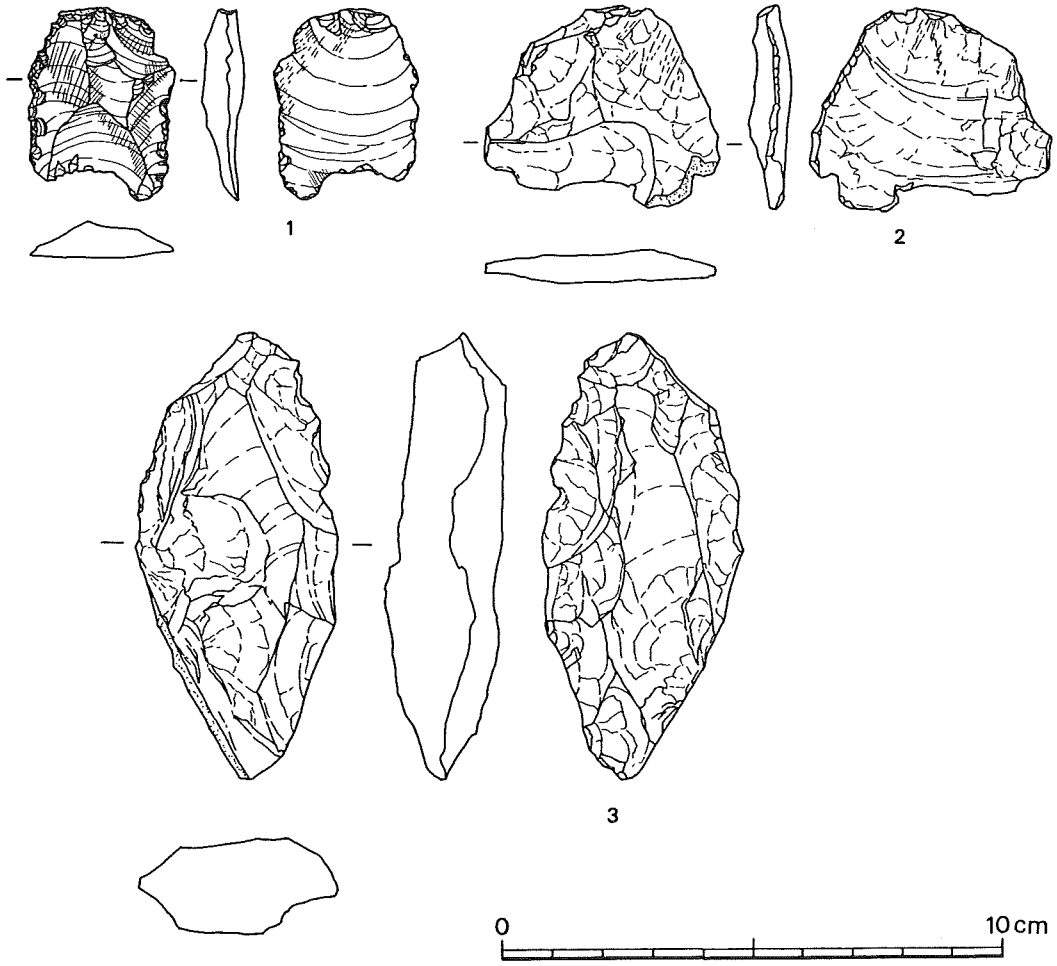
A類は口縁の形態から明らかに第1類市来式土器の範疇である。またB類は磨消縄文及び口縁形態から第2類鐘崎式土器に比定できる。C類は胎土に特徴はなく，色調と貝殻条痕を残す器面調整により集合したが，山形口縁の頂部に凹点を押圧する形態は前川分類では据えられていない。条痕及び口縁部施文から第5類系統と考える。D類は列点文と赤褐色の色調及び金雲母を多量に混在することから分類したもので，口縁の形態及び金雲母の混入から第1類市来式土器に類される。E類は貝殻腹縁による施文から第6類（御手洗A式）に分類できる。ただ,18は把手状突起であり，器形からみれば岩崎下層式期（中期後半）に遡る可能性がある。F類は全く共通した色調・胎土の無文土器であり，前川分類に比定するものは見当たらない。

その他のものとして，2が第5類，9が第4類，13・14が第7類（出水式系統）に分類できる。また1については他と施文方法が異なり，前川分類と類似するものがないことから，瀬戸内海沿岸のやや古く遡った土器の可能性もある。11についても前川分類に類例はなく，大分県小池原貝塚出土の無文粗製の深鉢形土器に似るが断定は難しい。

石　器（第10図・図版6）

石器は剥片も含め全部で7点出土し，第8試掘壙第1層から黒曜石1点，安山岩5点，第9試掘壙第3層から黒曜石1点が出土している。製品はなく，加工痕がある3点を図化した。

1は漆黒黒曜石の縦長剥片を素材とし，両側片にブランティングを施した剥片である。加工は表面側からのみの押圧剥離であり，裏面はバルブを残すのみである。2は安山岩製の不定形な剥片を素材とし，裏面側からのブランティングを施す。3は安山岩製の尖頭状礫器であり，核の周囲を表裏から大胆な剥離を行い成形している。先端は欠落し，基部には自然面を残す。貝類の採集道具か。



第10図　永瀬貝塚出土石器（2／3）

獣骨及び貝類（図版６）

獣骨はすべて第８試掘壙第１層からの出土である。イノシシは下顎骨を含め３点，シカは角が１点イノシシ・シカの細分がつかない個体７点，イヌ科の小動物３点，イルカ１点，サメ椎体１点が出土している。動物とともに海獣類の遺存体がみられることは，当時から発達した漁撈技術があったことを推測させる。

貝類は総数148点の採集を行い，23種に分類した。すべて第８試掘壙第１・２層の出土である。

永瀬貝塚出土貝類生態群集組成表

生　態　群　集　名	総個体数	比　率
Ⅰ　潮間帯：（岩礁・岩礫）底性群集	47	31.8
Ⅱ　潮間帯：（砂・砂礫・細砂）底性群集	91	61.5
Ⅲ　潮間帯：（泥・砂泥・細砂泥）底性群集	7	4.7
Ⅳ　上浅海亜帯：（砂・砂泥・砂泥）底性群集	3	2.0
合　　計	148	100.0

永瀬貝塚出土貝類組成表　　※型…生態群集型

No.	鋼	科	種	個体	型	分　布　域
1	腹足鋼（巻貝類）	みみがい科	メカイアワビ	3	Ⅰ	本州以南20m内外
2		つたのは科	マツバガイ	1	Ⅰ	全国的岩礁上干満潮線付近
3		にしきうず科	クマノコガイ	2	Ⅰ	本州以南潮線下
4			オオコシダカガンガラ	8	Ⅰ	九州西北岸汀線岩礁上
5			コシダカガンガラ	2	Ⅰ	北海道以南潮線岩礁
6			クボガイ	2	Ⅰ	北海道以南潮線岩礁
7		りゅうてん科	サザエ	5	Ⅰ	全国的
8			スガイ	1	Ⅰ	本州以南潮線内外
9		うみにな科	ウミニナ	1	Ⅲ	全国的
10		たまがい科	ツメタガイ	1	Ⅱ	浅海性
11		あっきがい科	オニツノオリイレ	1	Ⅳ	本州中部以南200m
12			レイシ	13	Ⅰ	北海道以南干潮線
13		えぞばい科	バイ（シマバイ）	1	Ⅱ	本州以南10～20m
14		てんぐにし科	テングニシ	2	Ⅳ	本州以南30～60m
15	斧足鋼（二枚貝類）	ふねがい科	ハイガイ	2	Ⅲ	本州南部以南潮線下
16		いがい科	イガイ	2	Ⅲ	北海道南部以南潮下～10m
17		いたぼがき科	マガキ	9	Ⅰ	北海道以南潮線下
18		きくざるがい科	ヒトエギク	1	Ⅰ	本州中部以南潮線下
19		まるすだれがい科（ハマグリ科）	ハマグリ	74	Ⅱ	全国的　淡水流入砂泥部
20			アサリ	3	Ⅱ	北海道以南潮線下淡水流入部
21			ヒナガイ	10	Ⅱ	本州以南潮線下～10m
22			オオヌノメ	1	Ⅱ	本州以南潮線下～10m
23		ばかがい科	バカガイ	1	Ⅱ	北海道以南潮線下

遺跡の立地箇所を考慮すると，眼下の溶岩岩礁上にアワビ・サザエ等のⅠ型類，両側の海浜部からハマグリ等のⅡ型類群が採集できることが予想され，組成表はそれを裏付ける結果となっている。

個体数が最も多いのはハマグリで全体の半数を占めており，次にレイシ貝(8.8%)，ヒナガイ(6.7%)と続く。一方他の貝塚遺跡と比較し少数なのは，マガキ・サザエ・アワビ類であり，陸生のタニシ・マイマイ類は全く確認できなかった。

また，ハマグリ・アサリ等の淡水流入部に棲息する種がみられることは，永瀬貝塚そばを流れる谷間の河川が古くから発達していたと推測される。

参考文献

山本　愛三「第Ⅳ章　鷹島海底遺跡の自然科学的な検討」『鷹島海底遺跡Ⅱ』　鷹島町教育委員会

吉良　哲明　『原色日本貝類図鑑』　保育社　1989

また，獣骨については，大分市歴史資料館木村幾多郎氏の御教示を得た。

4　まとめ

(1) 遺跡の時代別・時期別変遷

今回の調査の目的として２つの課題がもたれていた。一つは永瀬貝塚の遺跡の範囲の確定，もう一つは縄文時代と弥生時代の２時代わたり形成された２枚の貝層の確認である。

遺跡の範囲については，９箇所の試掘調査の結果，第８試掘壙に限定され貝層の分布が確認され，極めて限られた範囲に貝塚が形成されていることが明確となった。また，その周囲からは生活跡の痕跡は全くみられず，生活域とは区別された廃棄を主とする貝塚といえる。その後の島原鉄道布線，国道251号線建設，老人ホーム建設等遺跡周辺の状況が著しく変移し，貝塚形成時の地形が保たれていないため，集落跡の場所の推定は困難であろう。

貝層は，第８試掘壙から表土を含め２枚の貝層が確認されたものの，表土層は明らかに撹乱を受けており良好な堆積状況を示していない。遺物においてもかつて発見された弥生土器は周囲を含めても全く出土しなかった。原因としては遺跡の崩壊が有力であろう。貝塚本体は丘稜先端部の傾斜地に立地しており，大雨の度に土砂崩れが予想される地域である。今回の調査ではかつて崩壊した土砂の精査は行わなかったが，遺物の確認についてはいずれ実施する必要がある。

出土遺物については，縄文時代後期中葉に限定される土器が主体であり，やや遡る可能性のあるものも一部みられるが，極めて短期間に形成された貝塚といえる。また形式としては鐘崎式を中心に，市来式等南九州系土器が混在することから，鐘崎式土器を主体として文化圏に南九州から急速に発展した市来式土器文化圏が九州西岸及び有明海を交通路として伝播した，その融合部の遺跡として認識できる。鐘崎式土器と市来式土器が共伴する県内の遺跡としては，内陸部最北端として西彼杵郡外海町出津遺跡，同多良見町伊木力・熊野神社遺跡，諫早市有喜貝塚，島原半島では南高来郡国崎遺跡，島原市三会下町遺跡，また五島列島福江市白浜遺跡があり，その遺跡の分布から海を仲介とした交易圏が判断される。

(2) 遺跡の範囲・取り扱いについて

今回の範囲確認調査にもとづいて，遺跡範囲における重要度を段階別にゾーン化したものが第11図である。遺跡の範囲が狭小であったためＡ・Ｂ，２ゾーンを設定した。

Ａゾーンは縄文時代の貝塚層が確認された範囲であり，特色ある縄文土器の出土もみられることから，遺跡の保存と説明板等の周知事業，更なる自然崩壊を防止する環境整備が望まれる区域である。また前述したように，丘稜先端部の崩壊した土砂堆積地の精査など遺跡の実態の明確化および環境整備を伴う補完調査の必要もある。対象面積は約3,200㎡である。

Bゾーンは今回調査が実施できず，貝塚層の堆積が予想される谷間の低地部である。今後ビニールハウスの立て替え及びその他の開発事業が行われる場合は，試掘調査または工事立会が必要である。対象面積は約14,800㎡である。

また，永瀬貝塚の立地する丘陵先端部付近については，貝塚を形成した集落が存在する可能性があり，大規模な開発事業等予定される場合事前に試掘調査を実施することが望ましい。

参考文献

1　平野　敏和「出津遺跡」外海町文化財調査報告書第１集　外海町教育委員会　1982

2　松藤　和人ほか「伊木力・熊野神社遺跡（概報）」多良見町教育委員会　1985

3　秀島　貞康「有喜貝塚」諫早市文化財調査報告書第５集　諫早市教育委員会　1984

4　宮崎　貴夫ほか「国崎遺跡」南串山町文化財調査報告書第２集　南串山町教育委員会　1989

5　古田　正隆「島原市の海中千潟遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告第２集　百人委員会　1974

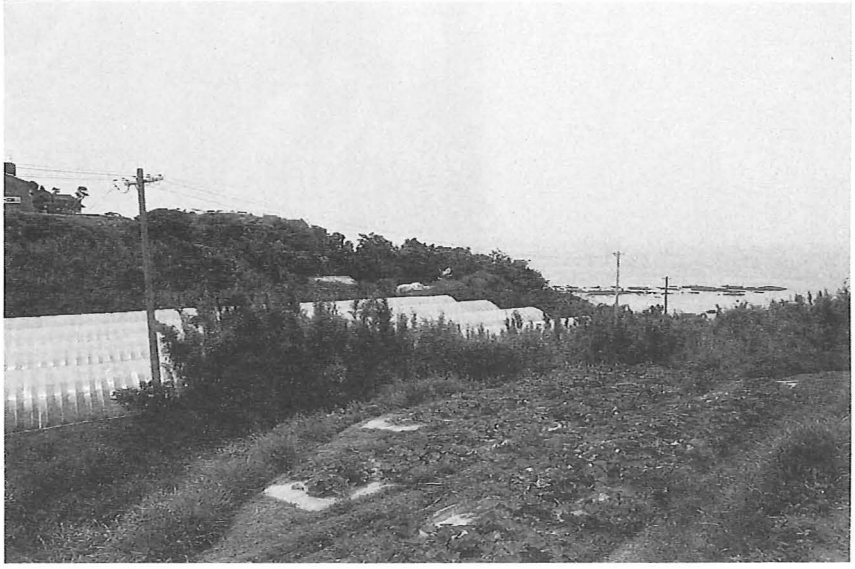
6　安楽　　勉ほか「白浜遺跡」福江市文化財調査報告書第２集　福江市教育委員会　1980

第11図　永瀬貝塚ゾーニング図（1／2,500）

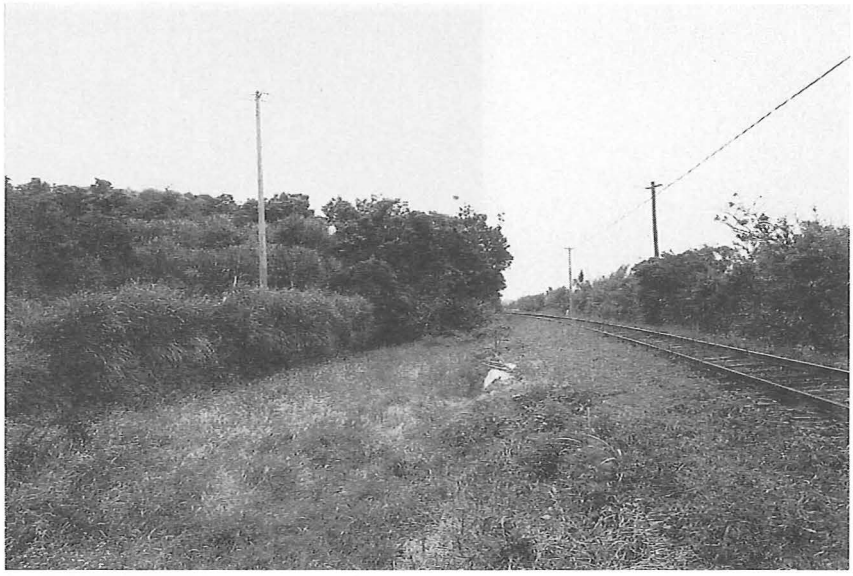
図　　版

図版1

遺跡遠景（西から）

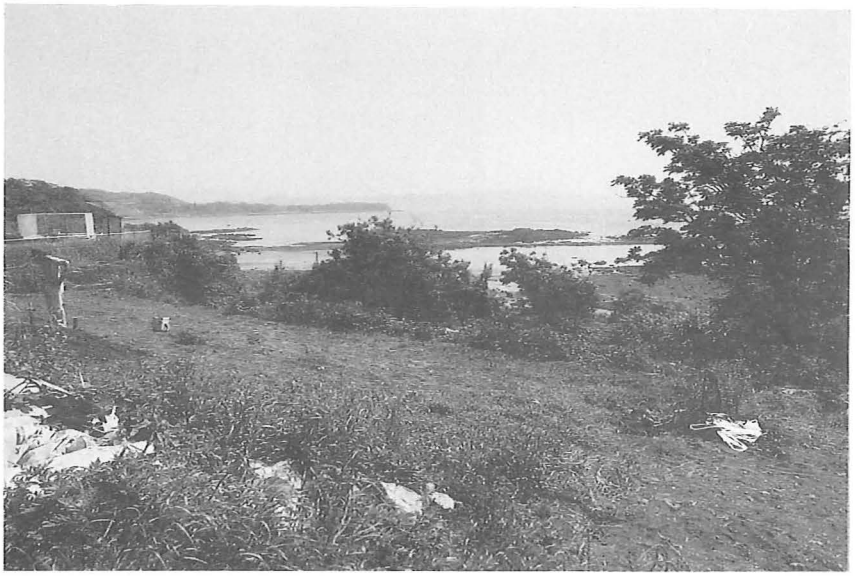


遺跡遠景（北から）

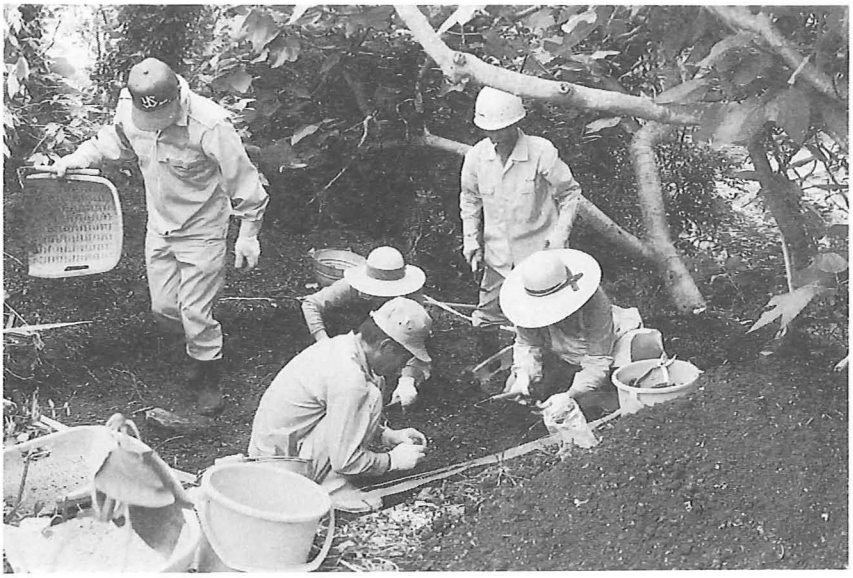


遺跡遠景

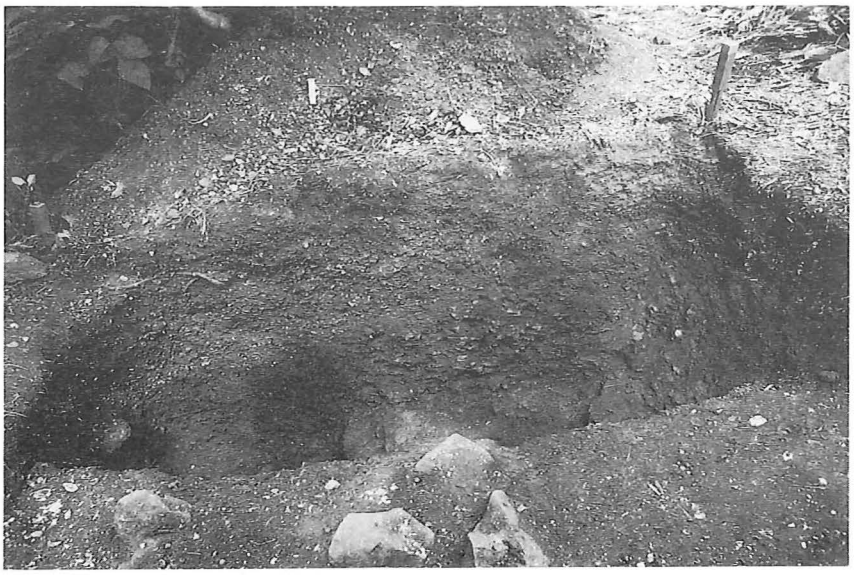
図版2



遺跡からの展望



調査風景



第8試掘壙東壁 土層

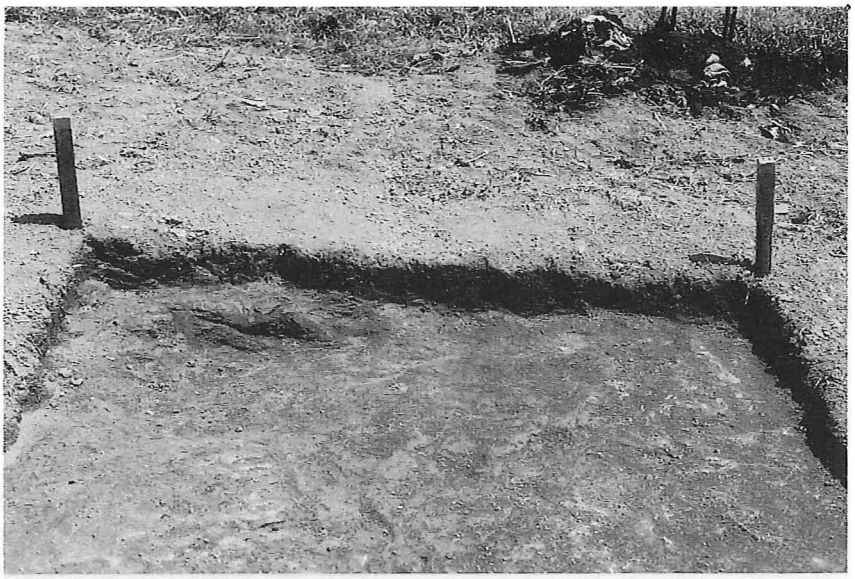
第8試掘壙北壁 土層

第8試掘壙南壁 土層

貝ガラ堆積状況

第8試掘壙近景

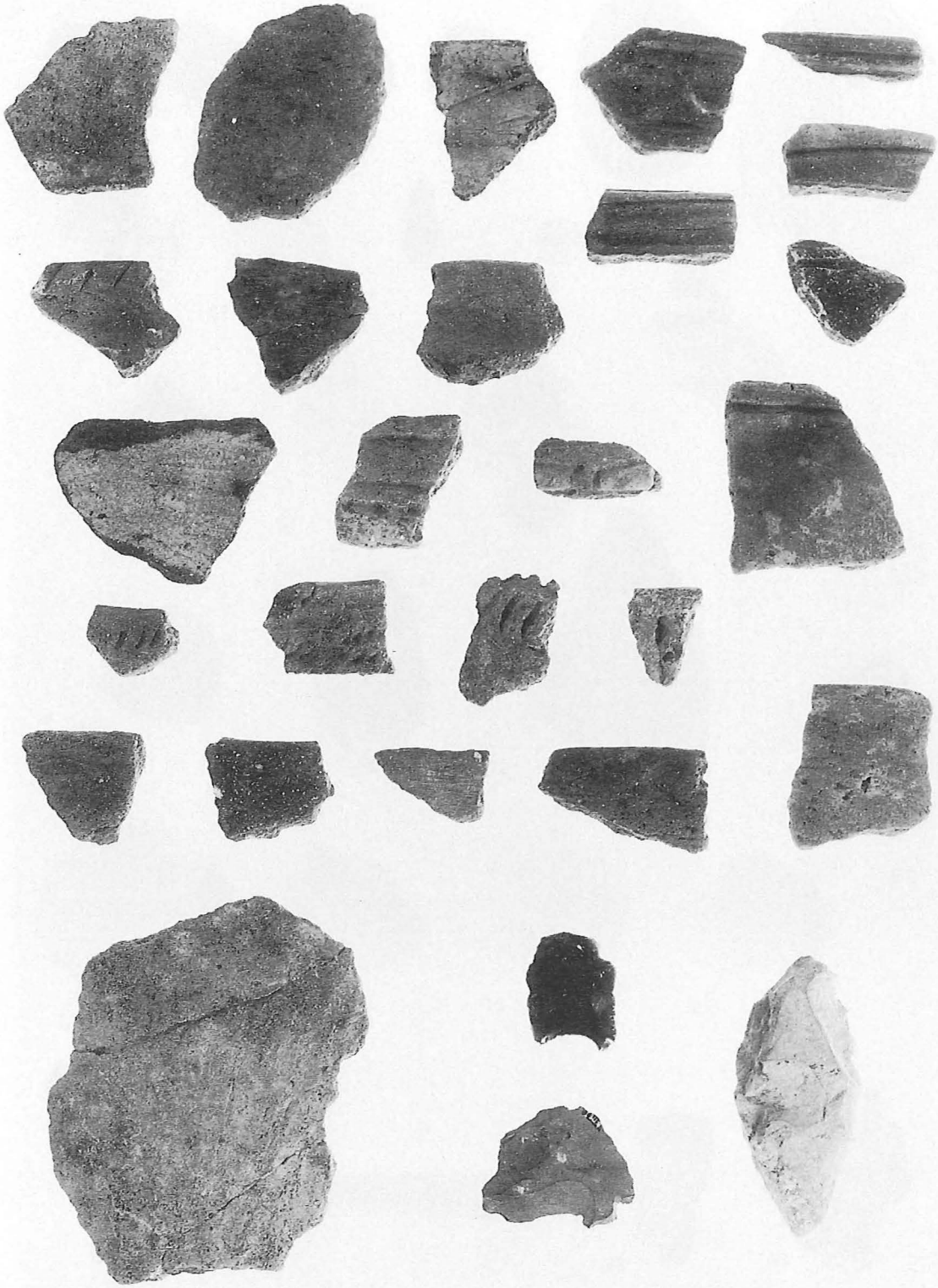
図版４



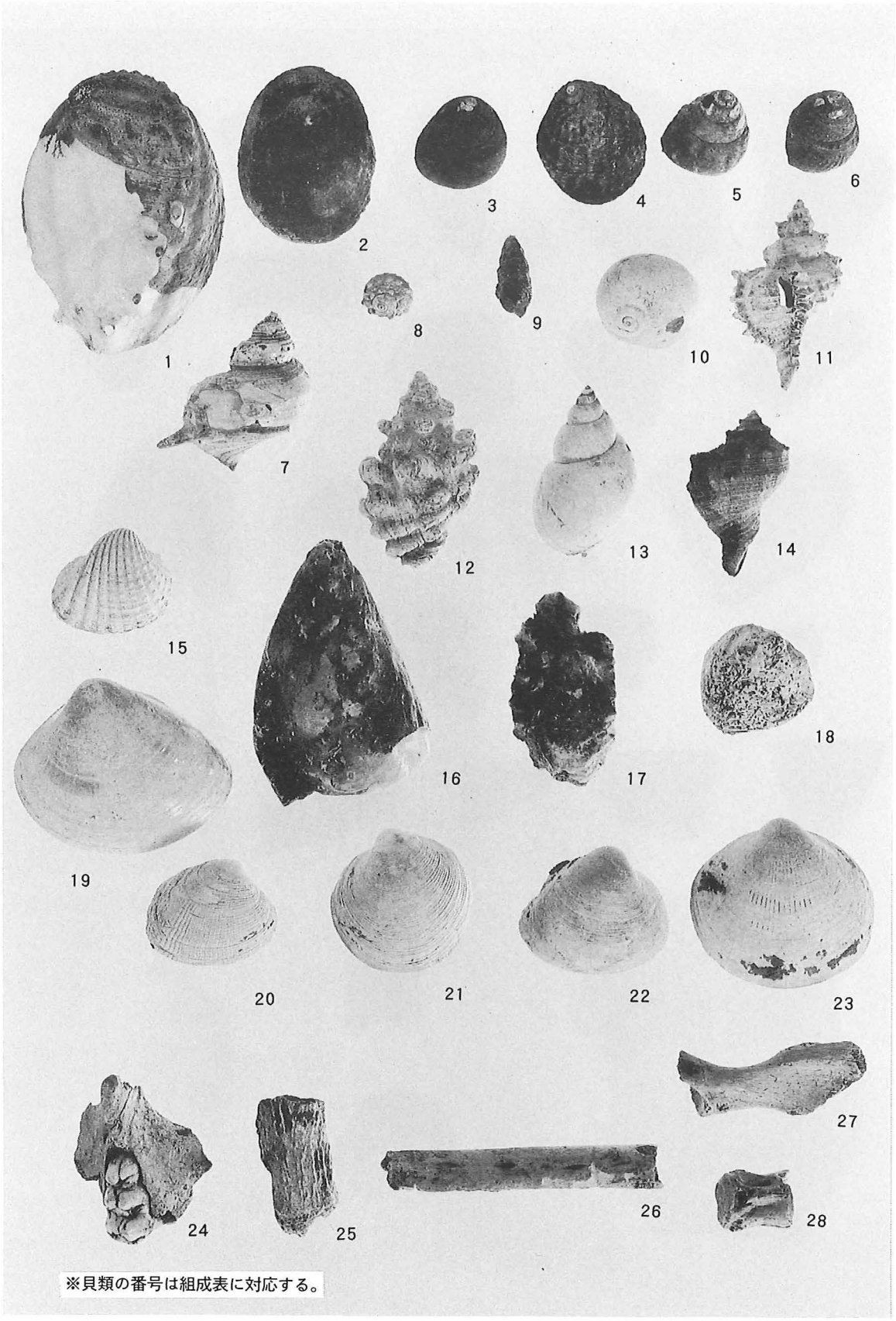
第１試掘壙

第７試掘壙東壁 土層

第９試掘壙東壁土層

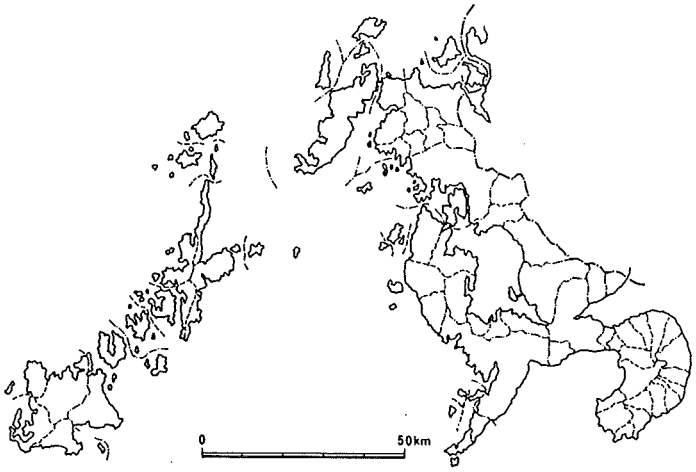


永瀬貝塚出土遺物（土器・石器）（1／2）



永瀬貝塚出土遺物（貝類・獣骨）（1／2）

Ⅱ 名切遺跡



例　　言

1．本報告は，平成５年に実施した長崎県壱岐郡郷ノ浦町に所在する名切遺跡の重要遺跡範囲確認調査の報告書である。

2．調査は，長崎県教育庁文化課が事業主体となり，壱岐教育事務所，郷ノ浦町教育委員会の協力を得て，平成６年２月21日～３月４日に実施した。

3．調査担当

長崎県教育庁文化課

文化財保護主事　　福田　一志

〃　　寺田　正剛

4．調査協力

壱岐教育事務所

所　　長　　木村　晃一

指導主事　　西　　雪晴

（現郷ノ浦町立武生水中学校教頭）

郷ノ浦町教育委員会

教育長　　平松　　正

社会教育係長　　尾関　孝人

（土地所有者）　村上健二　　横山　誠　　横山邦雄　　横山　勝利

5．本報告の執筆は１・２を寺田が，３・４を福田が分担執筆し，編集は福田が行った。

本 文 目 次

1．遺跡の立地と環境…… 35
(1) 地理的環境…… 35
(2) 歴史的環境…… 35
2．調査の経緯…… 38
3．重要遺跡範囲確認調査の概要…… 42
(1) 調査の目的と方法…… 42
(2) 調査の概要…… 43
(3) 出土遺物…… 46
4．まとめ…… 48
(1) 遺跡の時代別・時期別変遷について…… 48
(2) 遺跡の範囲・取り扱いについて…… 48

挿　図　目　次

第１図　壱岐島内縄文遺跡分布図（1/100,000）…… 36
第２図　壱岐島内主要弥生遺跡分布図（1/200,000）…… 37
第３図　かご実測図（1/4）…… 38
第４図　試掘調査(S54)・本調査(S58)区域及び貯蔵穴検出状況…… 39
第５図　昭和58年名切遺跡出土縄文土器（1/3）…… 40
第６図　昭和58年名切遺跡出土石器（1/2・1/4・1/8）…… 41
第７図　グリッド配置図（1/1,500）…… 42
第８図　土層図(1)(1/40)…… 44
第９図　土層図(2)(1/40)…… 45
第10図　出土土器実測図（1/2）…… 46
第11図　出土石器実測図（1/1）…… 47
第12図　名切遺跡ゾーニング図（1/2,500）…… 49

図　版　目　次

図版１　遺跡風景・調査区近景…… 53
図版２　土層(TP.１・２南壁）・TP.3岩盤出土状況…… 54
図版３　昭和58年貯蔵穴検出状況・平成５年度調査風景…… 55
図版４　出土遺物…… 56

1．遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

名切遺跡は長崎県壱岐郡郷ノ浦町片原触に所在する縄文時代～中世の複合遺跡である。

壱岐島は長崎県の北部玄界灘に浮かぶ南北17km，東西15km，総面積138.1km²の，本島と28の続島から成り立つ離島である。郷ノ浦町を含めた４町の行政単位で区分され，総人口約37,000人（平成２年10月現在），農業及び漁業を中心に生業が行われている。交通は佐賀県呼子港と石田町印通寺港又は福岡県博多港と郷ノ浦・芦辺浦港を結ぶ航路，福岡空港および長崎空港と壱岐空港を結ぶ空路があり，夏場は多くの観光客で賑わう島である。

壱岐島の地質はその大部分が玄武岩類により形成されており，その基盤となるのは島の本部勝本港周辺に露頭する勝本層（第三期層）である。勝本層は一般に砂岩と暗灰色頁岩の互層であり，芦辺町西方に露出する頁岩中には海棲息二枚目の化石が発見されており勝本層は海成層であるといわれている。またその上層には凝灰岩層があり，勝本町立石西触の通称「六郎瀬鼻」とよばれる海食崖の凝灰岩中には，ステゴドン象の門歯・臼歯等の化石が産出している。一方玄武岩層は，第四紀になり噴出した溶岩流の堆積であり，岳ノ辻・津ノ上山・鹿ノ辻などで火山形態を残す玄武岩質火山堆積物，岩砕（スコリア）・集塊岩・火山弾が確認されている。玄武岩層は南西側を中心に海岸線まで延びており，郷ノ浦南東の大島・長島・原島等周辺島々に至る。沖積地は主に幡鉾川流域・片苗湾最奥部を中心に発達し，特に現在圃場整備を実施している幡鉾川流域は，県内有数の水田地帯となっている。

名切遺跡の所在する郷ノ浦町は壱岐島の南西部に位置し，官公庁，高等学校が設置される行政の中心地である。またその中心を占める郷ノ浦港は，南東三島及び細崎を先端とする半島に挟まれた良港であり，福岡航路の発着地として商業地が集約されている。島内最高峰標高212.9mの岳ノ辻は港東側に位置し，格好の展望地として利用されている。

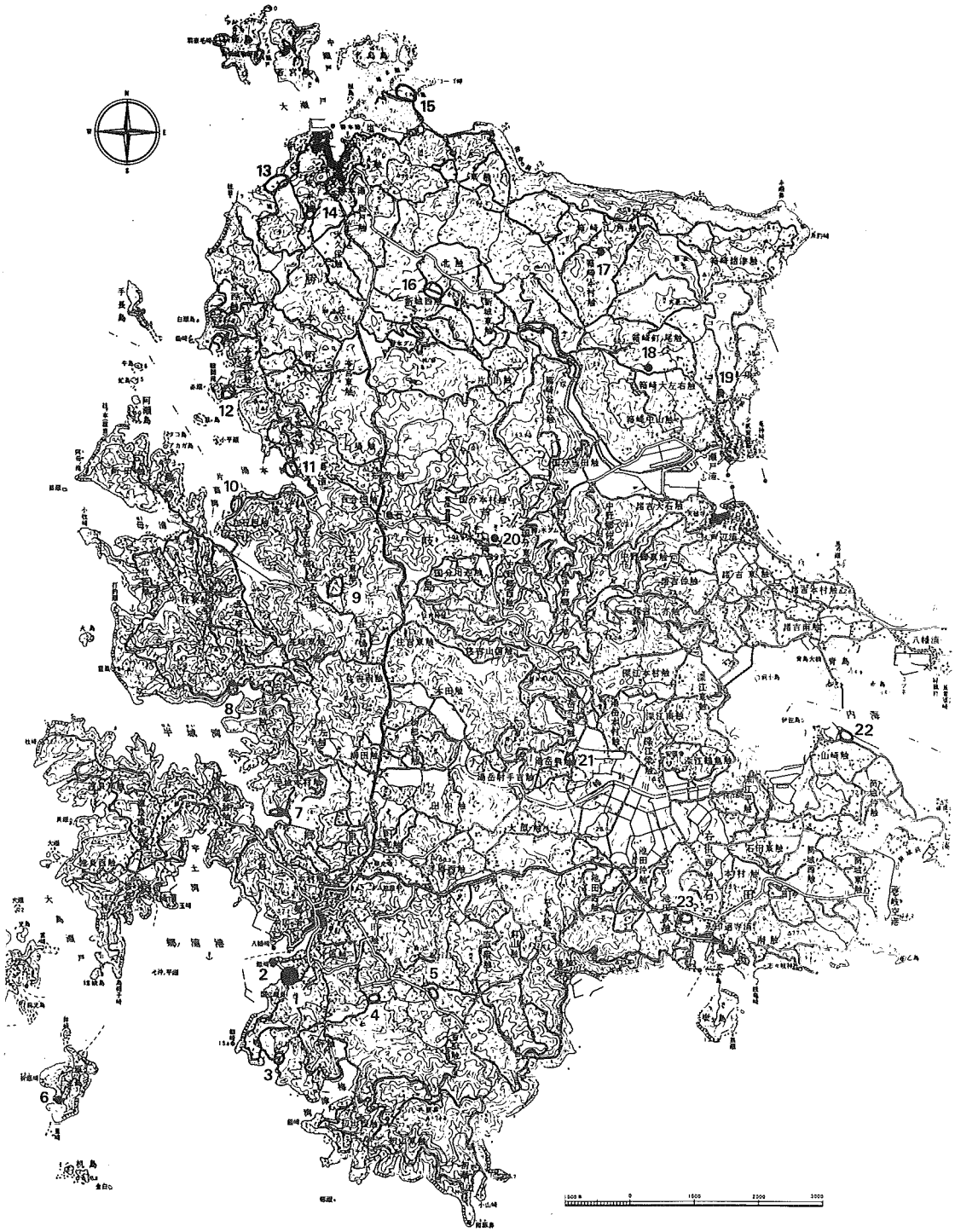
名切遺跡は，郷ノ浦港の航路発着部南側の鎌崎鼻付根部に立地した海岸低地の遺跡であり，標高3mの名切川河口の潮位付近水田地帯をその範囲としている。近年では郷ノ浦港改修やそれに伴う取り付け道路のためかつての景観が変貌しつつある地域である。

(2) 歴史的環境　　－縄文時代・弥生時代の壱岐を中心として－

名切遺跡の名の由来として，寛保２年(1742)の『壱岐国続風土記』に名切浜として記され，「なきりといえる草の生ずるところなれバ也」と伝えられている。当時の名切浜は鎌崎を含んだ海岸部と推測され，現在見られる水田は後世に開田されたといわれている。

名切遺跡及び鎌崎遺跡は，縄文時代の遺跡として周知されている。特に名切遺跡では縄文土器に伴って貯蔵穴30基が検出されており，ドングリなど堅果類の貯蔵，あく抜き用と考えられている。

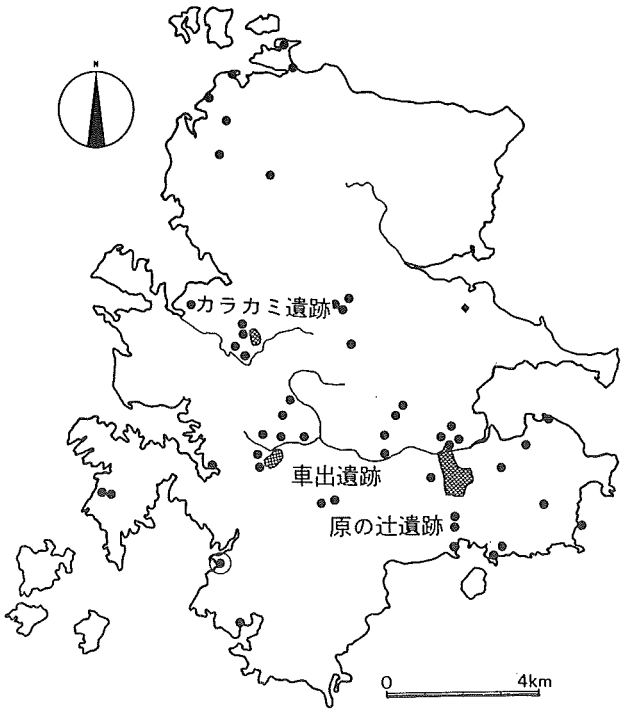
こうした縄文遺跡は壱岐島内で23箇所が周知されているが，大部分が標高０～10mの海底及び海岸低地部に立地している。郷ノ浦町内では縄文土器採集地として内野遺跡・御津ノ浜遺跡が，黒曜石製石鏃及び石斧採集地として馬立海岸遺跡・木ノ本遺跡がある。



第１図　壱岐島内縄文遺跡分布図（1／100,000）

壱岐島内縄文遺跡一覧表

1　名切遺跡　2　鎌崎遺跡　3　馬立海岸遺跡　4　木ノ本遺跡　5　原遺跡
6　池尻遺跡　7　内野遺跡　8　御津ノ浜遺跡　（以上郷ノ浦町）
9　国柳遺跡　10　大柳遺跡　11　松崎遺跡　12　浦海遺跡　13　大石・尾方遺跡
14　水ノ元遺跡　15　串山ミルメ浦遺跡　16　前神田遺跡　（以上勝本町）
17　貝原遺跡　18　大左右遺跡　19　津持遺跡　20　大谷第３遺跡　21　興触遺跡
（以上芦辺町）
22　堂崎遺跡　23　白水遺跡　（以上石田町）



第2図　壱岐島内主要弥生遺跡分布図（1／200,000）

その他島内の主要縄文遺跡として，勝本町松崎遺跡，串山ミルメ浦遺跡，前神田遺跡，石田町堂崎遺跡があげられる。松崎遺跡は，昭和54年７月湯ノ元漁港修築工事の際発見された遺跡であり，同年10月勝本町の依頼で壱岐国研究会により試掘調査が実施され，前期曽畑式土器，中期前葉並木式土器，中期中葉阿高式土器，後期前葉南福寺式土器及び磨製石斧，石鏃，石匙などが出土している。串山ミルメ浦遺跡は，昭和55年10月九州大学文学部考古学研究室と勝本町教育委員会とで合同調査が実施され，縄文中期の並木式土器が１点であるが出土している。前神田遺跡は，縄文土器７点と石鏃が採集されており，現在圃場整備のため現況は変貌しているものの他の縄文遺跡に比較し標高40m前後の内陸部に立地する遺跡である。堂崎遺跡は昭和60年５月に県教育委員会が実施した分布調査の際発見された遺跡であり，遺跡周辺の水田潅漑用溜池を掘った上げ土の中から弥生土器に混じり縄文晩期土器が出土している。

以上の成果から壱岐島における縄文時代の集落は主に西側海岸域の湾内に点在する分布を示している。現在は満潮時に海底に水没する遺跡も見られ，縄文海進および地殻変動による地盤沈降の可能性が考えられている。

その後弥生時代になると遺跡の分布に変化が見られるようになり，海岸沿いに点在していた各遺跡は内陸部に上陸し各拠点を形成する。また拠点となる条件として河川周辺に広がる沖積平野の存在があり，島内最大の沖積低地幡鉾川流域は弥生遺跡の密集地となっている。現在その拠点は幡鉾川下流域の原の辻遺跡を中心とする地域，刈田院川上流域のカラカミ遺跡を中心とする地域，幡鉾川上流域の車出遺跡を中心とする地域の３箇所が確認されている。原の辻遺跡は芦辺・石田両町にまたがった「一支国」の中心的環濠集落であり，近年の調査で３重環濠と，丘陵頂部に主殿的性格を有する掘立柱建物の検出，環濠内から木製楯・短甲，青銅製鏃等魏志倭人伝に記された倭国内乱を物語る資料が次々と出土している。カラカミ遺跡は勝本町立石東触に所在する比較的高地に形成された環濠集落遺跡であり，遺物の質量から原の辻遺跡に次ぐ勢力を有したとされている。銅鏃・鉄鏃や陶質土器の出土は北西側に開口する片苗湾を利用した大陸交渉拠点基地としての性格を裏付ける。郷ノ浦町田中触に所在する車出遺跡は近年試掘調査が実施され，丹塗土器をはじめ膨大な量の弥生土器が出土している。遺構及び金属器等は検出されておらず実態は把握されていないが，おそらく原の辻遺跡支配下の

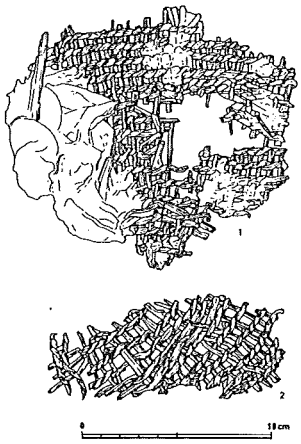
小集団集落と推測されている。

最後に縄文～弥生時代間の集落移動を，遺跡分布の変化から概観してみる。勝本湾周辺に散在する集落は統合することなく弥生時代まで引き継がれていく。湯本湾沿岸地域では片苗湾から刈田院川をさかのぼりカラカミ遺跡周辺へ統合される移動をみることができる。名切遺跡などの郷ノ浦湾及び半城湾沿岸は車出遺跡周辺への移行が想定され，生産基盤が海から平野部へ変化した過程がみられる。幡鉾川下流域については現在までのところ縄文遺跡の分布が少なく，その後の大集落へ移行する過程を判断することはできない。現時点での憶測として，原の辻遺跡は弥生時代になり新たに形成された集落であり，その集落形成の起因が例えば内地動乱により移動してきた大陸からの外来民族によるものか，又は農耕文化への転換とともに耕地を求めて各小集落が集合した在地派生的なものかの２つの仮説が想定できる。その点ではカラカミ・車出遺跡は在来民族により形成された集落であり，おそらく「一支国」成立後にその支配下に取り込まれたと考えられる。これらのことを実証できる根拠は未だ発見されてはいないが，今後弥生時代開始前後の遺跡調査及び人類学的な検証が解決する手立てとなるだろう。

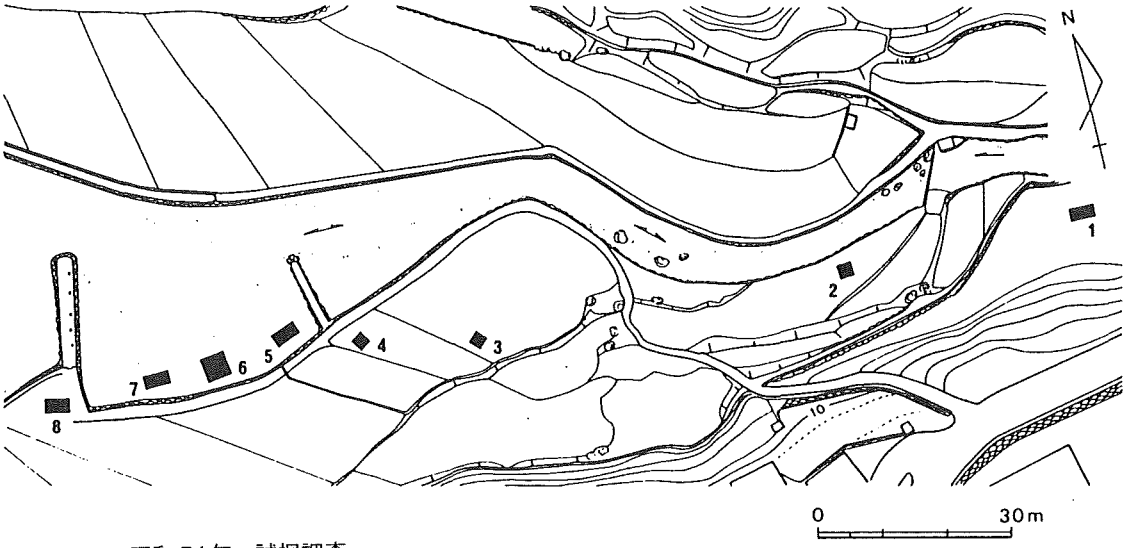
2　調査の経緯

名切遺跡の端緒は，郷ノ浦町片原触弁天崎海底に石器・土器・打製石斧・磨製石斧が出土したことに発する。その後，昭和52年５月から53年６月にかけて壱岐郷土館による表面採集が行われ，縄文時代から古墳時代の土器・石器を採集している。当時表採された縄文土器は，轟Ｂ式土器（前期初頭），曽畑土器（前期前半から後半），轟Ｄ式土器（前期後半），並木式土器（中期前葉），阿高式土器（中期），南福寺式土器（後期前葉），出水式土器（後期前葉），小池原上層式土器（後期中葉），鐘ヶ崎式土器（後期中葉），北久根山式土器（後期中葉）などである。石器では，石槍，石鏃，凹石，石皿，石銛，尖頭状礫石器，石錘などが確認されている。

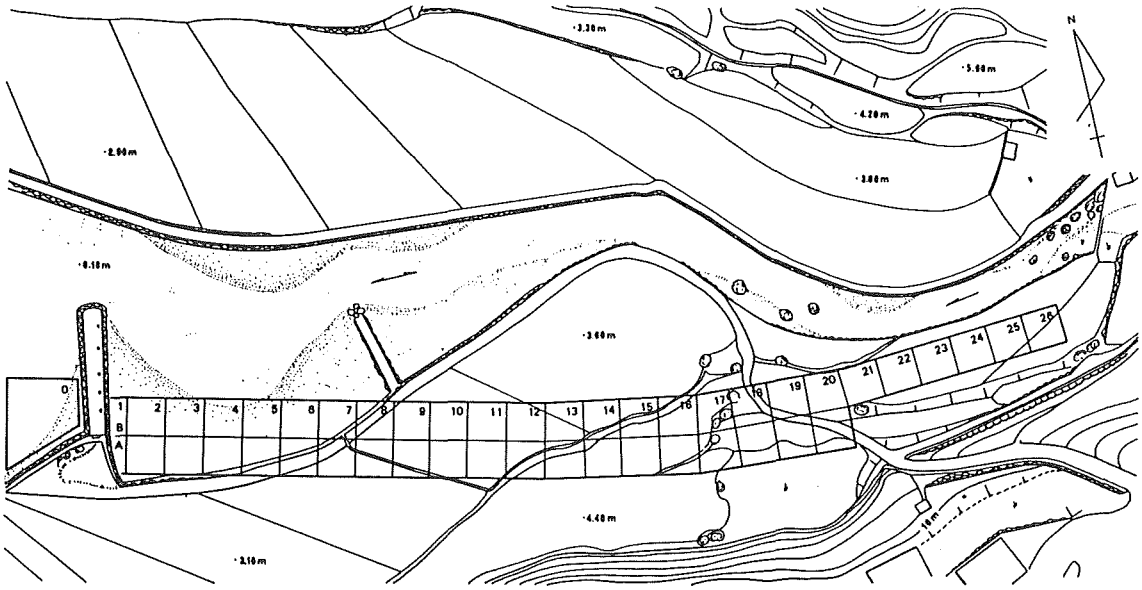
昭和54年郷ノ浦港改修整備計画が持ち上がり，鎌崎を含めた郷ノ浦港東岸域一帯の埋め立て工事が計画された。その後の協議により遺跡の消滅は免れたが，一部臨港道路が遺跡内を通ることから，長崎県教育委員会により昭和54年11月から12月にかけて試掘調査，昭和58年７月から９月にかけて本調査を実施している。調査の結果，旧石器時代の石器，縄文時代前期から晩期までの土器・石器，有孔土製品，垂飾玉，籠，弥生土器，土師器，須恵器，中近世陶磁器，滑石製石鍋の遺物が出土し，縄文時代中～後期の貯蔵穴30基が検出された。貯蔵穴は地山に掘られた袋状の形態であり，その中にドングリ・松の実などが出土している。また，カズラで編んだ籠の一部や石皿も中から出土しており，木の実を籠に入れあく抜きを行っていたことが推測されている。



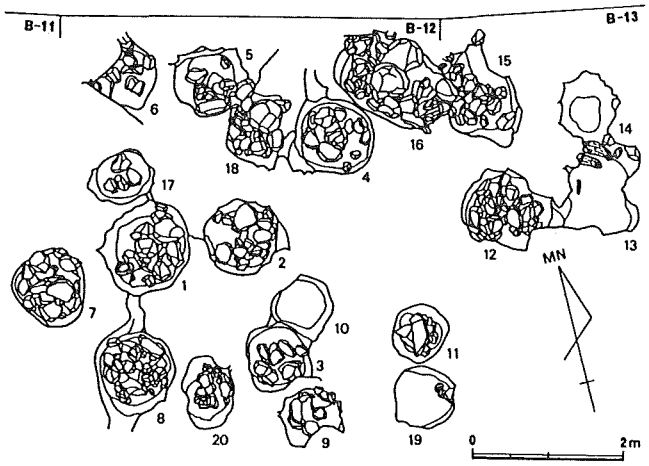
第３図　籠実測図

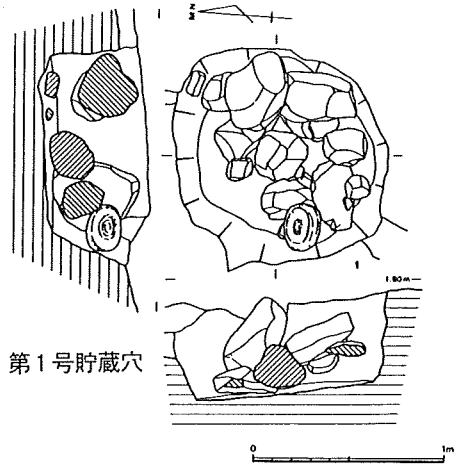


昭和54年　試掘調査



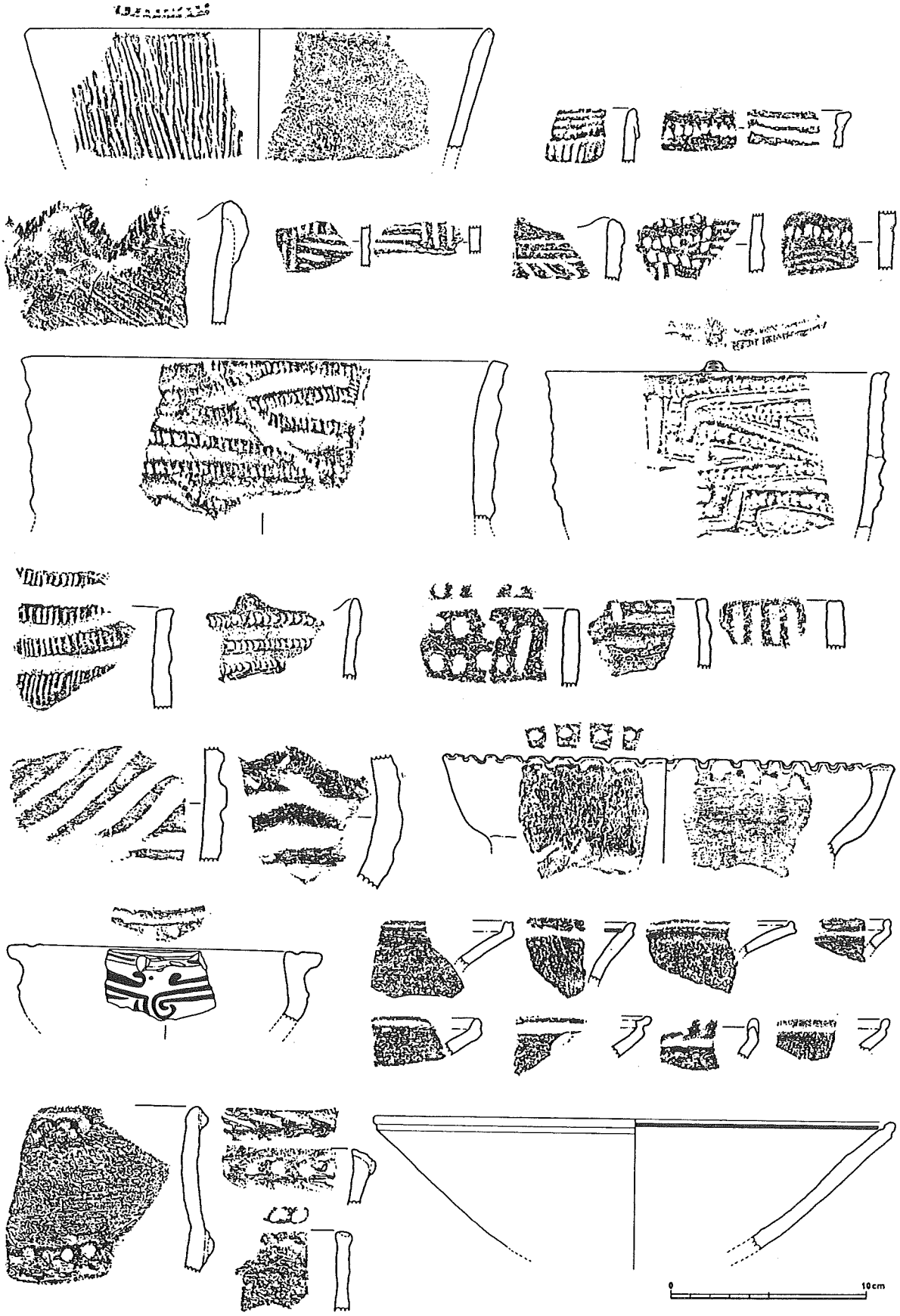
昭和58年　本調査



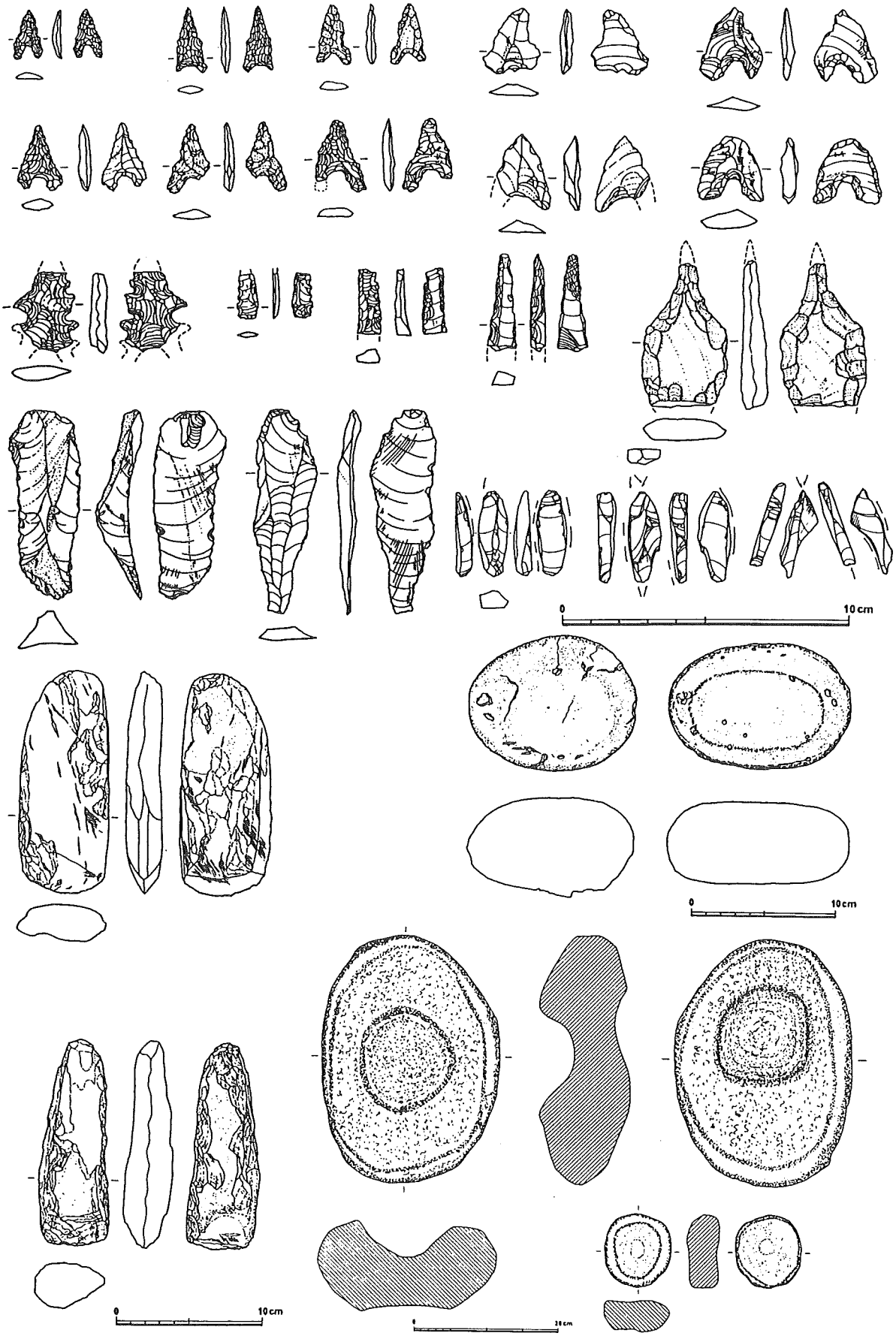


第1号貯蔵穴

第4図試掘調査（S54）・本調査（S58）区域及び貯蔵穴検出状況



第5図　昭和58年　名切遺跡出土縄文土器（1／3）

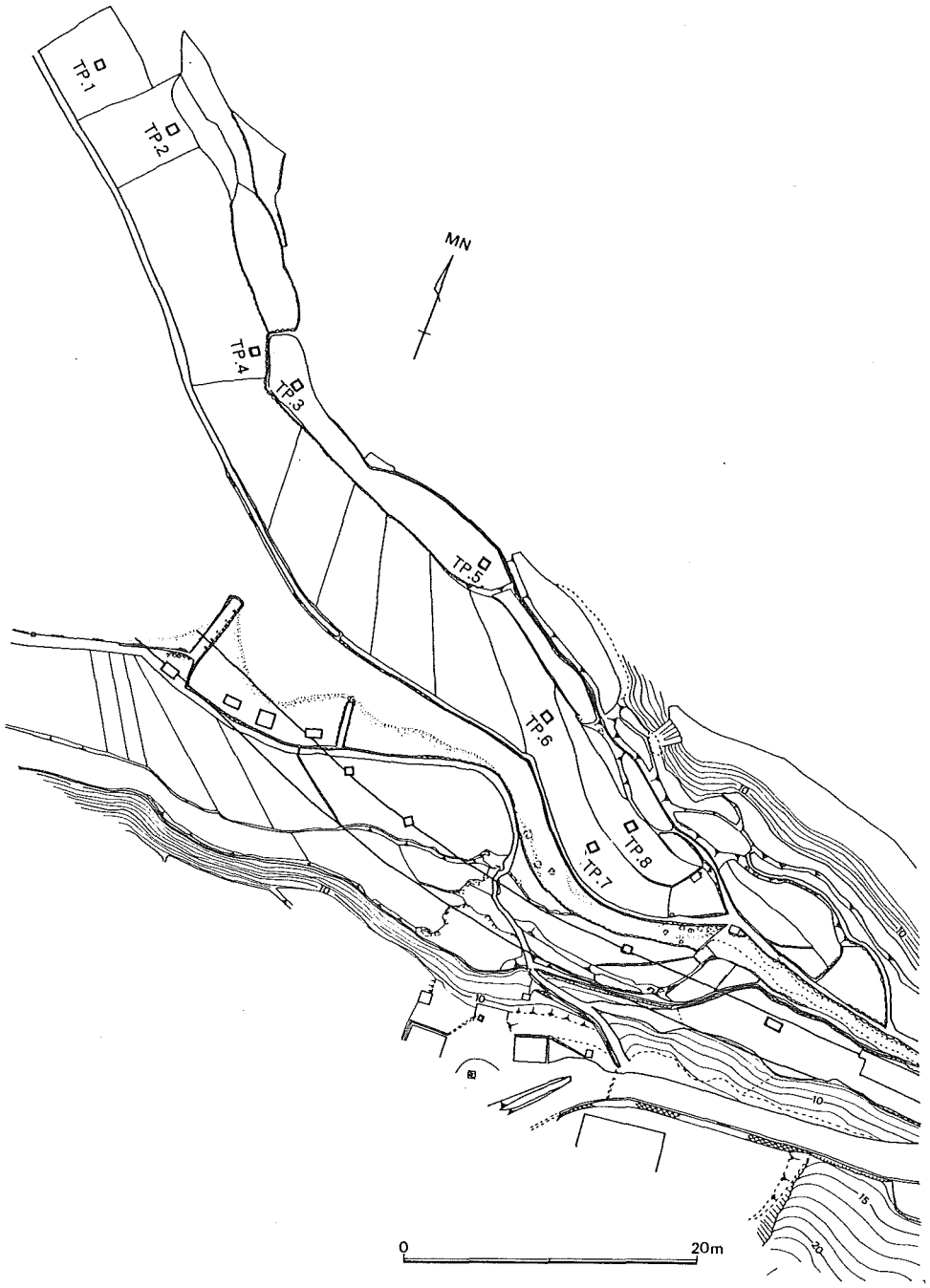


第6図　昭和58年　名切遺跡出土石器（1／2・1／4・1／8）

3．重要遺跡範囲確認調査の概要

(1) 調査の目的と方法

県内では約3,400箇所の遺跡が「長崎県遺跡地図」に記載されており，その地図をもとに各関係機関に広く周知徹底を測ってきた。しかしながら近年の開発の波の中で，緊急調査の数も一層多くな



第7図　グリッド配置図（1／1,500）

り，ややもすると遺跡破壊へと繋がりかねない事態も生じている。このような状況を鑑み，県教育委員会では，155箇所を長崎県の重要遺跡として台帳の整備を行い，遺跡の規模，性格，内容等を把握して，開発事業に対する調査・協議の基本資料とすることとした。これに伴い，平成３年度から重要遺跡の範囲確認調査を実施することになった。平成５年度は，瑞穂町の杉峰城跡，郷ノ浦町の名切遺跡，加津佐町の永瀬貝塚の３箇所がその対象となり，調査を行った。

名切遺跡は，郷ノ浦港改修にかかる取り付け道路で調査が必要となり，昭和54年に試掘調査が行なわれた。その結果工事に先立つ本調査の必要性が指摘され，昭和58年に本調査が実施された。本調査では，縄文時代中期を主体とした貯蔵穴30基が検出され，県下でも有数の生産遺跡として注目されることとなった。その特異性から重要遺跡の対象となり，遺跡の範囲がどこまで広がるか，また遺構が対岸においても認められるかを確認するため，今回の範囲確認調査となった。

(2) 調査の概要（第７図）

調査は，昭和58年調査対象域の対岸である平坦地に２×2mの試掘壙を設置して行なわれた。試掘壙は西側よりTP.1～TP.8までを設定した。以下グリッドごとに説明を加える。

TP.1　一番北側に位置し，遺跡の北限として捉えられる地域である。耕作土の下は客土で，下に大きな礫を入れ，上方にいくほど粘性の強い土を入れ込む。

TP.2　TP.1では危険と思われたので基盤まで掘れなかったが，このグリッドでは2mで基盤岩に到達した。基盤直下にわずかに砂礫層があったが無遺物層である。

TP.3　他のグリッドより，一段高い位置にある。耕作土の下は埋土が僅かに入るが，その下は岩盤となっている。この辺りから岩盤が急激に落ち込むのであろう。

TP.4　基本的にTP.1，TP.2と同様であるが，岩盤までが浅くなってきている。

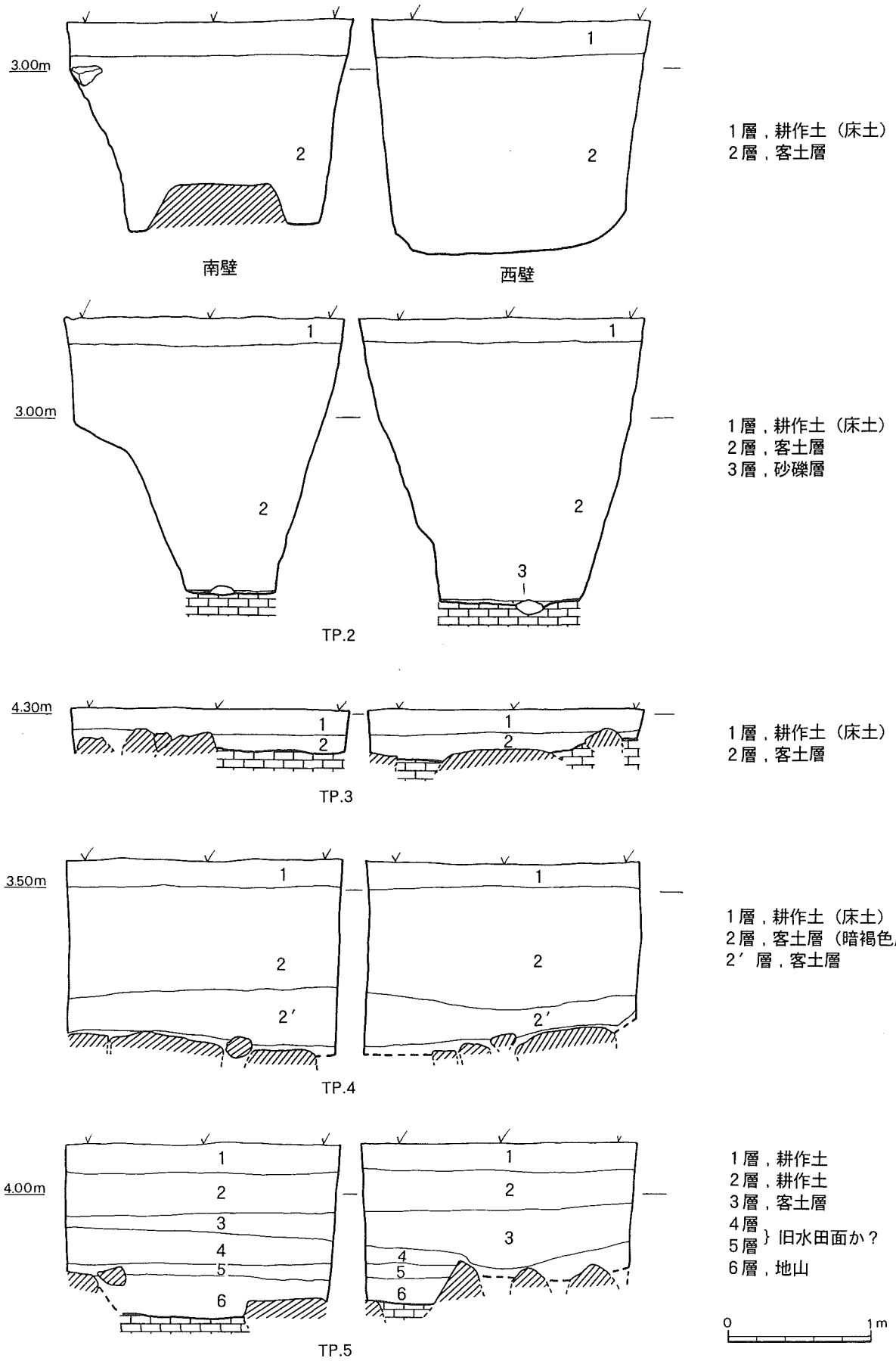
TP.5　TP.3と同じ水田面にある。層位はいくつかに分類されるが遺物の出土はなく，包含層は確認できなかった。

TP.6　2～４層は埋土だが，５層から白磁，縄文土器片，黒曜石が出土し初め，７層から多量の黒曜石片が出土している。７層は暗灰色砂利層で，ガタ匂く，遺物も黒く変色している。

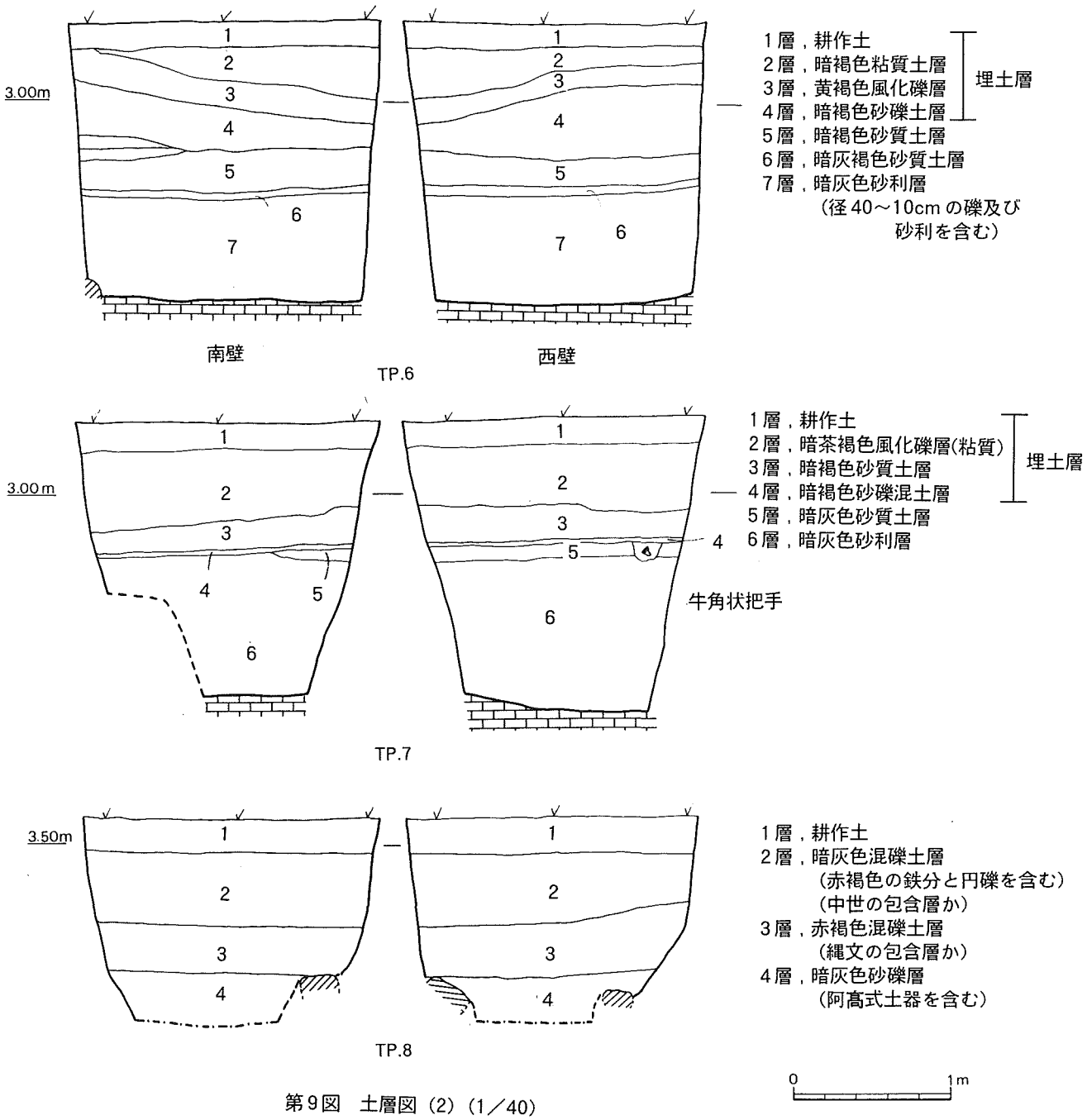
TP.7　4層面からの落ち込み内に牛角状把手が検出された。６層からは上部から弥生後期の遺物が，中部から下部には磨製石斧等，縄文を主体とした遺物が出土。

TP.8　2層上面から須恵器，白磁が出土，３層面からは若干の黒曜石片が出土している。４層は，TP.7の６層に比定できるものであり，阿高式土器を含む暗灰色砂利層である。

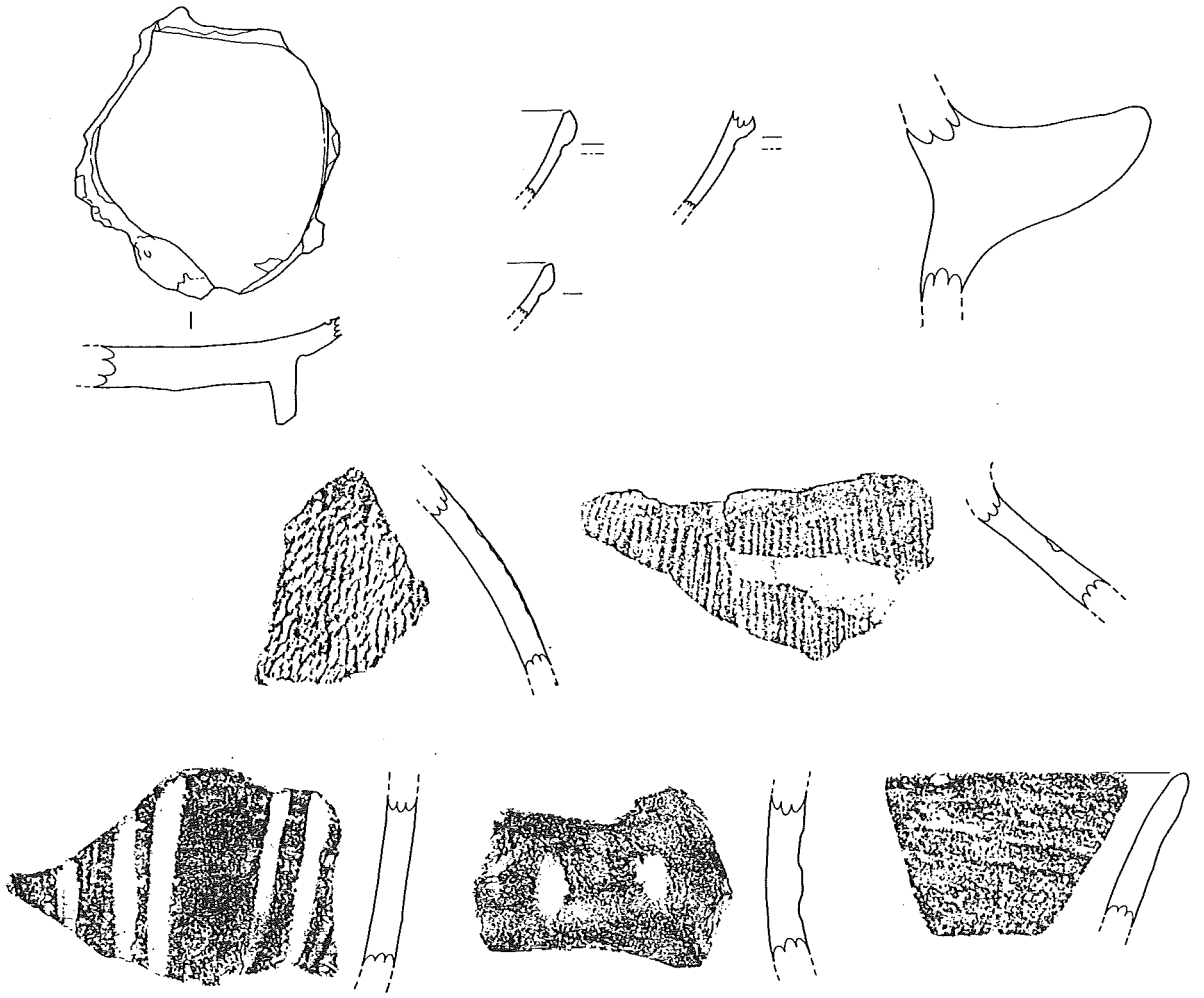
以上のことから，遺跡の北側では遺物の包含層は既に消滅しているものと判断され，名切川河口域では包含層が残存していることが確認された。但し，TP.4からTP.6の間は，地主の承認が得られなかったため試掘壙が設定できなかった。従って，この間についても包含層なり，遺構等が存在する可能性があると考えられる。


3.00m
1
2
南壁
西壁
1層，耕作土（床土）
2層，客土層
3.00m
3
TP.2
1層，耕作土（床土）
2層，客土層
3層，砂礫層
4.30m
TP.3
1層，耕作土（床土）
2層，客土層
3.50m
2′
TP.4
1層，耕作土（床土）
2層，客土層（暗褐色風化礫層）
2′層，客土層
4.00m
4
5
6
TP.5
1層，耕作土
2層，耕作土
3層，客土層
4層
5層 } 旧水田面か？
6層，地山
0
1m

第8図　土層図（1）（1／40）


3.00m
1
2
3
4
5
6
7
南壁
西壁
TP.6
1層，耕作土
2層，暗褐色粘質土層
3層，黄褐色風化礫層
4層，暗褐色砂礫土層
5層，暗褐色砂質土層
6層，暗灰褐色砂質土層
7層，暗灰色砂利層
（径40～10cmの礫及び砂利を含む）
埋土層
3.00m
1層，耕作土
2層，暗茶褐色風化礫層(粘質)
3層，暗褐色砂質土層
4層，暗褐色砂礫混土層
5層，暗灰色砂質土層
6層，暗灰色砂利層
埋土層
牛角状把手
TP.7
3.50m
1層，耕作土
2層，暗灰色混礫土層
（赤褐色の鉄分と円礫を含む）
（中世の包含層か）
3層，赤褐色混礫土層
（縄文の包含層か）
4層，暗灰色砂礫層
（阿高式土器を含む）
TP.8
0
1m

第9図　土層図（2）（1／40）



第10図　出土土器実測図（1／2）

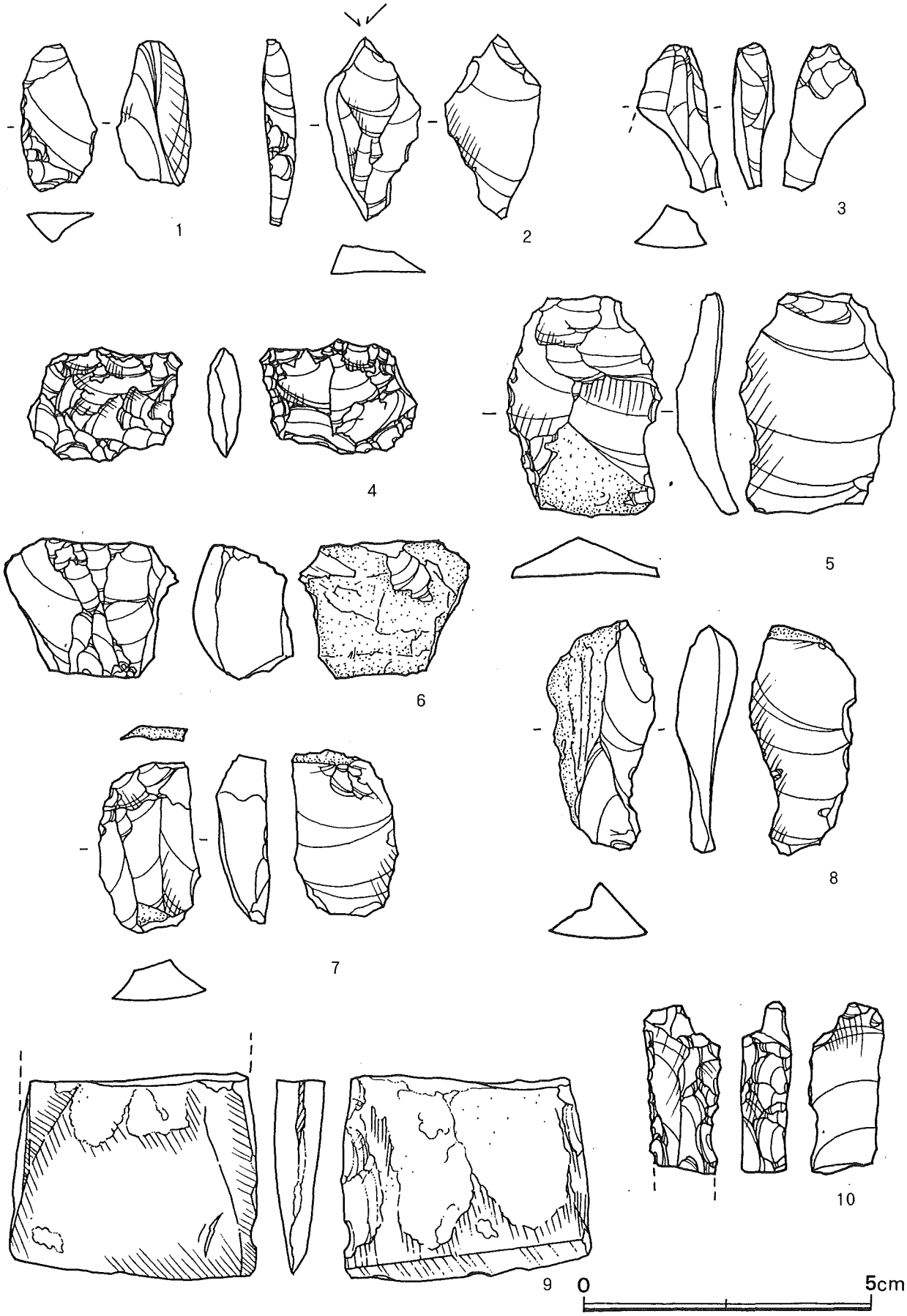
(3) 出土遺物（第10・11図）

遺物は量的には少ないが，古代・中世～縄文まで出土している。特に縄文時代の遺物では，中期を主体としているようで，先の調査とほぼ同じ内容の遺物が出土している。

土器・磁器

1～4は白磁高台と玉縁の口縁部である。1は高台部分が高く，畳付の部分が内傾している。体部と高台の境には沈線があり，見込み部においても沈線がある。白磁V類に分類されるものであろう。2・3は小さな玉縁で，体部は丸く納まるよう作られている。やや緑色を呈する。白磁II類に属する。

5は牛角状把手で，牛角部の断面は円形を呈す。内側はくぼんでおり，牛角部はやや上向きであるが，水平に近い。7の弥生土器より上部から出土したことは特筆されよう。6は縄蓆文土器で，甕の頸部にあたる。器壁表面は鉄分が付着し赤褐色を呈すが，内面は赤桃色を呈し胎土に石英粒を含む。7は外面全体に刷毛目を施した甕の頸部である。胎土には多くの石英粒が混じり，茶褐色を呈する。8・9は阿高式土器の胴部片である。8は底部付近に相当し，表面は縦の凹線を施してある。内外面とも茶褐色を呈し，多量の滑石を含む。9は凹線が明瞭でなく8よりも，退化傾向を示す。10につい



第11図　出土石器実測図（1／1）

ては器壁に条痕のような跡が見られるが，色が黒褐色に変色し，明瞭でない。

石器

剥片などが多く出土したが，製品の出土は少なかった。1は左側辺に加工痕を持つフレイクである。そのパティナの在り方から旧石器時代の所産と考えられる。先の本調査の報告でも，台形石器・三陵尖頭器など旧石器時代の遺物が出土していることから，その可能性大である。2・3は彫器である。

2は薄手の剥片の側辺に，2条の彫刀面を作り出している。3はかなりしっかりした，厚手の縦長剥片を素材とするもので，一側辺に部厚い彫刀面を作り出している。この彫器も前回の調査時に16点が出土し，それをら彫刀面の在り方から5つに分類されている。彫器が多量に出土しているのも，この遺跡の大きな特徴といえよう。4は方形に整形したサイドブレイドである。6は両極に打面をもつ石核である。7は錐状のものであろうか，断面三角形をなし，一側辺は急激な角度で面取りしてある。9は蛇紋岩製の石斧で，刃部は一方から研ぎ出され，片刃状になっている。5・8・10は剥片類を取り上げた。前回の調査では，縦長剥片が多く出土しており，縄文中期～後期における縦長剥片の剥離技術がこの遺跡にも確実に浸透していることが裏付けられている。

4．まとめ

(1) 遺跡の時代別・時期別変遷について

今回の調査により，大まかながら，次のことが判明した。

先ず名切遺跡の範囲が，昭和58年調査区を主体として，その北西部である今回の調査地点（名切川を挟む対岸の一部）にまで及ぶことが判明した。但し遺物包含層が残る地域は僅かである。また，貯蔵穴等の遺構が存在するか否かについては，今回の調査では調査面積に限度があり，判断し得なかった。遺物としては縄文中期を主体として，旧石器～古代・中世にまで至り，前回とほぼ同じ内容であった。今後の問題として，居住区がどこに存在したかを解決する必要があろう。

(2) 遺跡の範囲・取り扱いについて

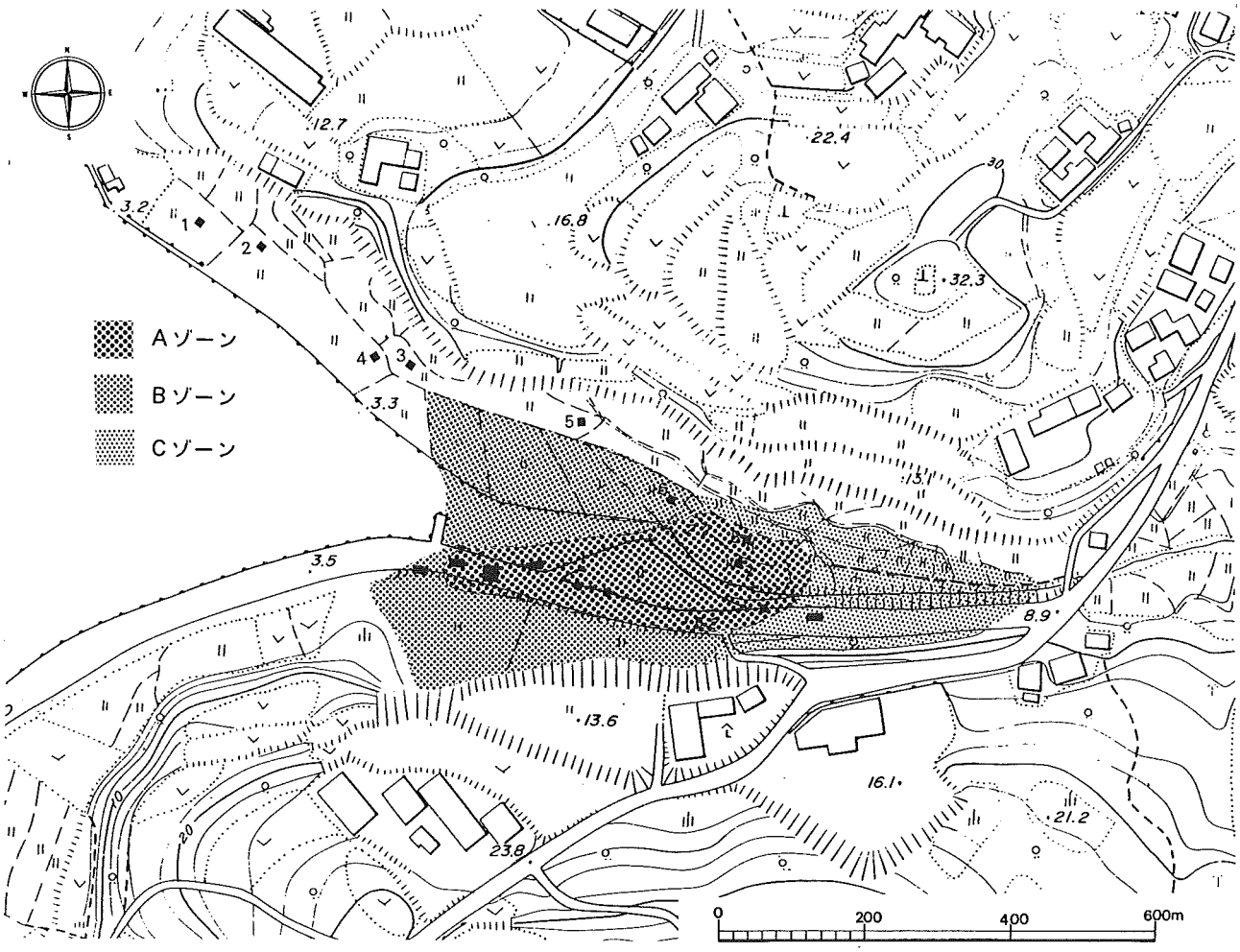
今回の範囲確認調査の調査結果にもとづいて，遺跡範囲における重要度を段階的にゾーンで示したのが第12図である。

① Aゾーン

昭和58年度調査区と同じような遺物と，包含層が出土した地域である。今回は貯蔵穴等の検出はなかったが，全体的に掘り下げると出土する可能性もある。特に名切川ぞいの上流域は今回調査できなかったが重要な地域であろう。

② Bゾーン

今回の調査では，試掘壙が入れなかった地域である。Aゾーンのそばであるとともに，前回調査区の丁度対岸にあたる。



第12図　石切遺跡　グーニング図（1／2,500）

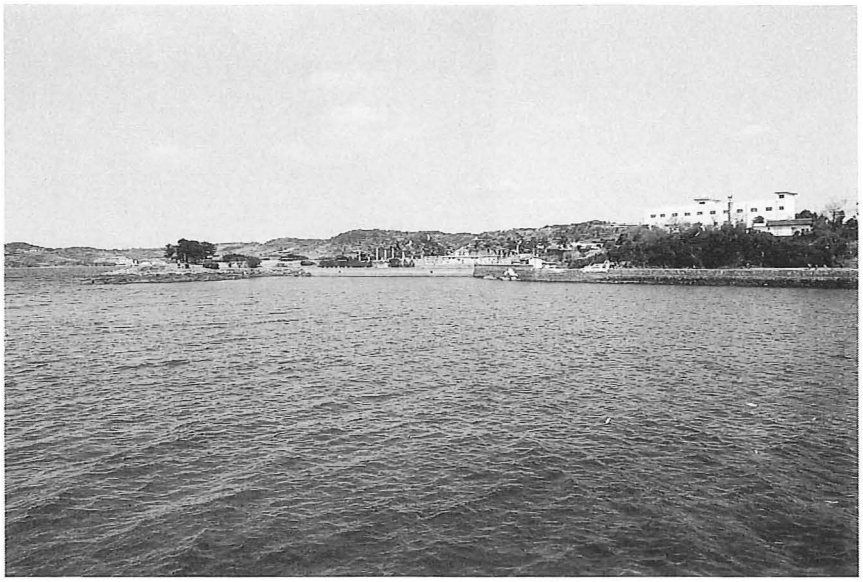
③　Cゾーン

名切遺跡の北西には，鎌崎遺跡が存在する。鎌崎遺跡もまた，名切遺跡と同じ縄文の遺跡で，あるいは名切遺跡と同一の遺跡である可能性も指摘できる。今回の調査では，遺物包含層は認められず，岩盤直上はすべて新田開発のための埋土であった。

引用及び参考文献

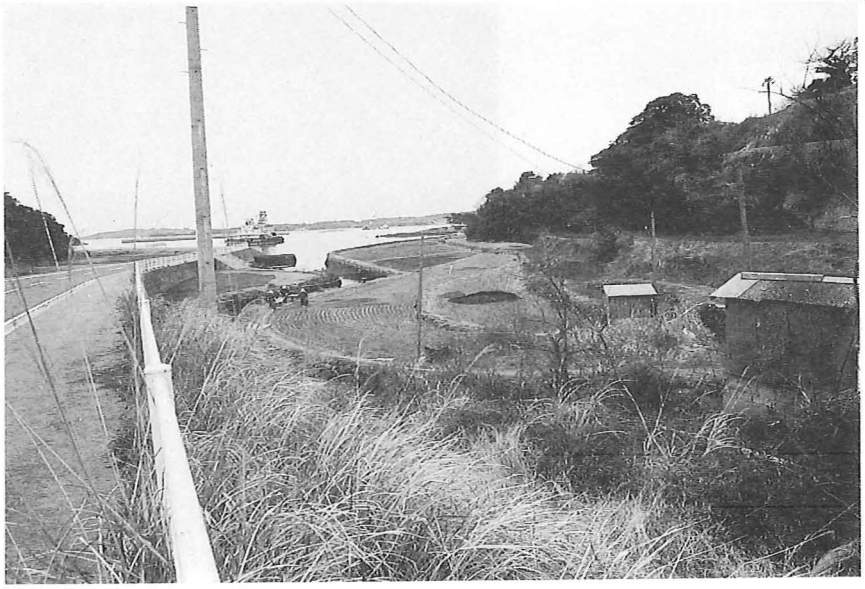
1　『土地分類基本調査』「勝本」　長崎県　1978
2　「史跡と文化遺産に富む島　壱岐」　壱岐島遺跡保存研究会　1992
3　「長崎県遺跡地図－壱岐地区－」長崎県文化財調査報告書第112号　長崎県教育委員会　1994
4　横山順　『名切遺跡』「Ⅱ　遺跡の地理的歴史的環境」　長崎県文化財調査報告書第74号　長崎県教育委員会　1985
5　『勝本町史上巻』「縄文時代の勝本」　勝本町　1985
6　平川敬治ほか「串山ミルメ浦遺跡」勝本町文化財調査報告書第４集勝本町教育委員会　1985
7　正林譲ほか「カラカミ遺跡」勝本町文化財調査報告書第３集　勝本町教育委員会　1985

図　　版

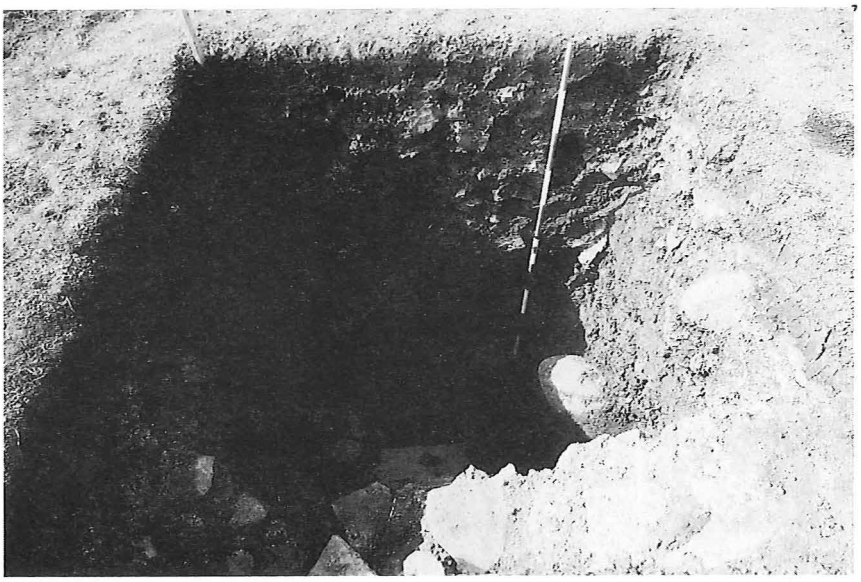


遺跡遠景

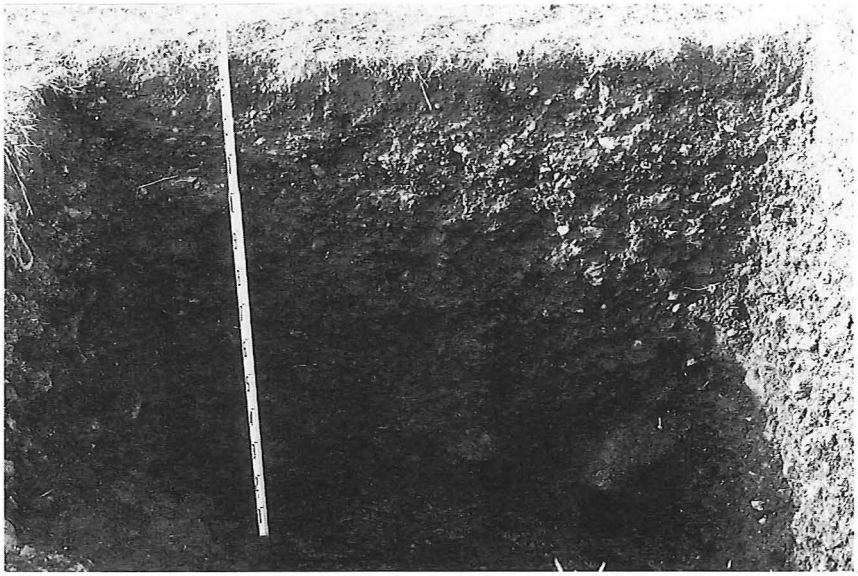
昭和58年の調査風景
中央を名切川
右岸が平成5年度調査区



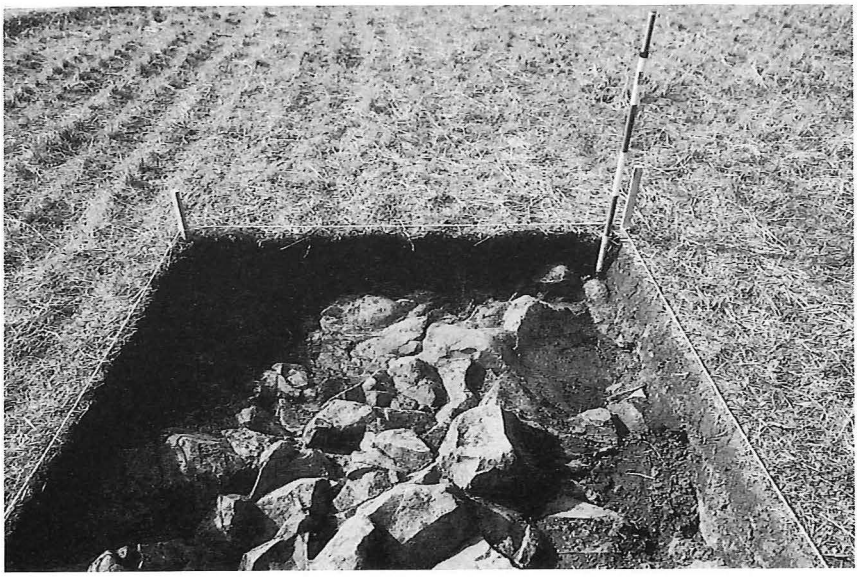
昭和58年調査区は道路
となっている
平成5年度調査区近景



TP.1 南壁

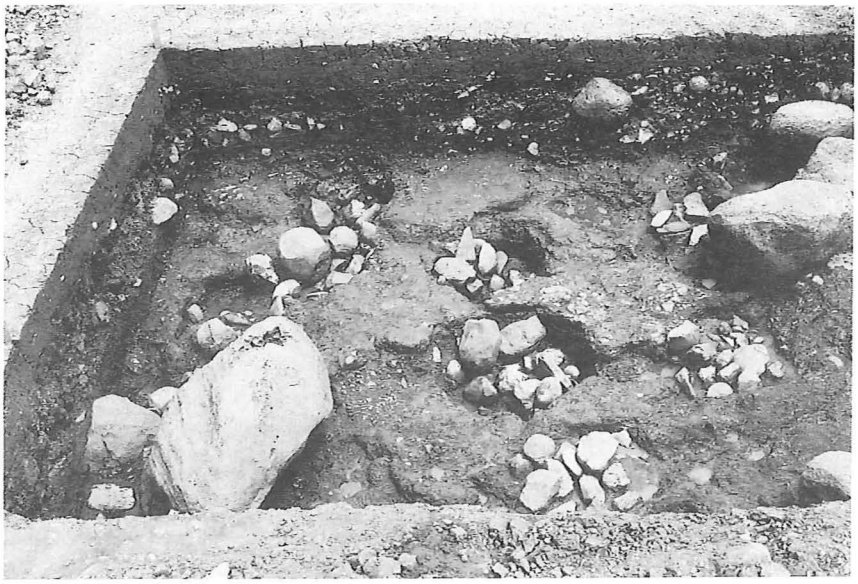


TP.2 南壁

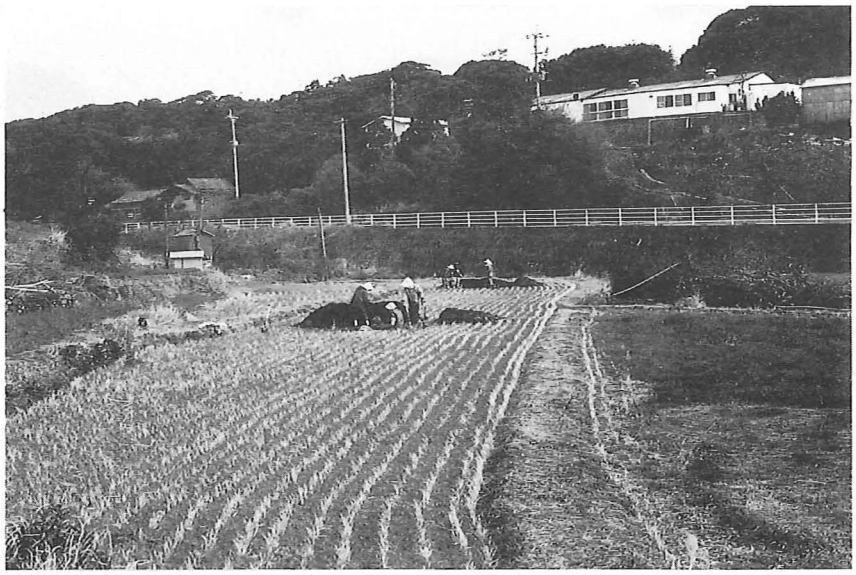


TP.3 岩盤出土状況

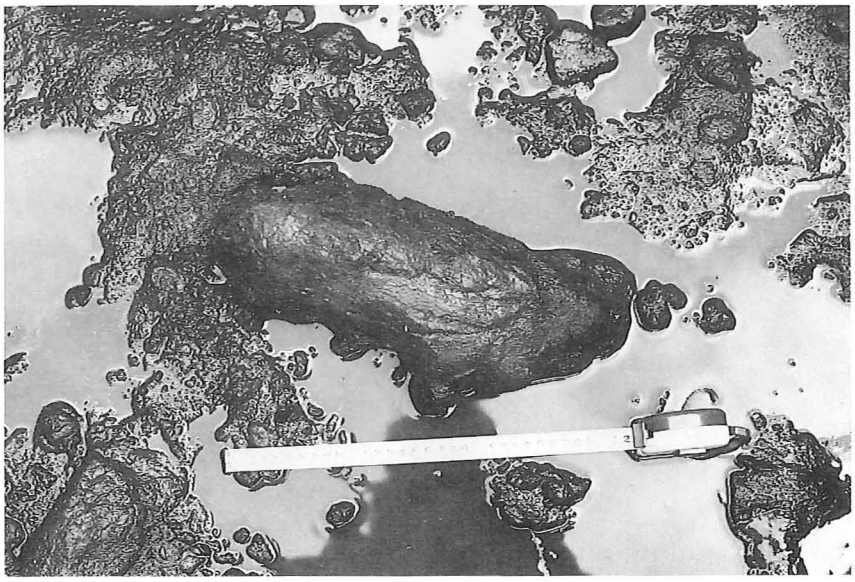
写真９

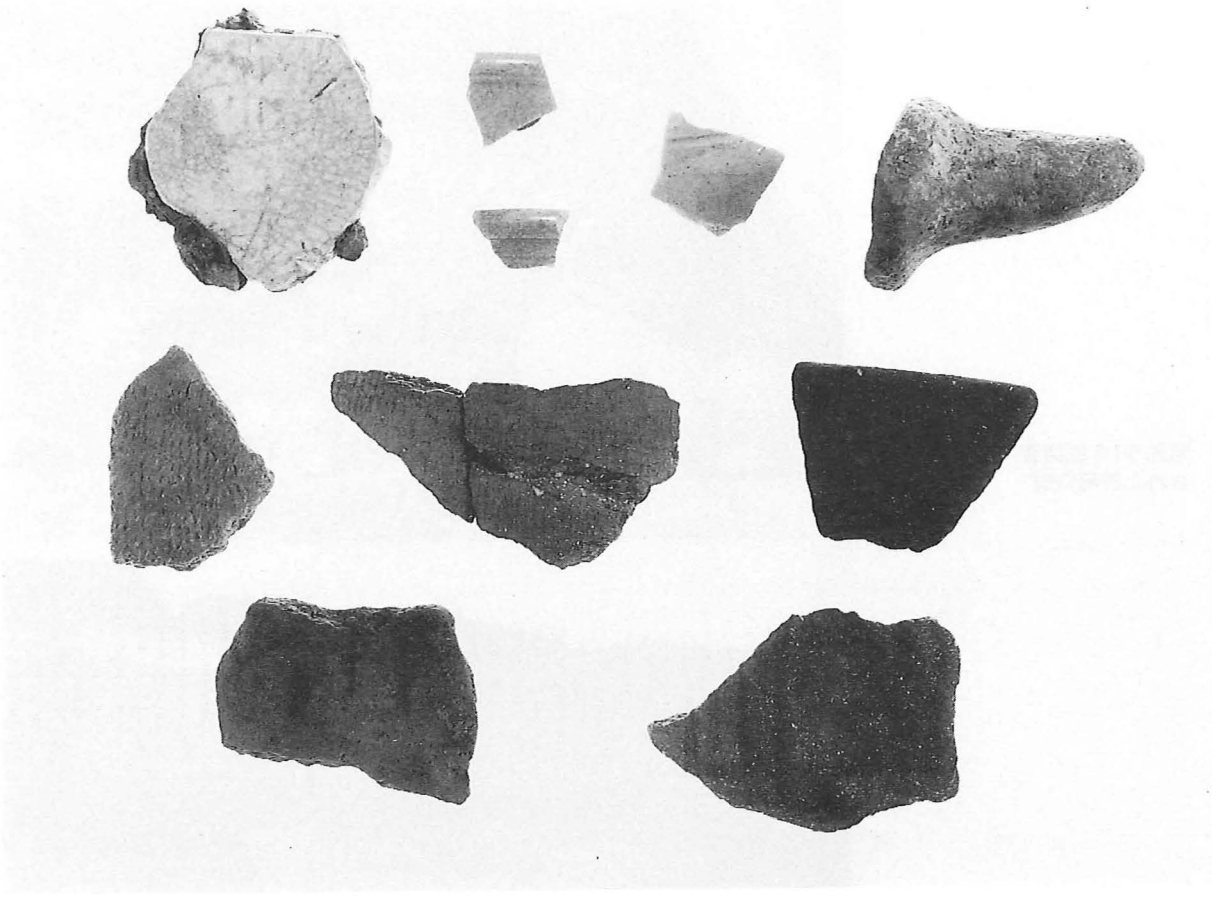


昭和58年度調査時に検出
された貯蔵穴群



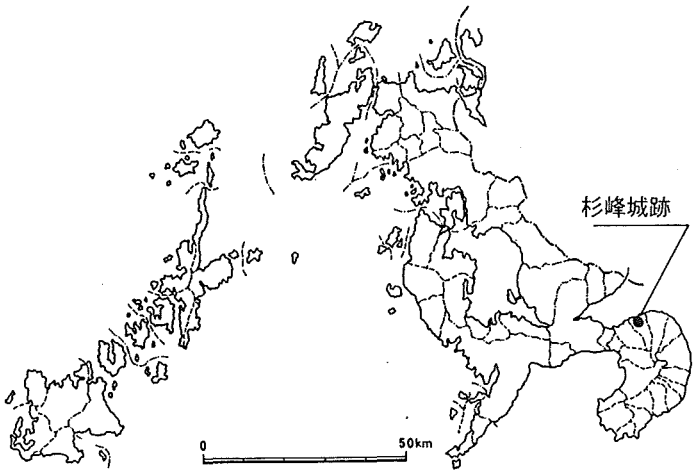
平成５年度調査風景
南西側より





名切遺跡出土遺物（上1／2下1／1）

Ⅲ 杉峰城跡（すぎみねじょうあと）



例　　言

1．本書は長崎県重要遺跡範囲確認調査事業として，平成５年度に実施した長崎県南高来郡瑞穂町に所在する杉峰城跡の発掘調査報告書である。

2．調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり，瑞穂町教育委員会の協力を得て，平成５年７月12日～９月８日まで実施した。

3．調査関係者は次のとおりである。

調査担当	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	福田　一志
	同	同	本田　秀樹
調査協力	瑞穂町教育委員会	教　育　長	上野　弘喜
	同	教育次長	中峰　達夫

4．本書の執筆は次のとおりである。

２・３・４・5(2)(6)・６　……福田

１・５(1)(3)(4)(5)　……本田

5．本書で使用した写真の撮影は遺構が福田，遺物を本田が行った。

6．本書における遺物・写真・図面等は県文化課立山分室で保管している。

7．本書の編集は福田・本田による。

本 文 目 次

1．遺跡の立地と環境…… 61
(1) 地理的環境…… 61
(2) 歴史的環境…… 61
2．調査の経緯…… 64
3．重要遺跡範囲確認調査の概要…… 64
(1) 調査の目的と方法…… 64
(2) 調査概要…… 64
4．遺構…… 66
5．遺物…… 78
(1) 土師質土器…… 78
(2) 輸入陶磁器…… 78
(3) 国産陶器…… 80
(4) その他の土器…… 80
(5) その他の遺物…… 83
(6) その他の石器…… 84
6．まとめ…… 85

挿 図 目 次

第1図　杉峰城跡周辺の地形と遺跡位置図…… 61
第2図　グリッド配置図…… 65
第3図　土塁状遺構平面図…… 66
第4図　遺構配置図…… 67
第5図　北側空掘平面図…… 67
第6図　北側空掘セクション図…… 67
第7図　南側空掘平面図…… 67
第8図　TP.1・2・3・4平面図，セクション図…… 72
第9図　TP.5・6平面図，セクション図…… 73
第10図　TP.7・8・12平面図，セクション図…… 74
第11図　TP.13・14・15平面図，セクション図…… 75
第12図　TP.16・17・18平面図，セクション図…… 76
第13図　TP.20・24平面図，セクション図…… 77

第14図　土師質土器（S＝1／3）…… 79
第15図　輸入陶磁器（S＝1／2）…… 81
第16図　国産陶器（S＝1／3）…… 82
第17図　その他の土器（S＝1／3）…… 83
第18図　その他の遺物(1)(S＝1／3）…… 83
第19図　その他の遺物(2)(S＝1／2）…… 84
第20図　その他の石器（S＝1／2）…… 84
第21図　島原半島北部の中世城郭分布図…… 86
第22図　杉峰城遺構模式図…… 89
第23図　杉峰城跡ゾーニング…… 90

表　目　次

表1　杉峰城跡周辺　遺跡地名表…… 63
表2　杉峰城跡　試掘壙一覧…… 64
表3　杉峰城跡　出土遺物一覧…… 69～70
表4　島原半島北部の中世城郭一覧…… 87

図　版　目　次

五輪塔群1…… 67
五輪塔群2…… 67
五輪塔群3…… 67
図版1　杉峰城跡遠景・近景…… 93
図版2　TP.6土塁状遺構…… 94
図版3　空掘遺構…… 95
図版4　TP.4の土塁，TP.16の土壙…… 96
図版5　南側空掘（水掘？）…… 97
図版6　各グリッド遺構検出状況…… 98
図版7　各グリッド遺構及び遺物検出状況…… 99
図版8　城周辺五輪塔群…… 100
図版9　出土遺物(1)…… 101
図版10　出土遺物(2)…… 102
図版11　出土遺物(3)…… 103

1．遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

本遺跡のある瑞穂町は島原半島の北北西に位置し，雲仙岳の裾野に広がる南北9km・東西5km，面積27.36km²の二等辺三角形をした町である。南には雲仙山系のひとつ吾妻岳がひかえ，火山性扇状地の緩やかな斜面が前面の海まで続く。山麓から細長くのびた緩傾斜地は先端部分で低い舌状台地と化し，農地や集落が営まれている。台地と台地の間には小さな谷が刻まれ，雲仙に源を発した河川が有明海に注ぎ込む。河口付近では小規模ながら沖積層が形成され，本町最大の河川である西郷川下流域等でうかがうことができる。集落は海岸線と河川に沿った台地裾にみられるが，杉峰地区・馬場地区のように台地の稜線上を走る縦道沿いに発達する例もある。

(2) 歴史的環境

瑞穂町内には22箇所の縄文～近世にいたる遺跡が存在する。両隣の吾妻町・国見町と比較してみると遺跡数は少ないが，中世の城館跡はほぼ等しい。ここでは中世城郭を中心にしながらも，杉峰城跡周辺の遺跡を各時代別に概観していくことにする。

縄文時代の遺跡では吾妻町の弘法原遺跡，国見町の筏遺跡があげられよう。弘法原遺跡は縄文時代の遺物包含層から早期の押型文土器が多数出土したことで知られ，遺跡範囲の広大さからもこの地域の代表的遺跡といえる。筏遺跡は過去８回も発掘調査が実施されたことからわかるように，県内でも有数の縄文遺跡である。縄文後期の遺物が大量に出土し，カメ棺墓60基のほか土壙墓，柱穴跡，炉跡

第１図　杉峰城周辺の地形と遺跡位置図

などの遺構も発見され，集落遺跡であると予想されている。

弥生時代の遺跡については遺物出土の報告はあるものの，実態はあまり明確ではない。狭いながらも沖積地や舌状台地をひかえ，集落遺跡が営まれる条件はある程度そろっている。強いていえば町内でも数少ない平野部に立地する伊古遺跡などが候補にあげられよう。

古墳時代では有力古墳が吾妻町に集中する。島原半島唯一の前方後円墳である守山大塚古墳は全長66m，前方部幅15m，高さ2.5m，後円部径45m，高さ7.2mを計り，典型的な前期古墳の形態をもつ。表採された二重口縁壺の破片から4世紀代の古墳であることは確実で，県内でも最古の部類に入る。隣接する丸塚古墳もこれと相対する時期の古墳であろうと推測される。発掘調査が行われたものでは瑞穂町内の柿ノ本古墳がある。7世紀中～後半に比定される直径12mの円墳で，内部主体に横穴式石室をもつ。玄室内からは金・銀環や玉類のほか鉄鏃などが出土している。

古代の遺跡としては吾妻町の山田条里跡・守山条里跡があげられる。国見町の六ノ坪条里跡も条里地名が残っており，それぞれ沖積平野が発達した部分に条里が実施されたのであろう。瑞穂町内にも大坪・市之坪・京ノ坪の地名が残るが，条里地割の方は現在では確認できない。これらの条里は後に荘園化され，県下で最も多くの荘園が成立する地域となる。

中世の遺跡では在地土豪の城郭があげられる。島原半島の中世山城は47を数えるが，18が北部の3町（吾妻・瑞穂・国見）に集中する。幾つもの土豪が各時代を通して群雄割拠し，緊張状態の中にあったことは想像に難くないが，台頭するだけの勢力基盤を持ち合せていたことも見逃せない。城郭は地形上の制約からほとんどが平城か平山城で，舌状台地の先端部を利用したものが多い。構造もほぼ似通っている。最も古い城郭とされているのは多比良城で，平安末の肥前国の住人日向通良が構えたと伝えられるが定かではない。多比良氏はその子孫といわれている。以下，中世各期の城郭を順に見ていくと，鎌倉後期には神代氏の神代城，大河氏の大河城，伊福氏の高田城があげられる。神代氏は神代直の子孫と伝えられるが詳細は不明である。大河氏は文治二(1186)年，綾部幸房から宇佐宮領であった伊福・大河・伊古の所領を四男幸明が譲り受けたことに始まり，そののち三男道行が仁治二(1241)年に伊福を分割相続して伊福氏を名乗るようになった。南北朝期には前出の神代城，多比良城に加え，西郷氏の杉峰城，田原氏の山田城があげられる。鎌倉時代に瑞穂町内に見られた大河・伊福・伊古の在地領主の名前は南北朝期には姿を消し，代わって西郷氏が登場する。この地が西郷氏の支配下に入ったものとの推測もある。西郷氏の出自については，肥前綾部氏の分流とも肥後菊池氏の一族ともいわれ定かではない。田原氏は豊後の領主で山田荘に地頭職をもつ。九州探題今川了俊の命に従い，北朝方の拠点として山田城を築く。神代・多比良・西郷氏らは菊池氏に従い南朝方に属した。戦国期は島原半島の覇権を目指す有馬氏と，対立する神代氏の構図が城郭にあらわれる。有馬氏側は多比良城ほか家臣が築いた結城・高田・守山・向・山田の各城があり，神代氏側は神代城はもとより家臣達の浅井・大坪・尻無・岡・鍵峰の各城がある。結局，有馬晴信が和議と偽り神代貴茂父子を謀殺し，島原半島一帯を手中に納めることとなった。

表1　遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	種別	立地	時代
1	守山城跡	吾妻町古城名字二又	城跡	丘陵	中世
2	二又遺跡	〃　〃　〃	遺物包蔵地	〃	弥生
3	ガラングチ廃寺跡	〃　〃　字萩ノ本	寺跡	〃	近世
4	源華寺跡	〃　本村名字矢坂	〃	〃	中・近
5	向城跡	〃　〃　〃	城跡	〃	中世
6	長塚古墳	〃　〃　字大塚	古墳	平野	古墳
7	丸塚古墳	〃　〃　〃	〃	〃	〃
8	守山大塚古墳	〃　〃　〃	〃	〃	〃
9	守山条里跡	〃　本村名～古城名	条里遺構	〃	奈良
10	前田遺跡	〃　古城名字前田	遺物包蔵地	河岸段丘	弥・古
11	浜津遺跡	〃　本村名字浜辺	〃	丘陵	縄文
12	浜津石棺群	〃　〃　〃	墳墓	〃	弥生
13	剣柄神社古墳	〃　〃　字谷	古墳	〃	古墳
14	猫塚	〃　〃　字小路	墳墓	〃	〃
15	犬塚	〃　〃　〃	〃	〃	〃
16	横山古墳	〃　〃　字大園	古墳	〃	〃
17	大園遺跡	〃　〃　〃	遺物包蔵地	〃	縄文
18	女田遺跡	〃　〃　字女田	〃	河岸段丘	〃
19	蓮光寺跡	〃　〃　字谷頭	寺跡	丘陵	近世
20	坊屋敷石棺	〃　平江名字坊屋敷	墳墓	〃	弥・古
21	西光寺跡	〃　〃　字西光寺	寺跡	〃	近世
22	杉山古墳	〃　本村名字杉山	古墳	台地	古墳
23	上原古墳	〃　平江名字上原	〃	平地	〃
24	下鬼塚石棺	〃　〃　字下鬼塚	墳墓	台地	弥・古
25	古路松塚古墳	瑞穂町夏峰名字古路山	古墳	丘陵	古墳
26	鍵峰城遺跡	〃　〃　字鍵峰	城跡	〃	弥・中
27	岡城（夏峰城）跡	〃　〃　字城	〃	〃	中世
28	陣ノ内遺跡	〃　岡名字陣ノ内	遺物包蔵地	河岸段丘	弥・古
29	柿ノ本古墳	〃　〃　字柿ノ本	古墳	丘陵	古墳
30	高田城跡	〃　高田名字城	城跡	〃	中世
31	京ノ坪遺跡	〃　〃　字京ノ坪	遺物包蔵地	河岸段丘	古・奈
32	大河城跡	〃　大川名字宗原	城跡	丘陵	中世
33	高石遺跡	〃　古江名字高石	遺物包蔵地	〃	弥生
34	杉峰城跡	〃　古江名字城・杉峰名城ほか	城跡	〃	中世
35	伊古遺跡	〃　伊古名字池田・馬場・鎌田	遺物包蔵地	平野	弥・古
36	尻無城跡	〃　栗林名字古城（西郷甲）	城跡	丘陵突端	中世
37	経塚	〃　小賀口名字野口（西郷）	石造物	丘陵	〃
38	鶴亀城跡	国見町神代名字城上	城跡	〃	〃
39	鍋島陣屋跡	〃　〃　字小路	陣屋跡	平野	近世
40	長浜城跡	〃　片田名字汕手	城跡	丘陵	中世
41	原遺跡	〃　〃　字原	遺物包蔵地	〃	縄文
42	神代上古賀遺跡	〃　上古賀名字皮籠石	〃	〃	〃
43	西原遺跡	〃　片田名字西原	〃	〃	〃
44	上里遺跡	〃　上古賀名字赤松	〃	〃	〃
45	赤松遺跡	〃　〃　〃	〃	〃	弥生
46	土井下遺跡	〃　山ノ上名字土井下	〃	〃	縄文
47	堀ノ口遺跡	〃　〃　字堀ノ口	〃	〃	〃
48	大坪城跡	〃　〃　字中垣	城跡	平野	中世
49	筏遺跡	〃　東里名字筏	遺物包蔵地	〃	縄・中

2．調査の経緯

(1) 調査の経緯

杉峰城については「日本城郭大系」17　長崎・佐賀に詳しく解説がなされている。それによれば，城の形式は平山城，遺構として本丸・出丸・水掘・空掘・石垣・用水路・井戸としている。また，観応三年(1352)に北朝方の小俣氏連によって，南朝方として杉峰城に拠っていた西郷次郎が攻められ落城したと『北肥戦誌』にあることなどから，城の構造とともに，城主や年代が特定できる城として重要であるとされている。このことから本県の重要遺跡の一つに数えられた。

この杉峰城も，過去２回調査が行われている。平成３年８月の瑞穂町文化財保護協会主体で行われた台地南側の調査では，中世の遺構・遺物が出土している。遺構については，東西に伸びる溝状遺構が検出され，中世の陶磁器やスラッグ等が出土しており，鍛冶関連の遺構が近くにあったものと考えられる。平成４年１月の調査では，出丸とされる部分の最先端部を調査している。薄い包含層が確認され，中世の土師器などが若干出土したが遺構については検出されていない。この部分は出丸とされる部分よりさらに段差があり，出曲輪と考えられる。

この２回の調査は，ともに狭い範囲でしかなく，城の性格等を知るためにはなお調査の必要があった。

調査壙	規模	遺構	出土遺物
TP．1	2m×2m	―――	
2	2m×2m	―――	土師質土器，明青花
3	3m×5m	ピット群	土師質土器，中世陶器（備前系甕？）
4	2m×4m	土塁？	土師質土器，須恵器
5	3m×5m	整地面？	弥生土器，土師質土器，
6	3m×5m	整地面（礫） 土塁，ピット	弥生土器，土師質土器，青磁（香炉・盤等） 中世陶器（備前系甕・すり鉢・火鉢等），中国製陶器
7	3m×5m	ピット	弥生土器，土師質土器，青磁，不明滑石製品ほか
8	3m×5m	ピット	土師質土器，青磁，中世陶器（備前系甕？）
9	2m×6m	空堀	弥生土器，土師質土器，青磁，明青花，中国製陶器， 中世陶器（すり鉢・備前系甕，すり鉢・火鉢・土鍋） 瓦，凹石
10	3m×5m	撹乱	青磁，明青花，中世陶器（すり鉢）
11	3m×5m	撹乱	土師質土器，青磁，明青花，瀬戸美濃系天目碗
12	3m×5m	ピット？	弥生土器，土師質土器，青磁，明青花 中世陶器（須恵質土器，火鉢等）
13	3m×5m	ピット，焼土	弥生土器，土師質土器，白磁，青磁，明青花，古唐津 中国製陶器
14	3m×5m	ピット	細石核，弥生土器，土師質土器，白磁，青磁，明青花
15	3m×5m	ピット	土師質土器，青磁，明青花
16	3m×5m	土壙・ピット （五輪塔）	弥生土器，土師質土器，須恵器，白磁，青磁，明青花 中世陶器（すり鉢・備前系壺・火鉢・須恵質土器等） 砥石，瓦，不明鉄製品，瀬戸
17	3m×5m	ピット	弥生土器，土師質土器，白磁，青磁，明青花 中世陶器（すり鉢・火鉢等），石鏃
18	3m×5m	撹乱	弥生土器，内黒土器，土師質土器，白磁，青磁，石斧 中世陶器（すり鉢・火鉢・須恵質土器等），明青花
19	3m×5m	―――	土師質土器，瓦器，明青花，中世陶器（火鉢），土錘
20	3m×5m	―――	須恵器，白磁，明青花
21	3m×5m	―――	
22	3m×5m	柱穴，ピット	土師質土器，須恵器，白磁，青磁，明青花 中世陶器（すり鉢・火鉢・須恵質土器等），瓦
23	3m×5m	石垣	土師質土器，青磁，明青花，中世陶器（すり鉢等）
24	3m×5m	柱穴，ピット	土師質土器，青磁，明青花， 中世陶器（すり鉢・火鉢等），鞘羽口，鉄さい
25	2m×2m	―――	明青花

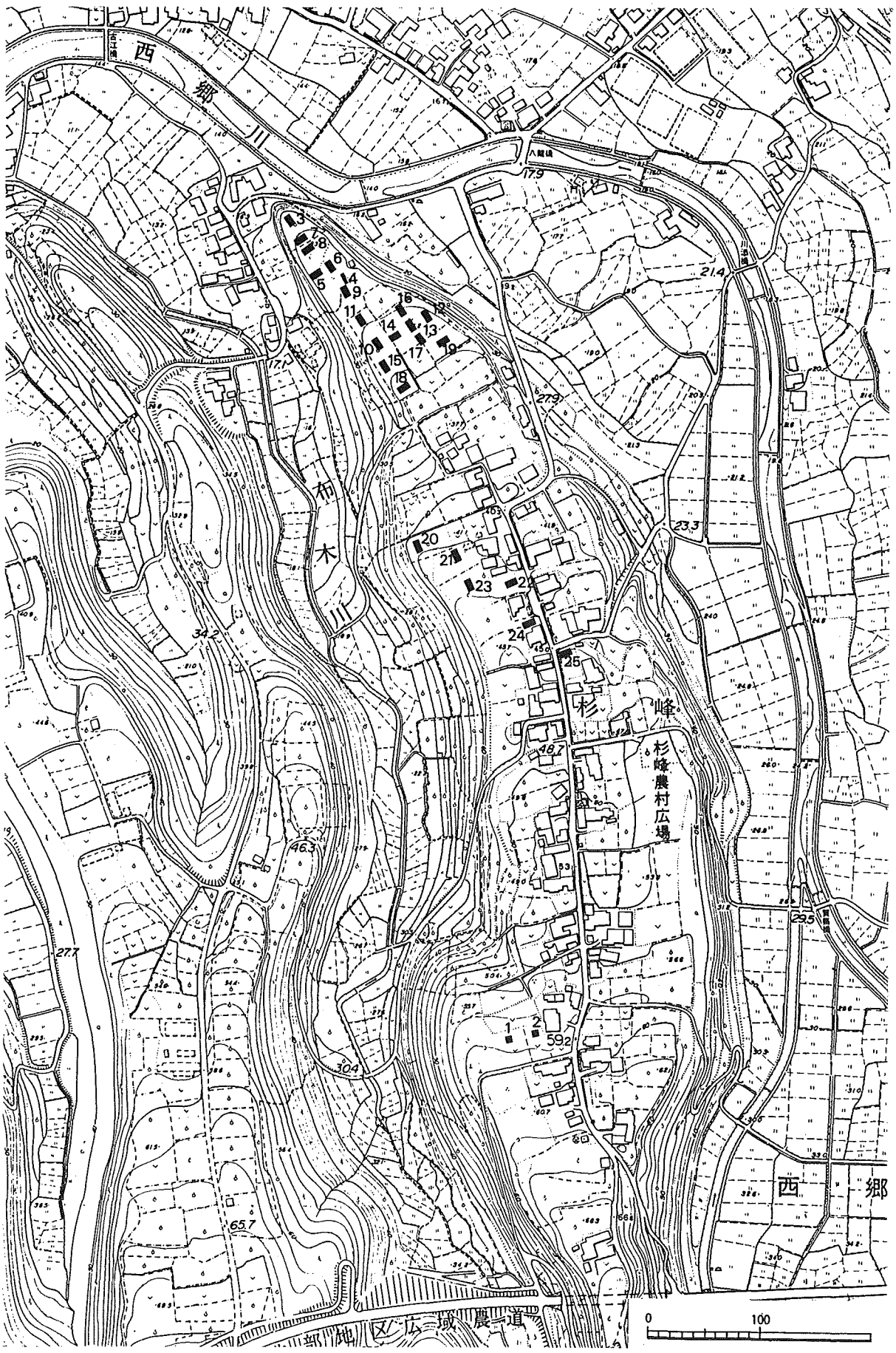
表２　杉峰城　試掘壙一覧表

3．重要遺跡範囲確認調査の概要

(1) 調査の目的と方法

長崎県が昭和62年に作製した，「長崎県遺跡地図」によれば，県内には約3,400箇所の遺跡が存在する。ただし3,400箇所の遺跡の中で，その内容や範囲が把握できるものは，ごく僅かである。そこで県教育委員会では，155箇所を重要遺跡として台帳整備を行ない，遺跡の規模，性格，内容等を把握することとし，開発事業に対する調査・協議の基本資料とすることとした。平成５年度は，瑞穂町の杉峰城跡，郷ノ浦町の名切遺跡，加津佐町の永瀬貝塚の３箇所がその対象となり，調査を

第2図　グリッド配置図



行なった。

杉峰城の調査は，その対象面積に対する調査面積の割合が少ないことや，調査許可の得られなかった土地も多いなど，かなりの制約があったなかで，３×５ｍを基本とするグリッドを25箇所設定した。「城郭大系」にもとづく，出丸に６箇所，本丸に９箇所，南側の平地に８箇所，掘に１箇所，南限と考えられる場所に２箇所の内訳である。

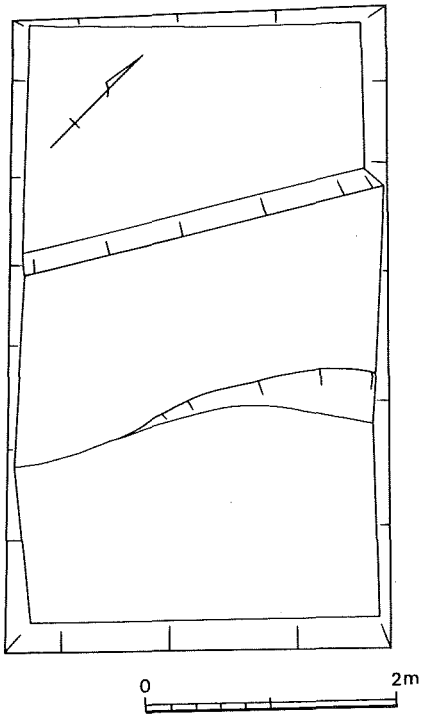
４．遺構（第４図）

城に関連する遺構としては，調査の経緯の項でも書いたように，「日本城郭大系」では，本丸・出丸・水掘・空掘・石垣・用水路・井戸等が掲げられている。この中で井戸遺構の確認はできなかった。また石垣は西側斜面に確認はできるものの，中世に築造されたものかどうかについては判断は難かしいと考えられる。この項では，空掘と水掘とされるもの，及び今回の調査で新たに発見された土塁状遺構についてそれぞれ説明を加えるとともに，その他の柱穴・土壙等については遺構が検出された試掘壙ごとに順次説明することとする。

①　土塁状遺構（第３・４・８図）

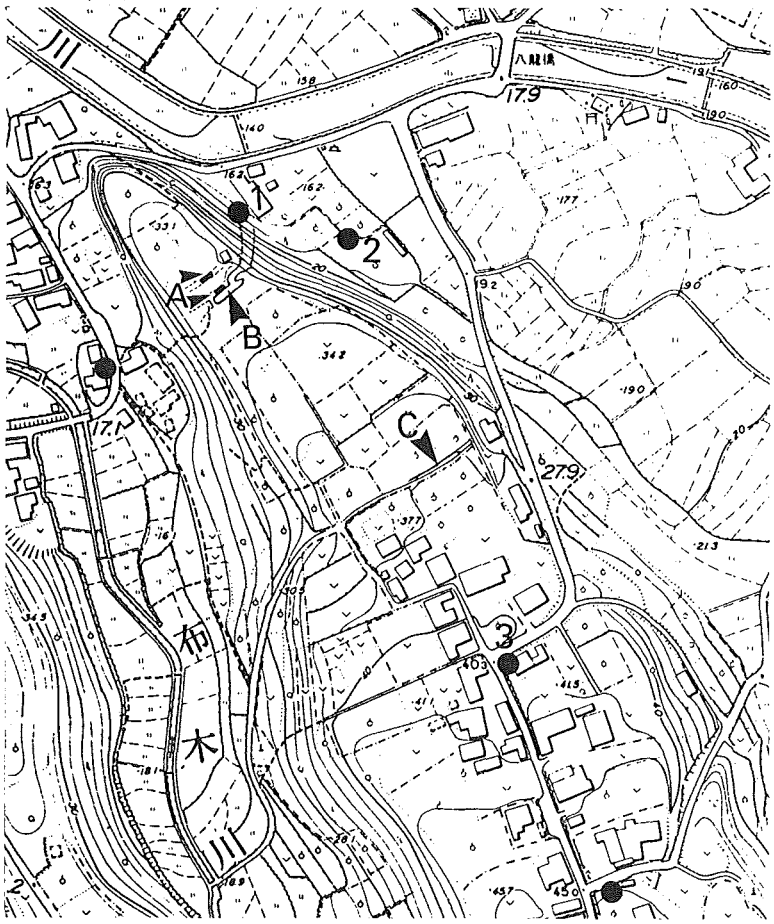
出丸内に設定したTP.６とTP.４において検出した。TP.６の土塁状遺構は，表土下10cmのところで，土塁上部が削平された状態で表われた。幅1m60cm，高さ約40cmを測るが，ともに削平された状態である。立ち上がりや幅の法量からすると，高さ1m以上はあったものと考えられる。南側は傾斜面となっていくため，空掘近くに立った場合，比高差は２ｍ以上になろう。第９図のTP.６の東側セクション図について説明するならば，２層が第２次整地層，４層は漠然としているが，第１次整地層の可能性もある。11層については礫を投げ入れた層である。図化されたピット群は，土塁下において出土している。このため，土塁下のピット群の時期，土塁構築の時期，土塁を削平して整地を行なった時期の少なくとも３つの時期が想定可能かと思われる。２層・４層・11層から出土した遺物は14世紀中～後葉を主体とするものであり，土塁状遺構はそれ以前に構築された可能性が高い。土塁下のピットについては，さらに古い年代が推定されるが，14世紀以前の遺物としては11世紀代のものになるのでその前後が比定されよう。

TP.４の土塁については，出丸と本丸の間の空掘の，出丸側の天端に築かれ，東西に延びていくようである。第８図TP.４のセクション図は土塁の断面で，高さは岩盤より80cmを測る。遺物は出土しなかったが，空掘の構築

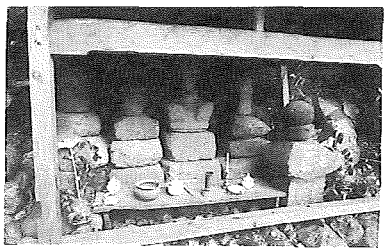


第３図　土塁城遺構平面図

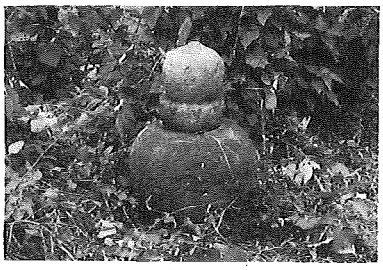
第４図　遺構配置図



A.土塁状遺構
B.北側空堀遺構
C.南側空堀遺構
●は５輪塔群

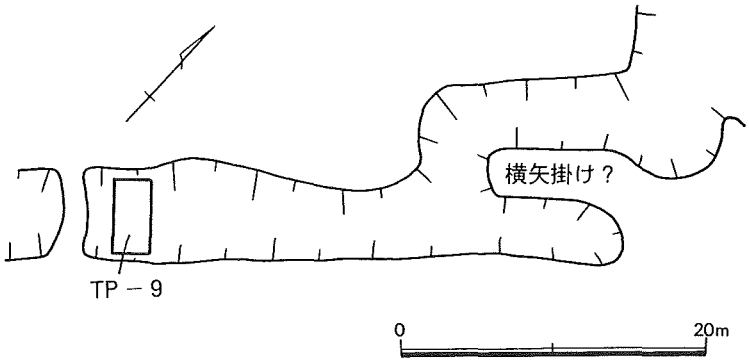


五輪塔群１

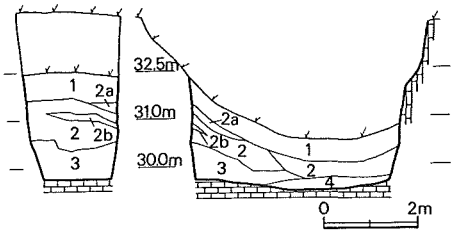


五輪塔２

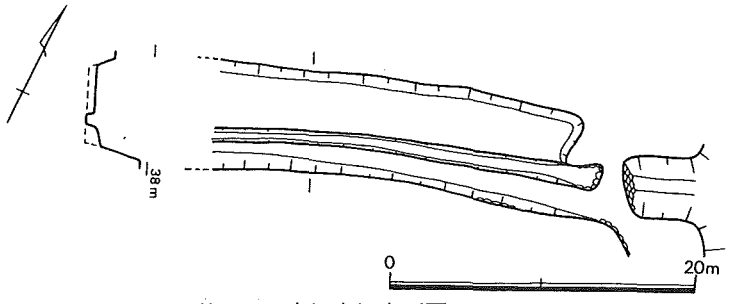
五輪塔群３



第５図　北側空堀平面略図



第６図　北側空堀南北セクション図



第７図　南側空堀実測図

の時期と同じとみてよいであろう。この土塁は，本丸側にはないため，出丸とされる場の方が，空掘構築の時期には防禦をより堅固にしていたのであろう。

② 空掘（第５～７図）

掘について，「吾妻町史」には『杉峰城は本丸と出丸，二の丸と推定される郭との二つの部分からなって，両郭の間には空壕があって，橋によってつながっていたものと思われる』とあり，「日本城郭大系」では『……両郭の間には掘切が造られ……東南部には水掘がある。』としている。調査時には２つの掘はともに雑木に覆われた状況であったが，遺構は良く残っていた。北側の空掘についてはその天端の平面図と，掘の内部に南北に設定したTP.９のセクション図で説明する。第５図の平面図から掘は東西に掘り切られ，東側の傾斜部分でＳ字状に構築されていることがわかる。また，横矢掛け？とみられる突出部も見られるなど，複雑な様相を呈する。掘の深さは約４ｍ，天端の幅は６ｍあり，断面形は箱形を呈する。図は東側半分しか作図していないが，掘は台地を東西に横断しており全長約50ｍに及ぶものと考えられ，所謂出丸と本丸の分岐となっている。掘を東にそのまま台地に下れば，五輪塔群１に下ることができる。掘内部から出土した遺物は，14世紀を上限として17世紀にまで至り，掘が南北朝期に作られたであろうことを示唆している。

南側の掘については，「日本城郭大系」では水掘としている。杉峰城を構成する台地の中央の水路が，南側から流れた水をこの掘に集めて，台地の東側に流すようになっていることから水掘として捉えていると考えられる。また，古老の話では，掘には満々と水が溜められ泳いでいたとのことであった。掘は現在２段になっており，下の段に水が流れている。但し，本来は第７図の断面の破線部までが掘として掘られ，のちに埋めて現在の排水施設としたと考えられる。掘の東側は石垣を積んで土橋とし，水は石垣の下に設けられた排水口から急激に台地の下に落ちていくようになっている。掘の深さは北側の天端との比高が約１ｍ40㎝，幅が約５ｍを測る。掘の長さは，北側の掘と同様，台地を東西に走るものであったと考えられる。この掘については，一部平板測量をしたのみで，遺構に伴う遺物等については検出していない。

③ その他の遺構（第８～13図）

遺跡全体に25箇所の試掘壙を設定したが，その多くに柱穴や土壙が検出された。但し，範囲確認という調査の目的と，対象面積の広大さから面的な調査ができず，建物の復元までには至っていない。遺構等を伴うものは図として掲載し，代表的なもののみに説明を加えていくこととする。

TP.１・２（第８図）

遺跡の南限と捉えられるため，２箇所グリッドを設定したが遺構・遺物等は検出できなかった。周囲の表面には，中世陶磁器が多いため，他に遺構が残ってる可能性が大きい。この地区の土層は，火山灰で構成されている。２層～３層の土は，国見町百花台遺跡や，吾妻町弘法原遺跡の２～３層と同じものと考えられる。出丸の一部にもこの層が残存している。

TP.３～８（第８～10図）

出丸内の６箇所の試掘壙である。TP.３・７・８では多くのピット群が検出された。TP.３のピット

調査壙	土師器			中国陶磁器					国産陶磁器		その他	
	遺構	杯	小皿	遺構	白磁（形式）	青磁（形式）	染付（形式）	その他	遺構	器種・器形	遺構	遺物
TP. 1												
TP. 2												
TP. 3	SK 1 SK 2 P 4 P 6 P 7 P 8	11 2 9 1 4 8 1	5 8 5 5 5							1 備前系甕		
TP. 4		1										1 須恵器
TP. 5		1	2									2 弥生土器
TP. 6	P 1	21	19 1			2 1香炉 1折縁皿		1中国製陶器		2すり鉢 1火鉢 4須恵質土器 1備前系甕		2 弥生土器
TP. 7	P 5 P 9	9 1 1	7 5 3			1（上田碗C類）						1 弥生土器 1 不明石器 1 不明滑石製品
TP. 8		2				1				1備前系甕		
TP. 9		1				1	1 1陶胎	2中国製陶器		3 すり鉢 1 備前系すり鉢 1 備前系甕 2 火鉢 1 土鍋？ 1 須恵質土器		3 弥生土器 1 瓦 1 凹石
TP. 10						2 1綾花皿 1（上田碗D類）	1					
TP. 11		1	1			2 1同安窯系	2 1（小野皿C群）			1 瀬戸美濃系天目碗		
TP. 12	P 1	3	6 1			10 1（上田碗D類）	6					9 弥生土器 1 土錘
TP. 13		2	6		1（碗Ⅳ類）	2 1同安窯系	4 1（小野皿B 1群） 1（小野碗C群）			1古唐津小壺		7 弥生土器
TP. 14					2 1（碗Ⅳ類）	8	1 1（小野皿C群） 1（小野皿F群）					1 細石核 2 弥生土器
TP. 16		1	1			1	2					
TP. 16	P 1 P 2	6 1	14 1 2	P 2 P 2	4 3（皿Ⅳ類）	14 1（碗Ⅰ－5類） 1（上田碗B類） 1（上田碗C類） 1（上田碗D類） 1（上田碗B類） 1綾花皿	6 1（小野碗C群） 1（小野皿B 1群） 2（小野皿C群）		P 1	5すり鉢 1すり鉢 1備前系壺 1火鉢 1須恵質土器 1瀬戸系陶器	P 2	4 弥生土器 1 須恵器 1 砥石 1 瓦 2 不明鉄製品
TP. 17	P 5	1 1	3		1（碗Ⅳ類）	3 1（上田碗D類）	6 1（小野碗E群） 1（小野皿E群）			1すり鉢 1火鉢		2 弥生土器 1 石鏃
TP. 18		1	2		2	3	1 1（小野碗E群）			2すり鉢 3火鉢 1須恵質土器		1 弥生土器 1 内黒土器 1 石斧
TP. 19		1				1	3			1火鉢		1 瓦器碗 1 土錘
TP. 20		1				1	3			1火鉢		1 須恵器
TP. 21												
TP. 22			2		2	1綾花皿	1 1（小野皿B 1群）		P 4	1すり鉢 1火鉢 1火鉢 2須恵質土器	P 4	1 瓦
TP. 23		3				3 1（上田碗D類）	1 2（小野碗E群） 1（小野碗C群） 1（小野皿C群） 1（小野皿B 1群） 1陶胎			1すり鉢 1土鍋		
TP. 24		2	1			1 2（上田碗C類） 1（上田碗B類）	1			2すり鉢 4火鉢		1 鞴羽口 2 鉄さい
TP. 25							1					

は，土砂の堆積がよかったのか，土に柱穴を掘ってあるが，TP.7・8のピットは，岩盤を掘り抜いたものである。TP.5の凹凸はロームを削った跡で，TP.6の土塁を築くにあたって削り取った可能性がある。削り取ったあとに，礫を投げ込んで整地しているが，この礫層はTP.6の11層と同じである。遺物が多く検出されたのは，TP.3・6・7で，土師質土器を中心に出土している。時期的には14世紀を中心としており，南北朝期に出丸が盛んに使用されていたことが理解できる。

TP.10～19（第10・11・12図）

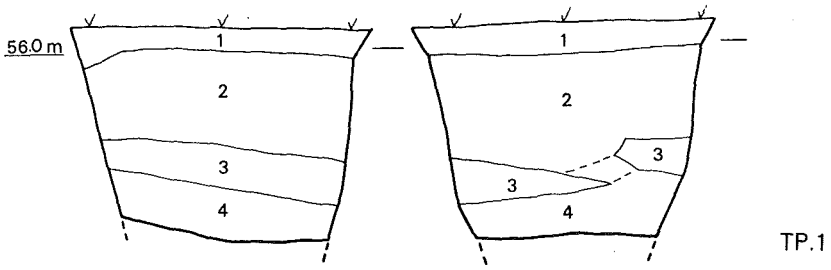
本丸とされているところに9箇所設定した。本丸西側にあたるTP.10・15では，表土直下が岩盤でTP.17・19・12についても40～50cmで岩盤が露出している。但し，TP.13・14・16については，ロームの堆積が厚いことから，本丸の部分ではTP.10とTP.12を山とし，TP.13・14を谷とする接部にロームの堆積があったものと考えられる。TP.17・19・12については，岩盤を掘ったピットが検出されたが，台地西側であるTP.10・11などでは検出していない。遺構・遺物が出土する主体はTP.13・14・16あたりで，岩盤が深いことからも本丸の主体部でもあったと考えられる。なかでもTP.16は，西側に礫・すり鉢・五輪塔の笠の部分などを投げ込んだ土壙が検出された。南北に2m50cmを測り半載した形でグリッドにかかったものである。礫に火を受けた痕跡があり，火災等の後に埋められたことが考えられる。すり鉢の形態から15世紀代に掘られた可能性を考えておきたい。TP.13でも全体的に炭化物が多く出土し，北側に焼土が確認された。遺構検出面はほぼⅢ層上面にあるが，遺構の輪郭は不明瞭である。遺物も弥生～近世まで多期に渡る。TP.12は，岩盤を浅く掘った溝状の遺構に，さらに岩盤を掘ってピットが掘られている。直上の包含層はしっかりしており，中世の所産と考えられる。遺物の項でも述べるが，本丸では，11世紀～12世紀代・14世紀代・15世紀代後～16世紀代を中心としている。

TP.20～25（第13図）

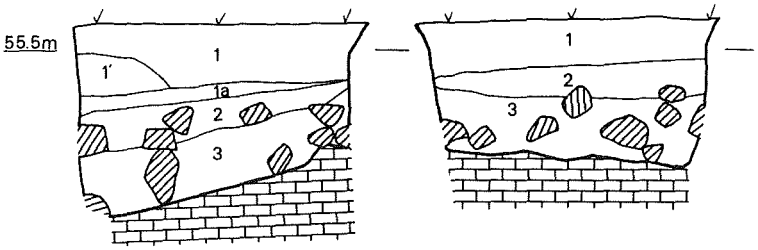
本丸南側にTP.20～25を設定した。この地区はロームの発達はなく，表土下は岩盤である。この岩盤を削ってピットを削り出しているが，遺物は中世末～近世が主体となってくる。TP.25に出土した鉄滓，鞴羽口は平成3年調査区から出土したスラッグなどとも関連するのかも知れない。

以上，杉峰城の遺構について書いたが，ここで概略をまとめておきたい。今回の調査で出丸上に，2箇所の土塁状の遺構が検出された。北側の土塁は14世紀以前に作られた可能性があり，その南側の土塁は空掘に付随するものと考えられる。出土遺物が14世紀，南北朝期に作られたと考えられることから，土塁もこの時期のものとして捉えられよう。出丸出土の遺物が土師質土器を中心とすることも特筆される。また，出丸先端には出曲輪と思われる施設があることも，新しい知見であった。

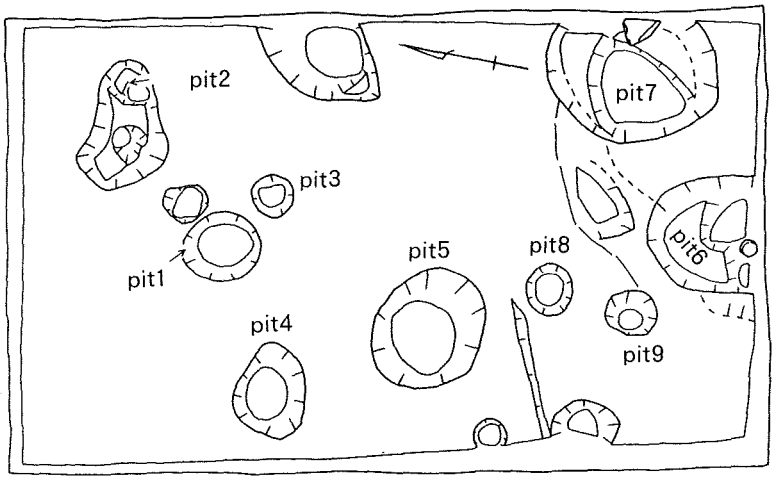
本丸では，出丸の土師質土器を中心とするものから，青磁などが主体となり，出丸との物の違いから場の使用法が異なるのではとの推論もでてこよう。また，11世紀～12世紀代・15世紀～16世紀の遺物も本丸を中心に出土するなど，古くから本丸が主体となったことは相違ないと考えられる。ただし南北朝期においては，土塁の在り方などから出丸を最後の詰めとしたと考えている。本丸より南側は，中世末～近世の遺物が主体であるため，現在の村の形成に関わる初源的な形がそこには見いだせるのではないだろうか。遺構については，まとめにおいて新めて項をおしたい。



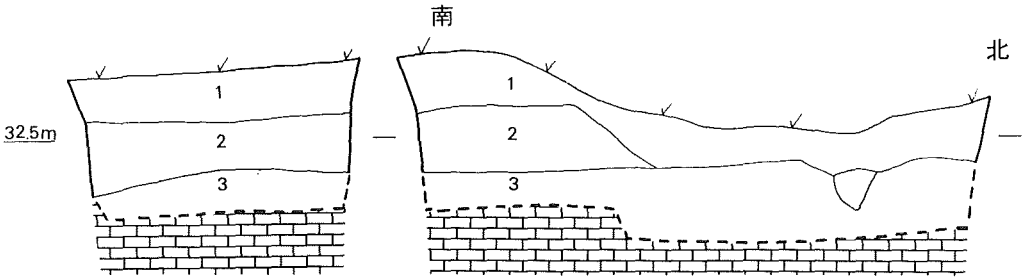
TP.1



TP.2



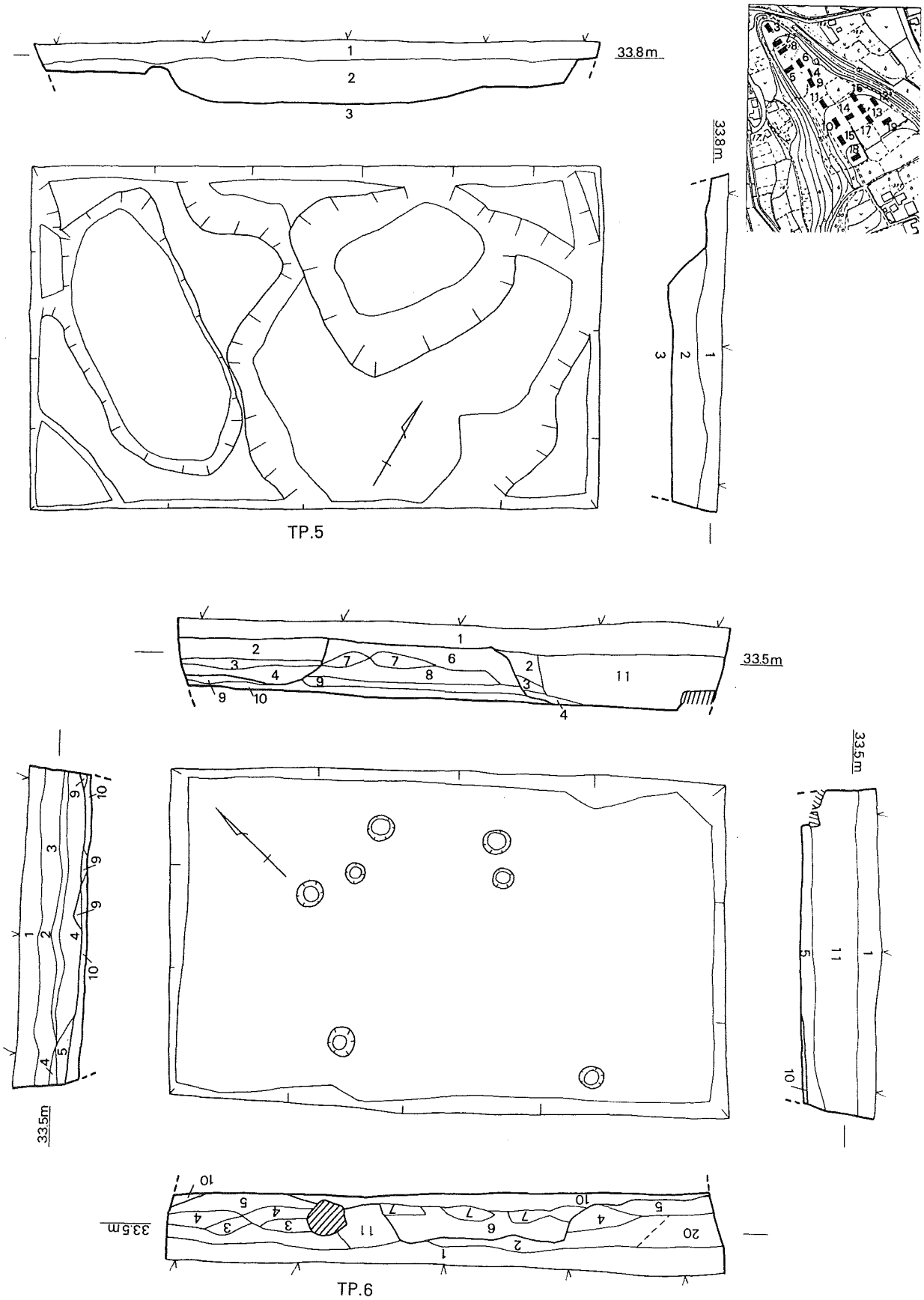
TP.3



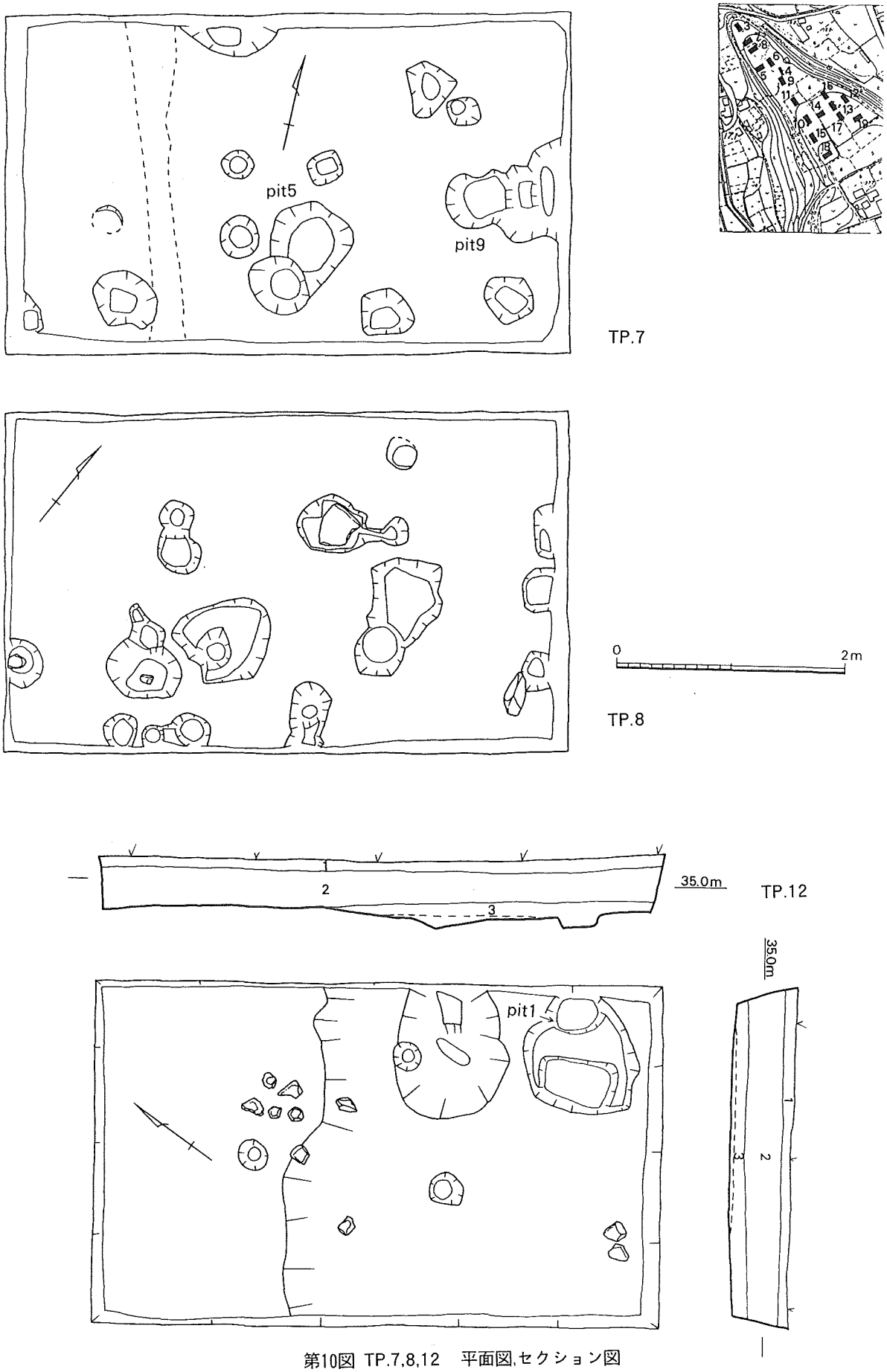
TP.4

土塁セクション図

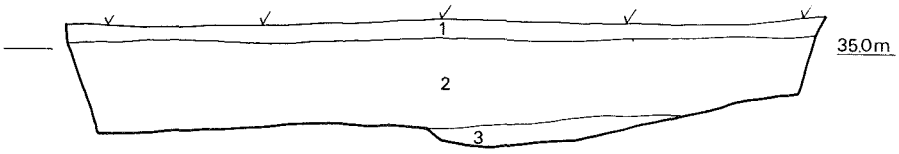
第8図 TP.1,2,3,4　平面図及びセクション図

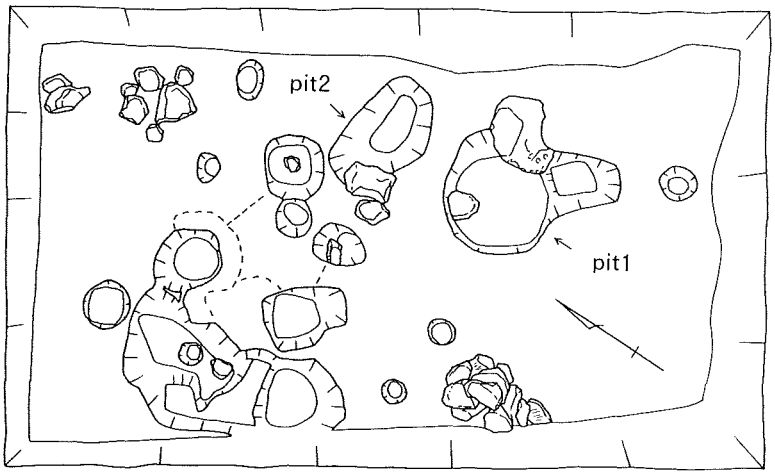


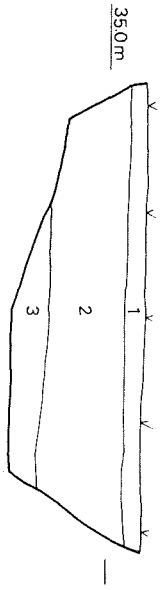
第9図 TP.5,6 平面図,セクション図



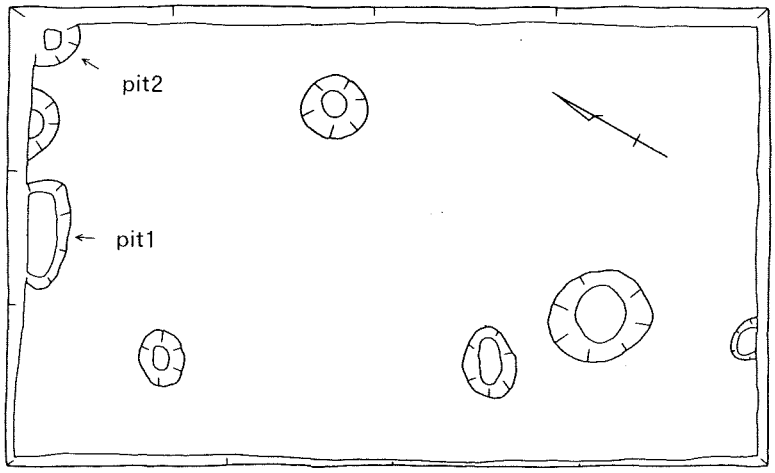
第10図 TP.7,8,12　平面図,セクション図



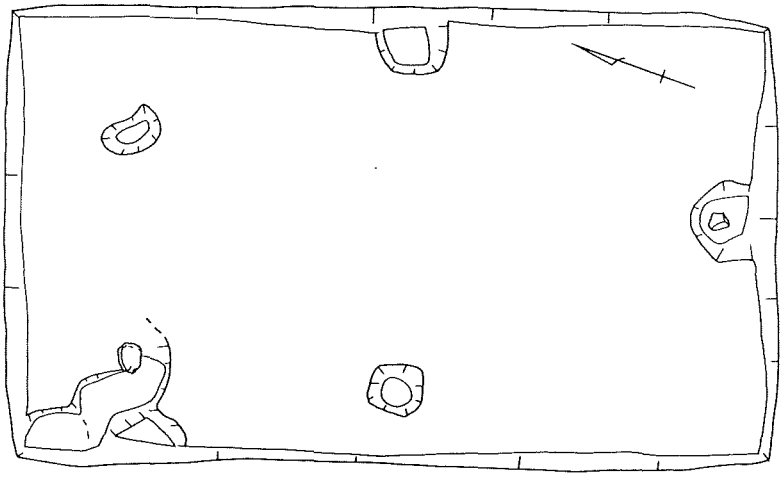




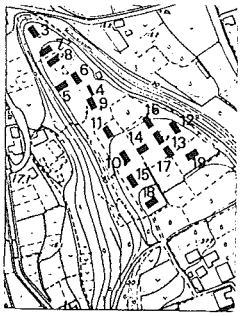
TP.13



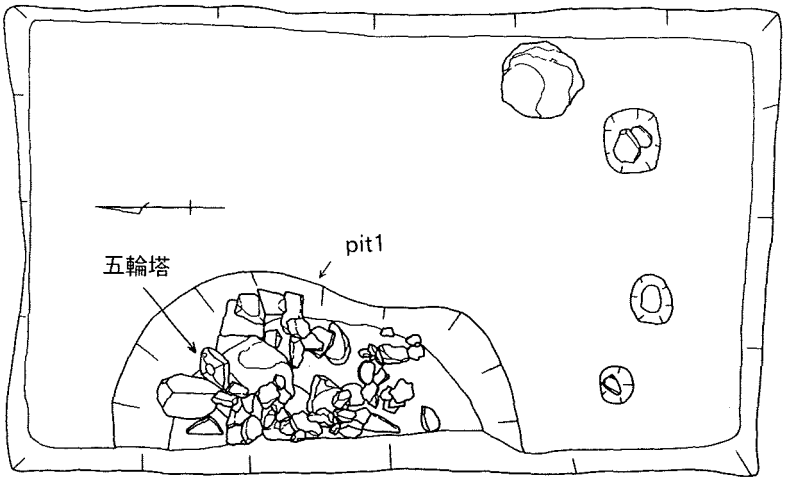
TP.14

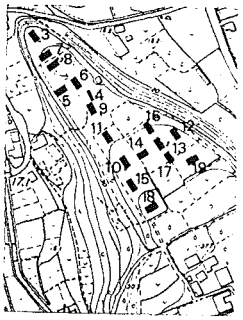


TP.15

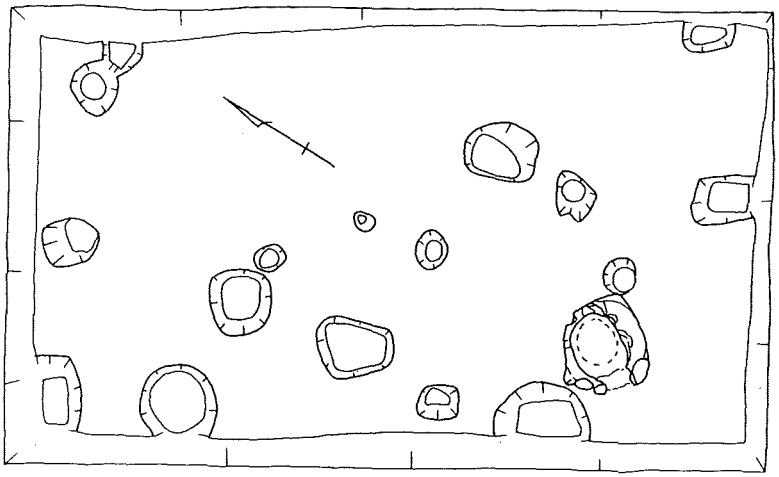


第11図 TP. 13,14,15　平面図,セクション図



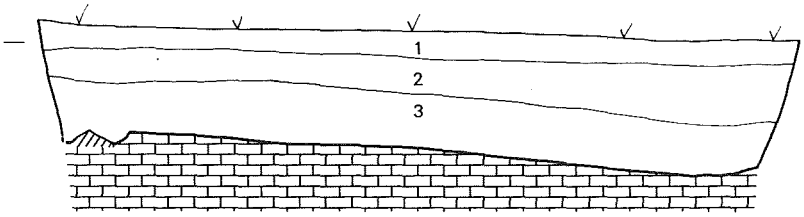


TP.16

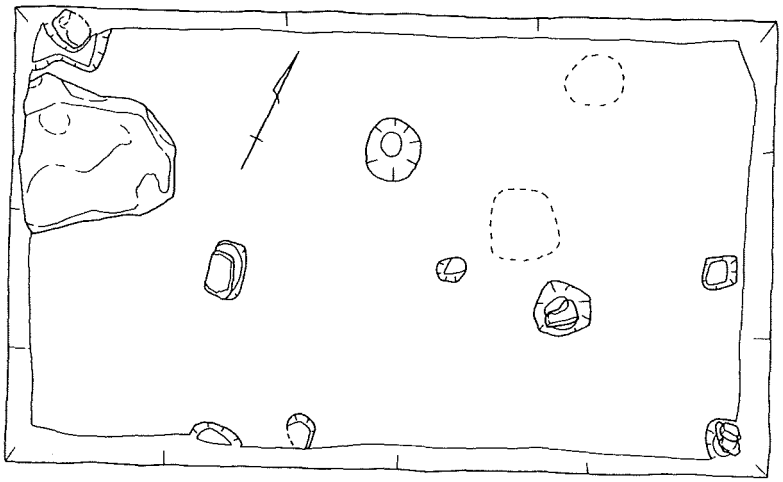


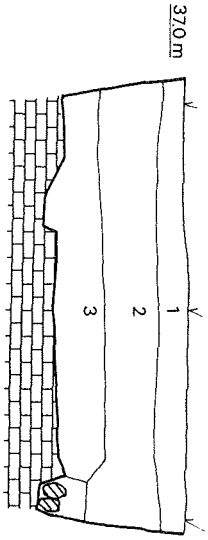
TP.17

0 2m

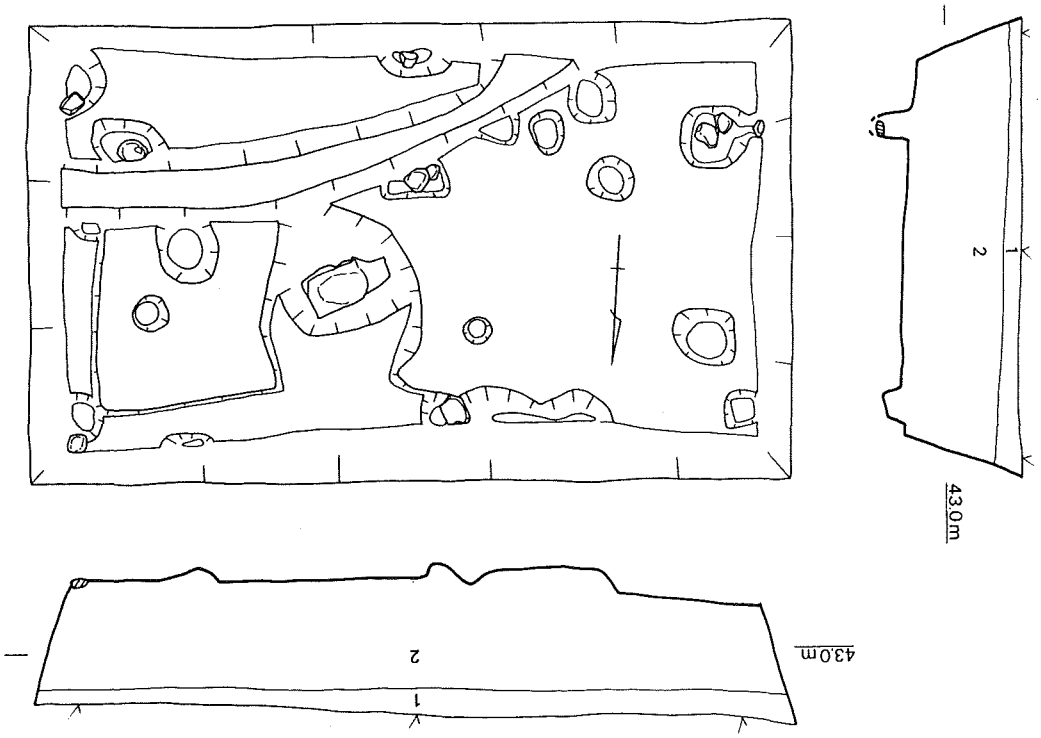


TP.18

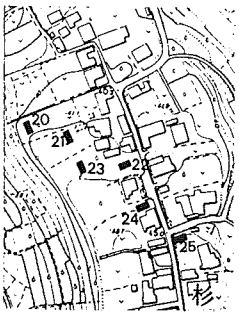


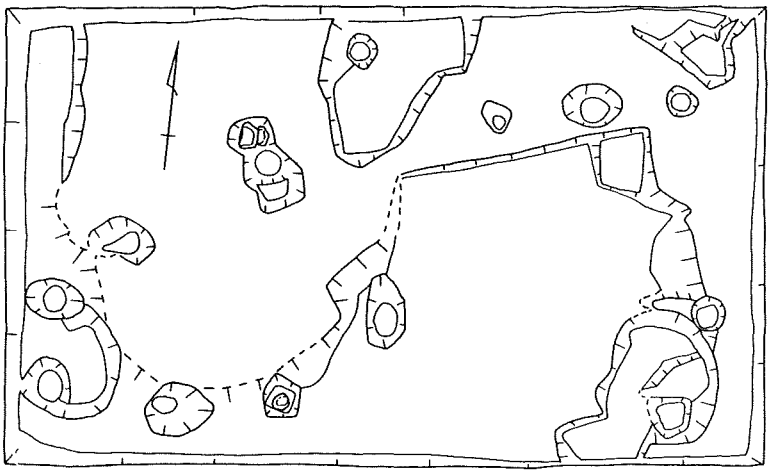


第12図 TP. 16,17,18　平面図,セクション図



TP.22





TP.24

0 2m

第13図 TP. 22,24　平面図,セクション図

5　遺物

(1) 土師質土器（第14図・図版９）

土師質土器は大半の試掘壙で出土しており，出土総点数は202点である。量的に多いのは出丸と称される部分(TP.3～８）で，全体の68％が出土している。特にTP.3は出土遺物のほとんどが土師質土器で，出丸部分の出土量の約半数近くを占めることになる。その数は本丸全体の出土量をも上回る。ハレの場として機能していた部分であろうか。本丸部分(TP.10～19)では総点数56点，全体の28％が出土しており，TP.16で顕著にみられる。TP.16は他の出土遺物も豊富で，本丸の中でも興味深い場所であるといえる。ここまでの出丸・本丸部分で既に全体の96％を占めている。

杯（１～13)形態的には，体部が内湾気味にのびる比較的身が深いもの(1)，同様の器形で身がやや浅いもの（２～７），体部が直線的に大きく開き，口径に比べ底径が極端に小さいもの(8)同様の器形で身が深いもの(9)に分けられる。10～13については体部が内湾気味にのびるものか。

１は口径14.2cm，底径7.8cm，器高4.5cmでTP.3のP7出土。２～７は口径12.8～12.3cm，底径9.4～7.7cm，器高3.7～3.3cm。８は口径15.2cm，９は口径12.8cm。ほとんどが杯ｂに相当すると思われる。底部は全て糸切りで，２・６・７の底部には板状圧痕が残る。３・９～11はTP.7，２と６はそれぞれ同P5・P9出土。４・７・12はTP.6出土。５・８・13はそれぞれTP.13・16・３のSK1出土。

小皿(14～24)これも形態的に体部が外反するもの(14～16)，体部が内湾気味のもの(17～20)，体部が直立気味のもの(21～24)に分けられる。同じ形態でも身が深いものと浅いものがあるようだ。14～24は口径8.1～6.4cm，底径5.6～4.9cm，器高2.5～2.0cm。17～19は口径8.2～7.9cm，底径5.6～5.0cm，器高2.6～1.9cm。21～24は口径6.4～5.8cm，底径5.3～4.1cm，器高2.1～1.7cm。20は口縁部にススが付着している。ほとんどが小皿ｂに相当するものと考える。14・15・24はそれぞれTP.3のP7・P6・SK1出土。16・18～20はTP.16出土。21～23はTP.6出土。17はTP.7のP5出土。

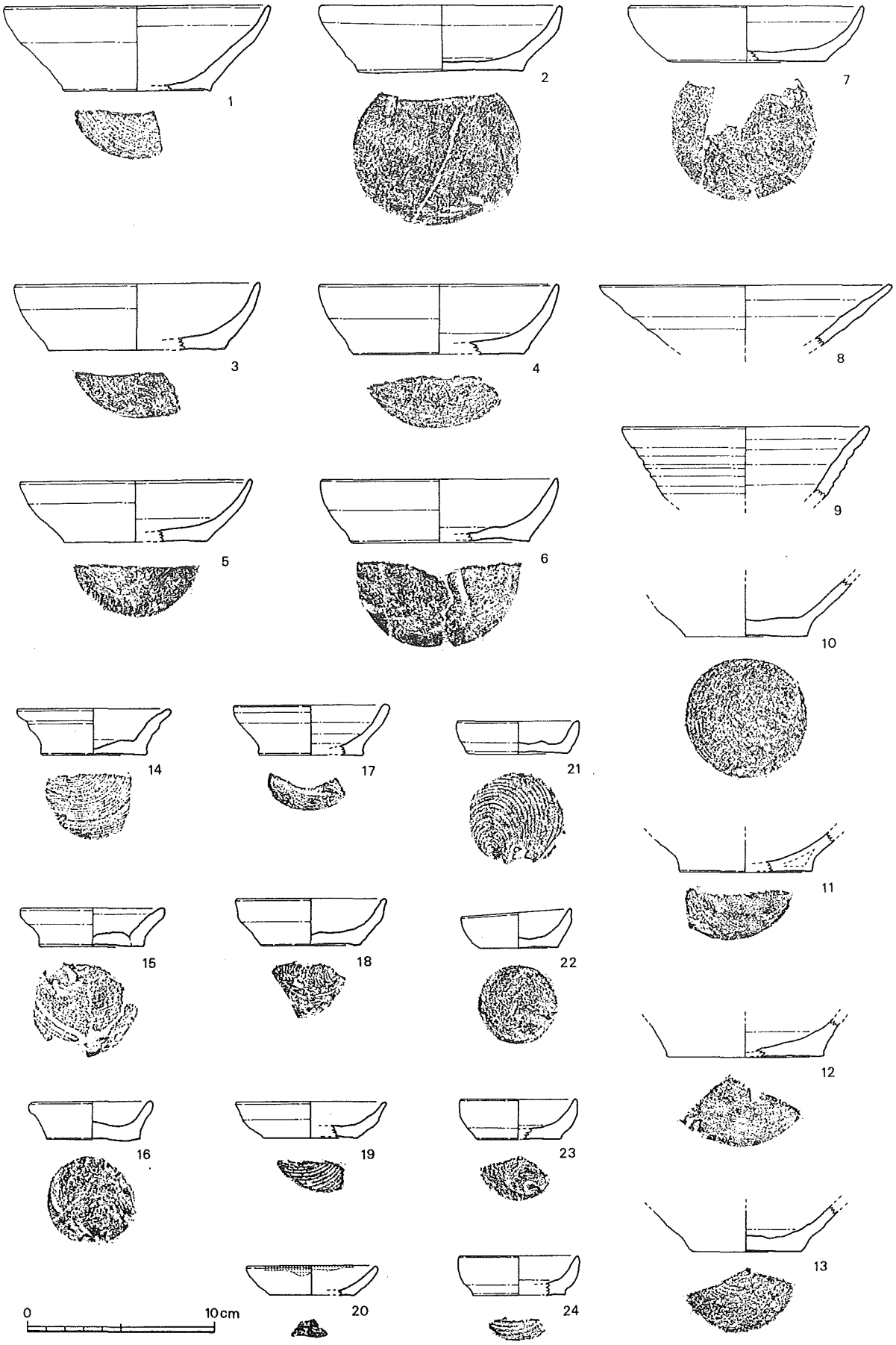
(2) 輸入陶磁器（第15図・図版９）

出丸・本丸，その南側区(TP.20～25)の三区に分類して説明していく。

31・33・37・38が出丸より出土している。14世紀後半～15世紀までに納められる資料で，出丸で多く出土している土師質土器と年代も符号する。特筆すべきことは，37の盤・38の香炉などが出土していることであり，同じ時期の本丸出土の青磁よりも良質のものが出土していることである。

25～29・32・35・40～42・46が本丸から出土している。25～27の白磁碗は他にないもので，28の白磁皿とあわせて本遺跡では一番古い輸入磁器である。これらの遺物から本城が，なんらかの形で12世紀前半までには使われていたことが理解できる。32は薄い青白色の釉で厚く覆われ，畳付に藁灰が付着している。46や47などともに16世紀代のものであろう。また14～15世紀代の資料として，35・40・42等の青磁があげられよう。30・36・39・43～45が本丸より南側で出土した資料である。14世紀に入る資料も見受けられるが，他に比べ，明青花が多くなる傾向にある。調査区の在り方から偏りもあるかもしれないが，輸入磁器の出土状況から次のことをまとめておく。

①出丸では土師質土器と相俟って青磁も14世紀代のものが出土している。また内容的にも盤や香炉



第14図　土師質土器

が出土するなど，特別な意味を持つ場であろうか。②遺物の出土量等からも，本丸は古くからその居住区としての主体部であったと考えられる。ただし，中世末～近世には台地の南側まで拡張していき，現在の村落の形態に近い状況を生みだしていったのかもしれない。

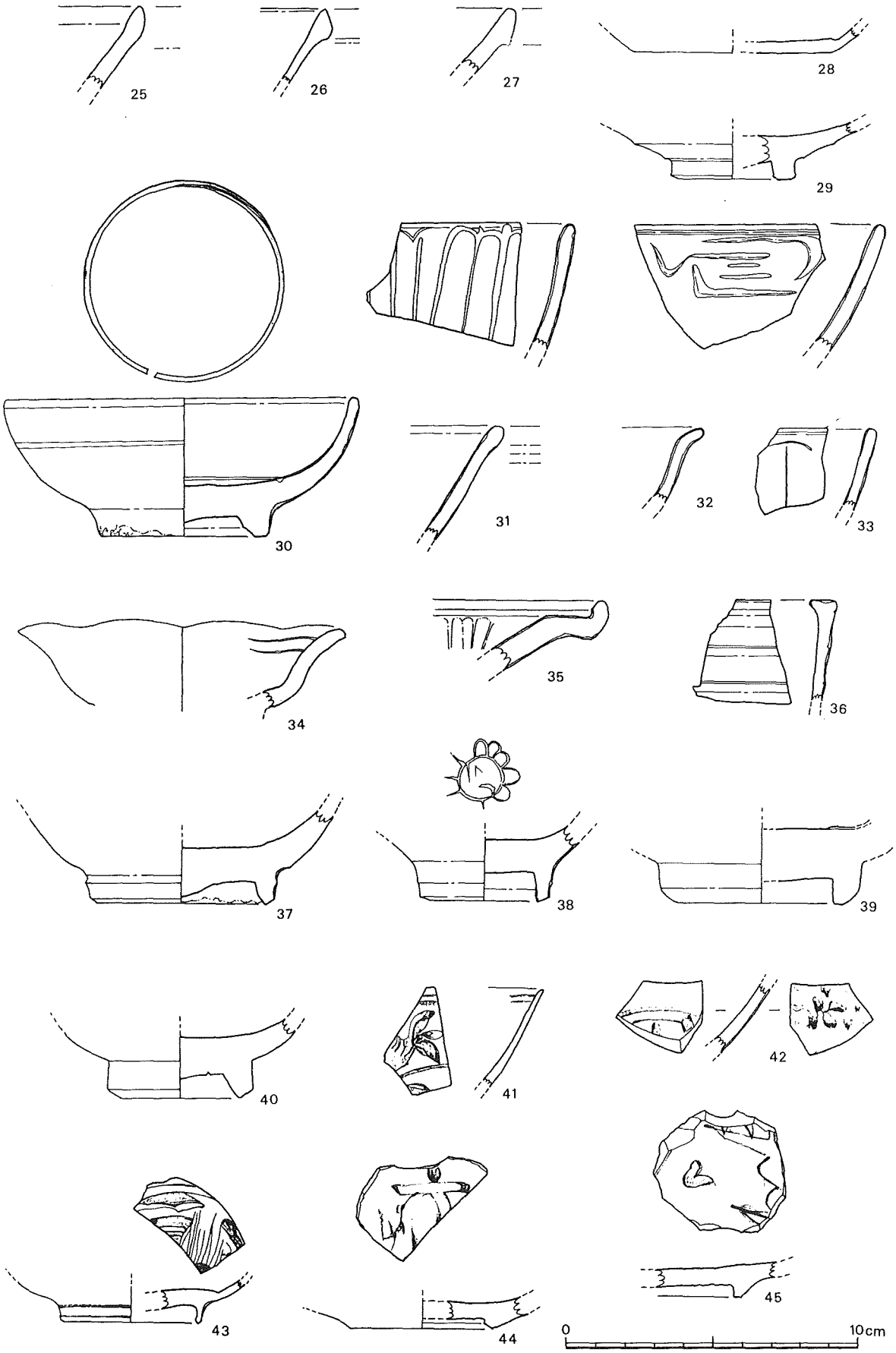
(3) 国産陶器（第16図・図版10）

ここでは土師質土器以外の中近世土器を国産陶器として扱った。出土総点数は53点で，すり鉢が全体の１／３弱を占める。少数ながら備前系甕・壺・すり鉢，瀬戸美濃系天目椀，瀬戸系陶器も見うけられる。46・47はそれぞれ内黒土器・瓦器の椀底部である。48～57はすり鉢である。48・49・52・53・55が須恵質で，57は備前系，他は瓦質のものである。48は内外面ともに比較的丁寧なつくりで，内面に５条の摺目をいれる。口縁端部は凹み，内端部は鋭く稜をなし，外端部は丸みを帯びる。TP.16のピット内で五輪塔に伴って出土した。49～52も全体のつくりは粗いが，口縁部は48に近い。順にTP.17・24・18・16出土。53は口縁端部が面をなす。TP.9出土。54・55は摺目が見られず，こね鉢の可能性もある。いずれも口縁端部は丸味をもつ。TP.9・16出土。56は外面のつくりが粗く，焼成も甘い。TP.18出土。57は内面に４条（＋α）の摺目がはいる備前系すり鉢である。TP.9出土。58～62は火鉢である。体部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がり，スタンプが施される。58・60は平坦な口縁下に菊花文を，59はやや丸味のある口縁下に花菱文のスタンプを有する。58・59はTP.16・60はTP.22出土。61・62は体部の突帯下に梅花文，花文を施す。それぞれTP.9・24出土。63は火鉢の底部か。体部下位に突帯が一条巡る。TP.24出土。64は土釜の鍔の部分とした。体部は丸味をもつようだ。TP.23出土。65は焙烙か。瓦質で外面にはススが付着する。TP.9出土。66は深鉢形の火鉢か。体部に一条の突帯を巡らし，上部に縦方向の沈線が施される。TP.6出土。67・68は火鉢の足か。67は須恵質で，外面を半円形に彫り窪む。それぞれTP.22－P4・24出土。69・70は須恵質土器の体部と底部である。70は格子目叩きが施される。共にTP.6出土。71・72は備前系甕の口縁部と底部である。口縁部は直立かやや外反気味で，端部を折り曲げて帯状の玉縁となす。間壁氏のⅢ～Ⅳ期に相当する資料か。

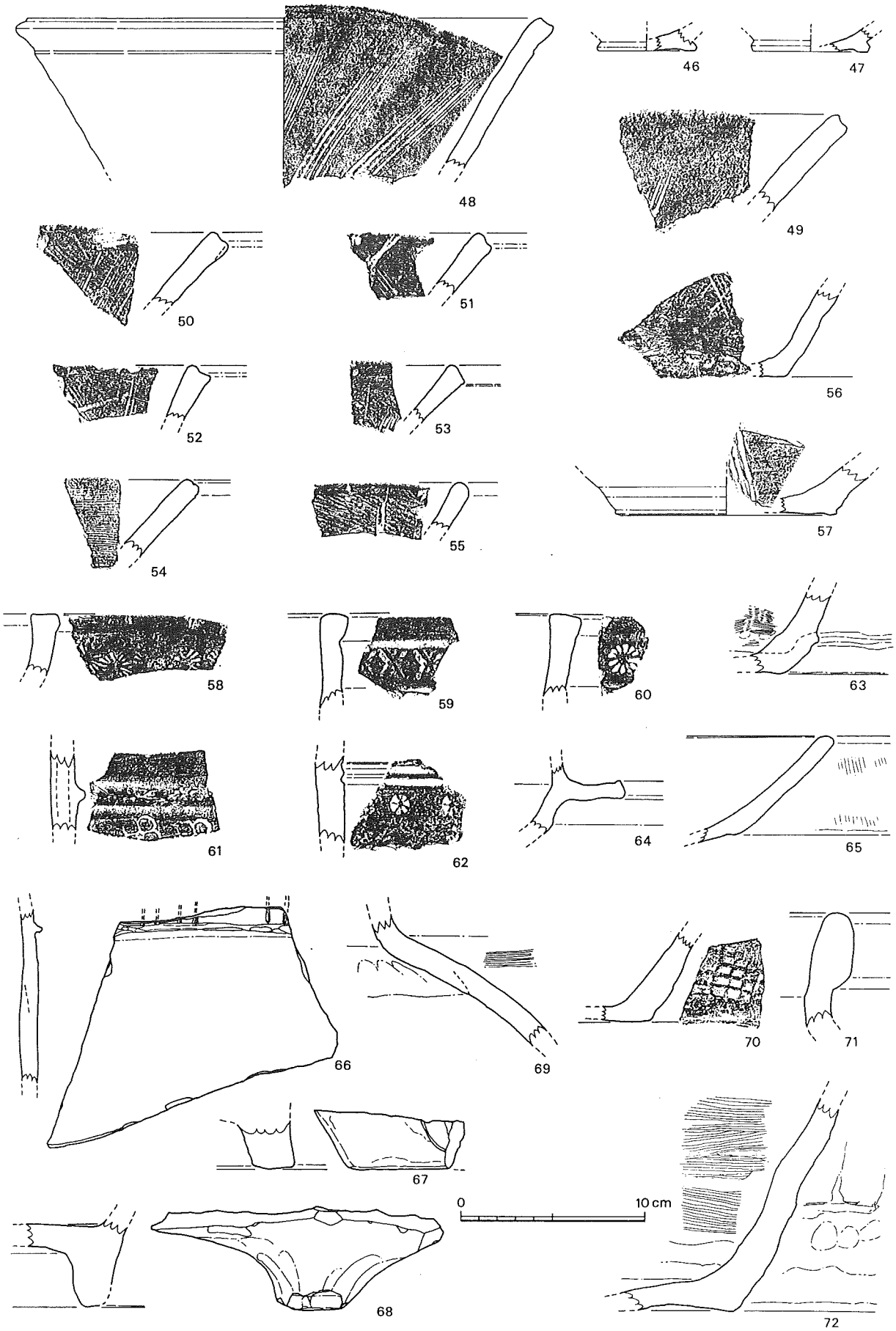
(4) その他の土器（第17図・図版11）

73～81は弥生中期～後期の土器である。73は中期の口縁部片，74は台付甕の口縁部片。TP.9出土。75は口縁外端部を上方につまみ上げ，76は口縁端部に刻目を施す。TP.12出土。77は刻目をもつ口縁部下に突帯が巡るもので，TP.16出土。78はTP.7出土。79は台付甕の底部くびれ部分でTP.5出土。80は壺底部，81は透かしをもつ器台で，共にTP.13出土。82～84は須恵器である。82は坏身，83・84は坏の高台部分である。順にTP.20・４・16出土。85・86は国産陶器の中でふれるべきものであるが，85は備前系壺の口縁部，86は絵唐津の小壺である。

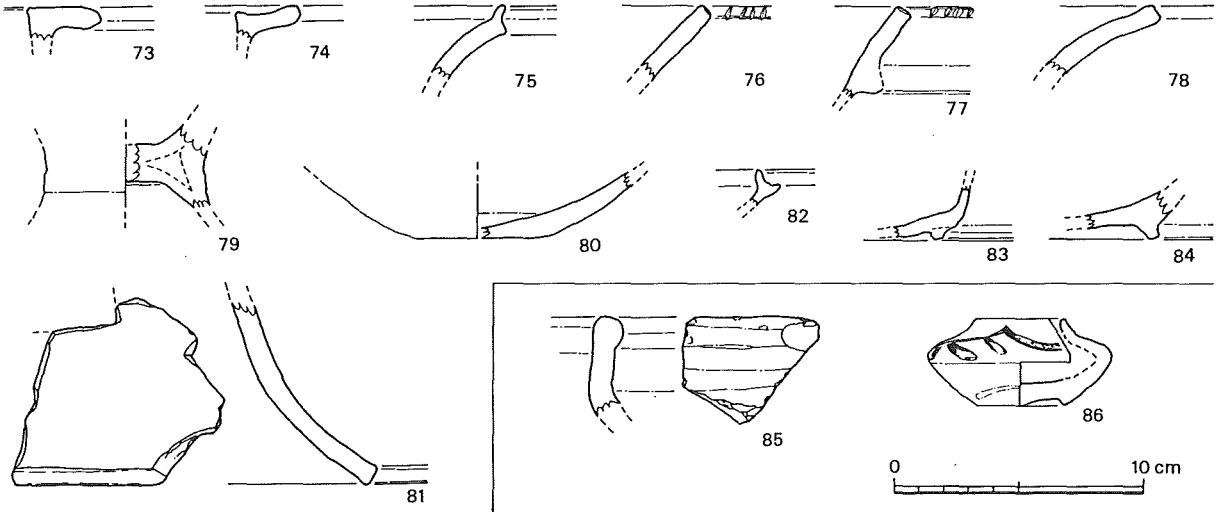
85はほぼ直立した口縁部に丸い玉縁がつく。甕同様に間壁氏のⅢ～Ⅳ期に相当すると思われる。TP.16出土。86は器高が低く肩部が張った偏平な器形をもつ。底部は碁笥底で，肩部から口縁部に鉄絵が施される。TP.13出土。



第15図　輸入陶磁器



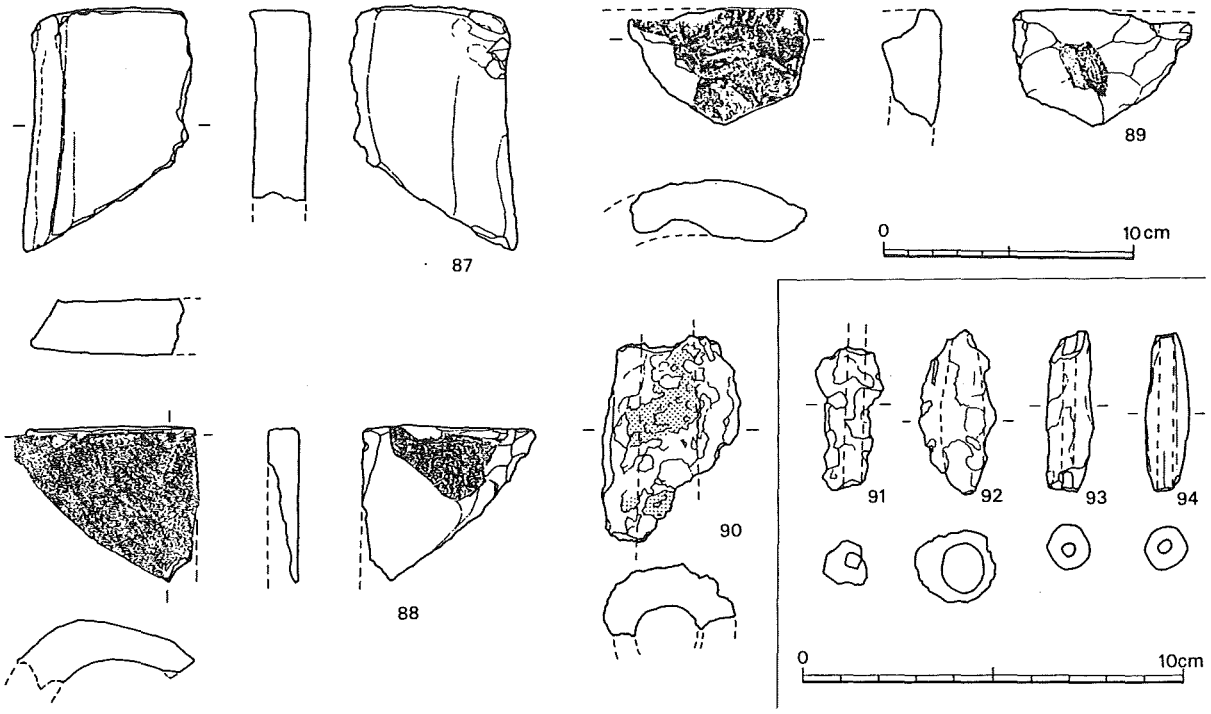
第16図　国産陶器（S＝1／3）



第17図　その他の土器　(S＝1／3)

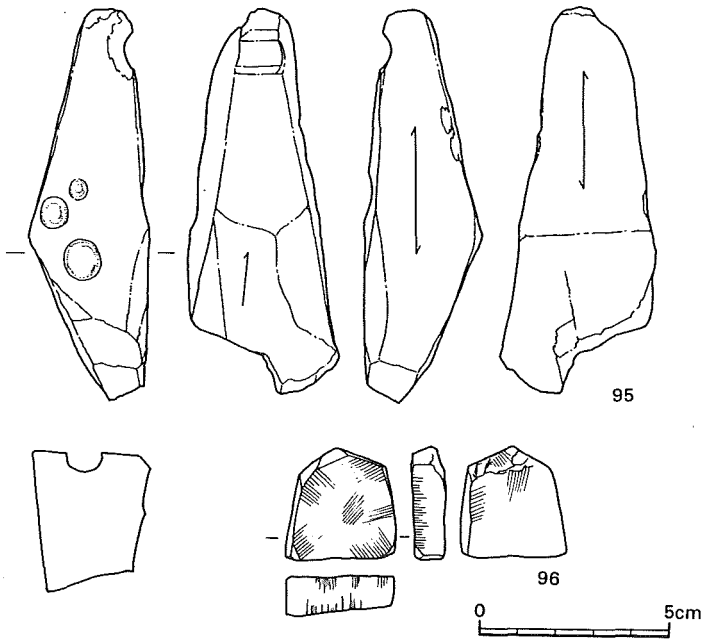
（5）その他の遺物（第18・19図　図版11）

出土遺物の中で土器・石器以外の遺物についてここでは取り上げる。87～89は瓦である。87は須恵質の平瓦で，側縁に面取りがなされている。調整は内外面ともにヘラ刷り。TP.22のＰ４出土。88・89は瓦質の丸瓦か。共に側縁に面取りがなされる。調整はほとんどナデ。近世以降の資料であろうと思われる。88はTP.９出土，89はTP.16出土。90は鞴羽口である。両端を欠損しているが片方がやや狭くなっている。体部の一部が火熱を受けてガラス化しており，鉄滓が付着しているため，外面の調整は不明である。TP.24出土。91は鉄釘か。断面は４㎜四方の長方形になる。92はラグビーボール状をした不明鉄製品である。断面は長楕円形をなす。91・92ともにTP.16のＰ２出土。



第18図　その他の遺物（1）（S＝1／3，1／2）

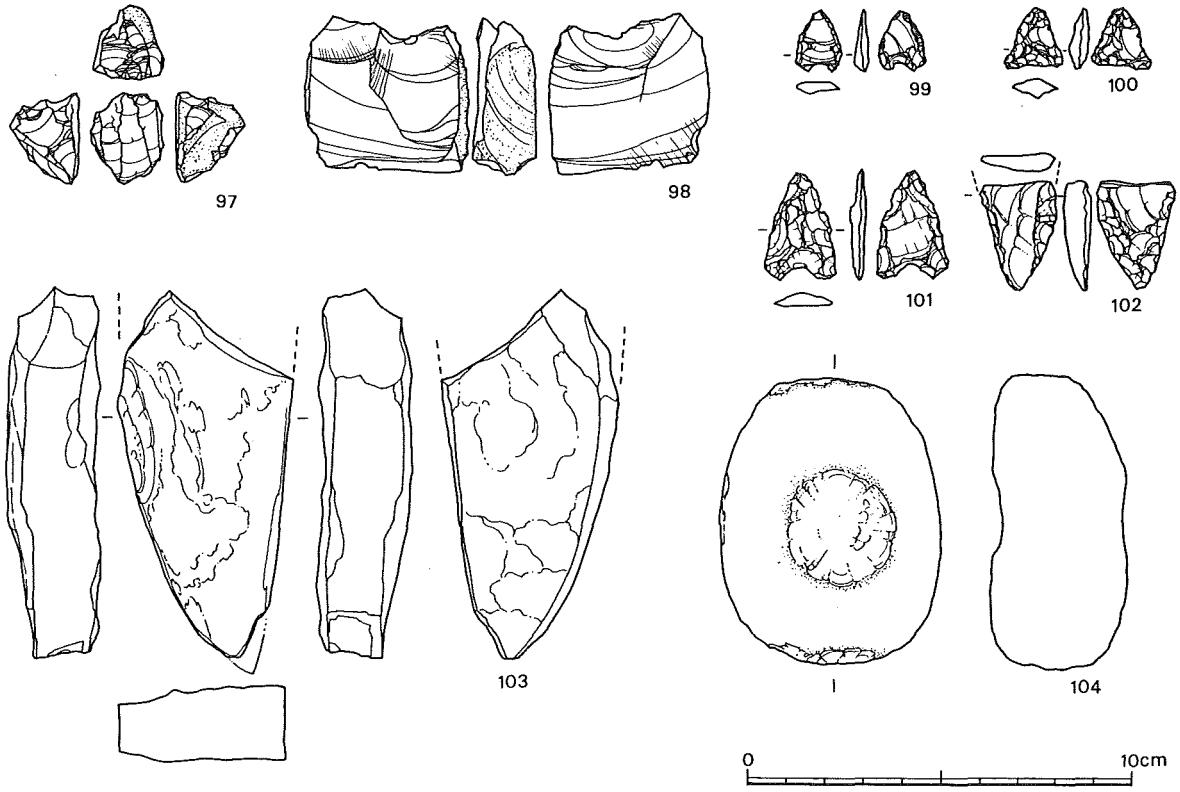
93・94は管状土錘である。93は両端部を欠損するが，現存長4.3cmでTP.19出土。94はほぼ完形で，長さ4.1cm。TP.12出土。95は砥であろうか。四角錐のような形状で，片面に4箇所の穴が施されている。96は不明滑石製品である。不整五角形で，各面ともに面取りがなされている。96・96はTP.7のP9出土。



第19図　その他の遺物（2）（S＝1／2）

（6）その他の石器（第20図・図版11）

旧石器～弥生時代の石器が出土している。遺跡南側ではローム層の発達は顕著であるが，北側では表土直下が岩盤である所が見られた。南側では旧石器～弥生の包含層が確認できる可能性もある。但しこの台地をベースとするようなものではなかったと見られる。その主体部は，もっと高台にあったり，あるいは平地であったりし，中途半端な台地上では，生活の場とはなり得なかったのであろう。出土石器も旧石器～弥生まであるが，8点の出土でしかないのは，それを裏付けるものなのであろう。



第20図　その他の石器　（S＝1／2）

6．まとめ

島原半島における中世城郭の数については，歴史的環境の中でも触れたように，我々の現在知見するところでは，47箇所を数える。但し，古代からの城館など捉えられていないものもかなりの数に昇るものと考える。その中でも，この島原半島北部地域は，とりわけ中世城郭が多く分布する地域である。一つにはこの地域が早くから開発され，荘園領主が複雑な様相を呈していたこと，南北朝期あるいは戦国時代に主戦場になるなど緊張状態が続いたことなどが大きな原因であろうと考えられる。この項では簡略ではあるが，瑞穂町の古代，中世と杉峰城の城主たる西郷氏について触れていきたいと思う。古代の高来地方においては，貞観八年(866)，高来郡擬大領太刀主らが，新羅人とともに対馬を急襲占拠しようと謀反を企てたことがしられるが，この事件後，高来郡の所領は没収され仁和寺領となったとされることが，中央とこの地域の繋がりを示す初見であろう。応和(963)，「八幡宇佐宮御神領大鏡」の肥前国国府によれば，親王家の所領の油山12か所の中に大河村，伊福村が見え，延喜十年(910)に宇佐八幡宮に施入されたとあることからこの地は宇佐宮領であったことが知られる。また，保安三年には伊福，大河の他に瑞穂町内では数カ所が八幡宮の神領であり，特に瑞穂町を中心に集まっていたことが知られる。鎌倉時代に入って宇佐宮領次第職の綾部氏が，伊福・大河・伊古・御墓野を四男幸明に譲与しており，幸明は大河氏を名乗る。幸明は三男の道行に伊福を譲渡，道行は伊福氏となる。その後綾部氏の一族は，分割相続を繰り返し，そのなかから伊古氏・大河氏・伊福氏などが出現している。この過程の中で，西郷氏も出現したと考えられるが，西郷氏の出自については不明な点が多い。その出自については，おおむね二つが考えられている。一つは肥後の菊池氏の系統，もう一つは綾部氏の系統をひくものとの説である。瑞穂町西郷の地は古くは大河西郷とよばれのちに西郷となる。綾部氏の分流の中からこの土地を相続し，西郷を名乗るものが出て，その西郷氏が宇木で力をつけ，諫早城主となったとする説が強いようである。西郷氏についての初見は，正和四年(1315)，河上宮の雑掌と湯江氏の訴訟の調停にあった者に，西郷藤三郎の名が見え正中三年(1326)，伊福村大河氏と藤原氏の田地の紛叫のときも西郷氏が調停にあたっており，この時期に成長してきたと考えられている。但し，このときの西郷氏は宇木西郷である。下って，南北朝時代観応三年(1351)に杉峰城に居城し，北朝軍に反抗していた西郷次郎の名が登場する。このとき宇木城主，西郷藤三郎の名もあるため，杉峰城は宇木の出城であったと考えられている。また，このころには先の土豪名は文献上登場しなくなり，この時期に在地土豪が一つの勢力に吸収されていった時期でもあったと考えられる。これ以後西郷氏については，文明６年(1474)に高城（諫早）城主として西郷石見守尚善の名が出るまでは空白である。諫早城主となった西郷氏は，県下も有数の中世城主に成長するが，天正十五年(1588)秀吉の島津征伐に参加しなかったことにより攻められ，諫早の地を龍造寺家晴に奪われる。その時の城主西郷信尚は有馬氏に庇護され，キリシタン信者になっており，信尚の母はキリシタン信者になろうとせず，有馬氏の領地の果てにある西に行く許可を求めていることからも，瑞穂町西郷が西郷氏にとって常に繋がりがあったものと考えられる。文献的に空白の時間があるとはいえ諫早西郷氏と瑞穂の西郷とはかなりの結び付きがあったことは事実であろう。

第21図　島原半島北部中世城郭分布図

表4　島原半島北部における中世城郭一覧（吾妻・瑞穂・有明町）

	年　　代	城　主	
1 野 井 城	観応三年（1352） 応安五年（1372）	？（南朝方） 田原氏能 （出朝方）	小俣氏連が千々石を攻めた後，この城を攻め落とし，その後北朝方となる。 山田城の出城，田原氏の親類，木村左近将監以下の者にここを守らせていた。 天正年間（1573～92）には，有馬氏の家臣隠岐守某が城主であったといわれる。 標高・12m　西側に千鳥川
2 隈 ノ 城 （大隈城）	応安六年（1373）	不明 （南朝方）	北朝方が伊佐早・宇木の両城を攻めたあと，高来郡に入り，神代および大隈城を攻めたとある， 標高・18m
3 尾 後 木 城		不明	古城の地名があり，空堀が残る。　標高・15m　東側に川
4 山 田 城	応安五年（1372）	田原氏能 （北朝方）	築城は在地領主ではなく，山田荘の地頭職をもつ豊後の領主田原氏による。実情は，野井城と同様 親類の木村左近将監以下の者が守る。 室町末期には山田城主山田兵部の名が「大村家記」に記されている。山田氏は有馬氏の一族，島原氏の分流 標高・30～50m　本丸・二の丸・曲輪多数
5 守 山 城 （森山城） （切通城）	永禄六年（1563）	守山宮内	文明の頃，有馬氏の在地領主として登場。守山氏は有馬氏の譜代の家臣であったが，千々石淡路・田口監物らと共に有馬氏に背き，伊佐早西郷氏に味方。有馬氏の攻撃を受け，守山氏一族は滅亡。 標高・20m　空堀跡に現在道路が貫通
6 向　　城		守山宮内	守山城を本城とした出城。　標高・24m
7 鎌 峰 城		鎌峰七郎	岡城主，岡刑部太輔貴明の家臣鎌峰七郎が居た（岡城の出城）『瑞穂町誌』 天正の頃，神代貴茂の一族，鎌峰五郎がこの城を守った。（神代城の出城）『吾妻町史』 標高・10m　東に川
8 岡　　城 （夏峰城）	天正十二年（1584）	岡刑部貴明	鶴亀城主，神代貴茂の弟の岡刑部貴明のとき沖田畷の戦いで龍造寺軍が敗れ，龍造寺方の岡氏も有馬勢の攻撃を受け落城。 標高・30m　突端部に二の丸，堀切を挟んで南山手に本城。　東に川
9 高 田 城 （伊幅城）			天正の頃は，有馬氏の家臣草野浄仙の居城であったといわれる。鎌倉時代には伊福・伊古・大河は大河幸明の所領でその三男道行が伊福氏を称していることから，高田城も関連があるものと思われる。 標高・10m
10 大 河 城	嘉暦二年（1327）	大河幸蓮	鎮西探題から矢俣藤太（山田荘の小地頭）らが大河孫三郎継入道幸蓮の構築した城の破却を命ぜられている。正中の変において大河幸蓮は鎮西探題の評判をえているにもかかわらず，4年後にその鎮西探題に，城郭を破壊されたことは大きな謎ある。築城の時期としては，島原半島の中でも古い時期に属するものと考えられる。 標高・30m　西に大川，北に西郷川
11 杉 峰 城 （西郷城）	観応三年（1352）	西郷次郎 （南朝方）	九州探題一色範氏が観応三年に小俣氏連は彼杵・高木両郡の南朝方の攻撃に派遣した時，氏蓮は杉峰城を攻めこれを落城させている。 標高・30m～　本丸・出丸・空堀・土塁
12 伊 古 城			伊古は，平安期から見える地名で，鎌倉期には，元徳四年（1332）伊古六郎二郎の名が見える。
13 尻 無 城 （古　城）			神代城の支城？　平成2年に一部調査され，遺物は十四世紀遺構を中心として，古くは十二世紀まで遡る。 標高・10m　石垣状遺構・空堀　両岸共に川
14 長 浜 城			神代城の支城？ 標高・10m
15 鶴 亀 城	南北朝期？ 天正五年（1577）	神代式部貴益 神代貴茂	天正十二年，沖田畷の戦で神代は龍造寺方の本陣となった。戦いに敗れ，有馬氏に領地を奪われ，元和元年の一国一城令により廃される。 標高・20m　二の丸・三の丸・出丸・空堀
16 大 坪 城	室町～戦国期	大坪太郎	神代貴茂の家臣大坪太郎のお城で神代城の出城。 標高・30m　神代川左岸
17 浅 井 城 （朝落城）	天正十二年(1584)	浅井七郎貴安	神代貴茂の居城の神代城の山手口を守る砦。沖田畷の戦いで，島津・有馬連合軍によって落城。 標高・70m
18 結 城 城 （金山城）	慶長七年（1602）	結城弥平治	慶長五年（1600）肥後国益城郡矢部城主の城氏は有馬晴信のもとに知行三千石で迎えられる。キリシタンであったため，この金山の地に教会を建て城主として，キリスト教徒として晩年を生きたとされる。 標高・94m　本丸・二の丸・三の丸　比高20m
19 多 比 良 城 （轟木城）	永暦元年（1160） 観応三年（1352）	日向太郎通良？	平安末期，平家が九州に進出した際，通良は源氏との縁を理由に平家に従わず，この地に城構えた。その子の多比良通秀は平家貞に追討される。鎌倉時代に多比良通世は御家人となり，元亨三年（1323）には高来西郷の郡司，図師職勤める。小俣氏連は，観応三年に多比良重通の城を攻め落とす。 室町～戦国時代には有馬氏に臣従。天正十二年（1584）神代氏有馬氏が多比良城にて和議をした。 標高・10m　空堀
20 釘 崎 城			
21 大 野 浜 城			
22 大 野 城	天正十二年(1584)	大野山城守	竜造寺の軍勢は沖田畷の戦いに際して，当城を兵站基地として利用した。
23 東 空 閑 城		古賀越後守	有馬氏の家臣。島原純豊によって暗殺される。（永禄六年） 標高・13m　空堀　西に境松川

※年代は築城年代を表すものではなく，文献に城として現れたときの年代を記載した。

表4 島原半島北部における中世城郭（吾妻・瑞穂・有明町）

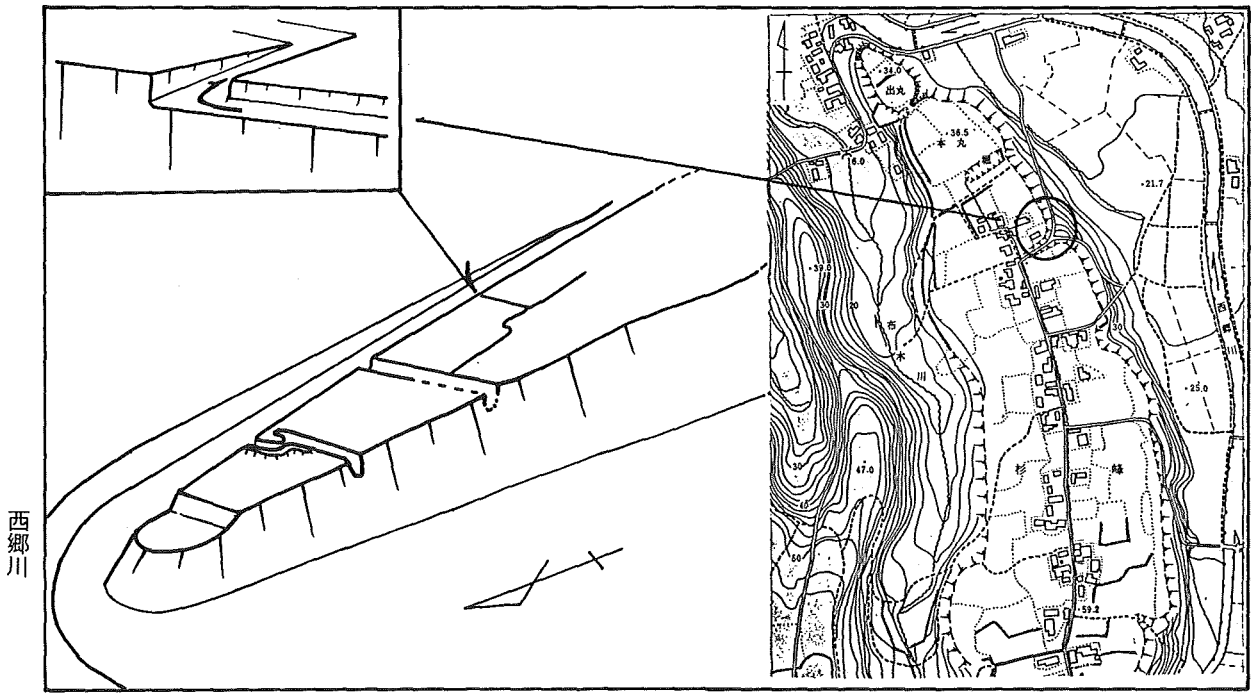
島原半島北部の中世城郭について

第２１図及び表４で，島原半島北部（吾妻・瑞穂・有明町）の中世城郭の分布とその沿革について示した。これらのことからまず気付くのは，地形的に舌状台地がよく発達していることがあり，この舌状台地の先端に城郭が構築されていることであろう。このことについては『日本城郭体系』のなかで外山氏が「……県北と県南とでいささかその形態に相違がある，…前者には…峻険な山頂に築かれた山城が多いのに対して後者，特に島原半島のものは…平城ないし平山城で，…これは地形の相違に根ざすものであろう…」としてその形態差を指摘している。但し，具体的な地形の相違については触れられてはおらず，平城・平山城にしか成り得なかった当地の地形上の制約，具体的な特徴について説明しておく必要があると思われる。この項では，杉峰城の構成を見ていくことにより，島原半島北部の中世城郭の特徴を示していきたいと思う。

第２２図は，杉峰城の遺構模式図及び「日本城郭体系」における縄張り図である。台地の最先端に今回確認した出曲輪を配し，比高差約２ｍで南に出丸，空堀を挟んで南に本丸，さらに空堀を挟んで南は広大な緩やかな比高差を保ちながら南へと続く。台地の断面は台形を呈し，出曲輪と平地との比高差は１５～１７ｍ，南側に行くほど比高差は増していくため，この台地そのものが要害の地であることが頷ける。この台地に２本の堀が構築されているが，この２本の堀によって郭が構成されている。ある意味では最も単純な方法で容易に区画がなされるのである。台地東側の道路は，文政九年の「西郷村絵図」にも掲載されており，古くから台地上への通路であったことがわかる。島原半島北部の舌状台地に構築された城郭は，そのほとんどがこのような形態をしている。このことからもこの形態がこの地形に城郭を構築する上で，防禦上有効な形態であると言えよう。通常中世山城は，平時の居館に対して戦時の詰城，いわゆる『根小屋式城郭』と言われるように，最後の詰めとして峻険な山の上に構築されている。僅かな権力しか持たない在地土豪にとって，山に篭もることが最大の防禦に成り得たことはいうまでもない。但し，島原半島特有の舌状台地では最後の詰めとなるべき郭を作り出さなければならない状況にあると言わざるを得ない。その郭が杉峰城での出丸部分にあたると考えられる。このことについては，出丸部分の南側に土塁が存在することからも検証できると思われる。従って二つの空堀は，南側からの攻撃に備えるためのものと考える。本丸とされる郭は，南北に１３０ｍ，東西に９０ｍを測り，これを守るために多くの守り手が必要であろうことはいうまでもない。１人が防禦し得る空間は限られているであろうことから少人数の場合，それに見合った郭に篭もらざるを得ないであろう。それを考えた場合杉峰城では出丸にあたる地域がその遺構の在りかたからも重要な郭として捉えられよう。このように舌状台地という地形に制約されたがゆえに，台地に一つ，あるいは二つの空堀を構築することを基本形とする形態の城郭がこの島原半島北部域に分布したと考えられる。これらの形態を有する城郭に対して，杉峰城型城郭という型式名を与えたい。ただし，第２２図中のすべてがこの型式をとっているかどうかについては，今後の現地調査に待たなければならない。

遺跡の範囲・取扱いについて

今回の範囲確認調査の調査結果にもとづいて，遺跡範囲における重要度を段階別にゾーンで示した



第22図　杉峰城遺構摸式図

のが第２３図である。

①　Ａゾーン

杉峰城の中心部である。遺構では，本丸・出丸・出曲輪の範囲であり，中世の柱穴が多く検出れた地域でもある。現段階では最も重要と考えられる区域であり，現状のまま保存し，将来的には，環境整備を行うのが望ましいゾーンである。

②　Ｂゾーン

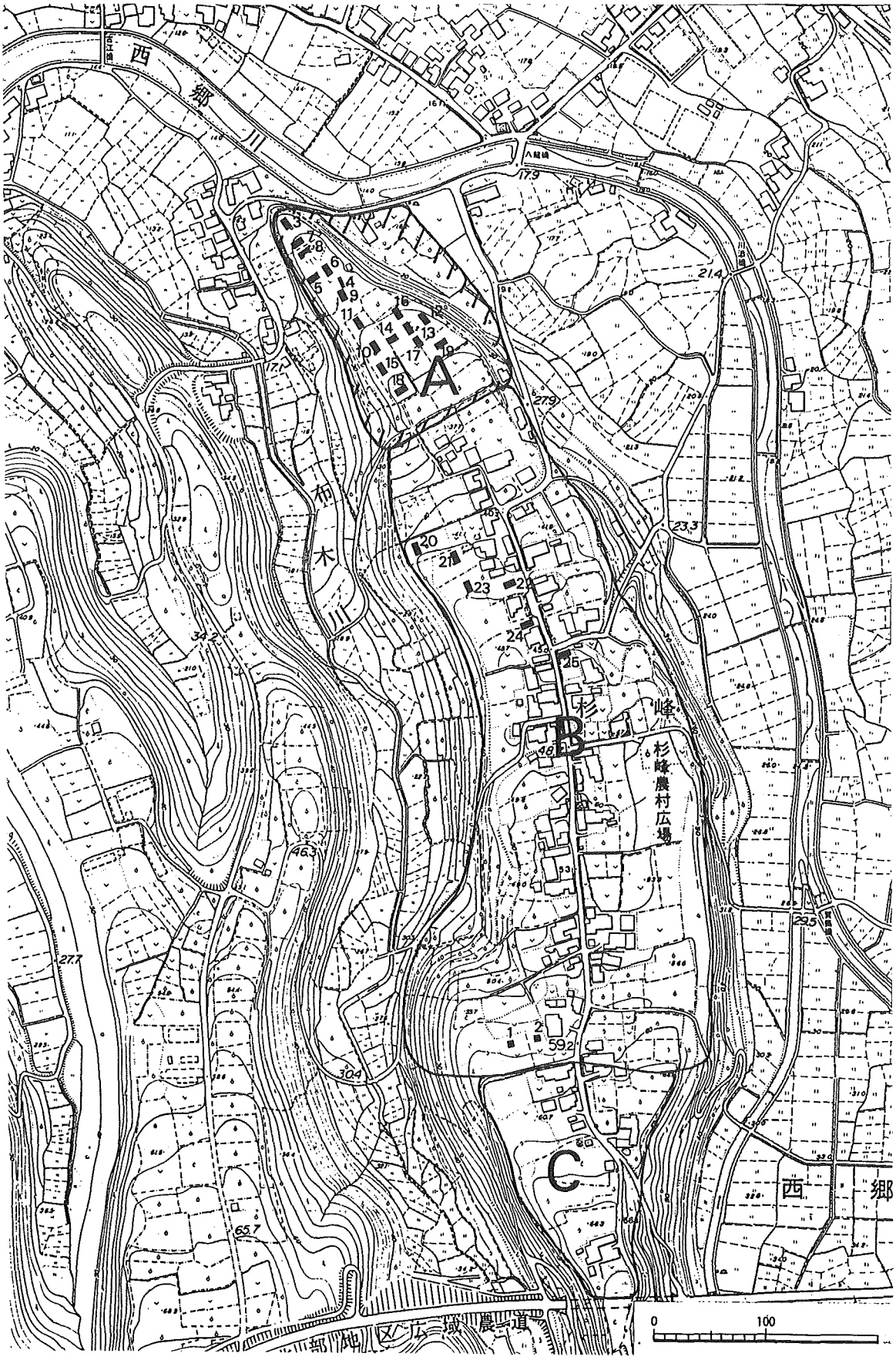
杉峰城の範囲内で，中世～近世の遺物を包含し，柱穴等の遺構が検出される区域である。工事等の開発計画にさいしては保存の為の設計変更の協議を必要とし，現状保存が望ましいが，やむをえない場合に緊急調査を実施すべきゾーンである。

③　Ｃゾーン

杉峰城の南側に広がる範囲であり。遺物包含状況はあまり良好ではないが，中世の遺物が散布する区域であり，工事等の開発行為に際しては，工事立会または慎重工事を必要とするゾーンである。

参考・引用文献

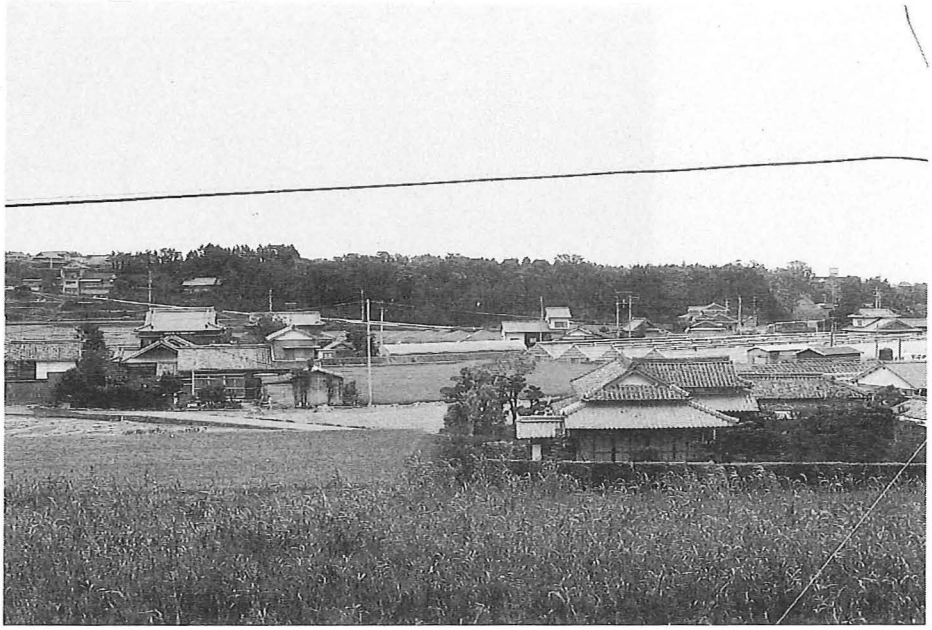
1　『瑞穂町郷土誌』瑞穂町　1988
2　『国見町郷土誌』国見町　1984
3　『吾妻町郷土誌』吾妻町　1984
4　外山幹雄・高島忠平編『日本城郭体系』17　1980
5　瀬野精一郎・外山幹雄編『角川日本地名大辞典』42　長崎県　1978
6　村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社　1991
　山上雅弘「戦国時代の山城」　－西日本を中心とする15世紀後半～16世紀前半の山城について－
7　長崎県教育委員会『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ』－筏遺跡－　1994
8　瑞穂町文化財保護協会『尻無城跡』　1991



第23図　杉峰城ゾーニング図

図　　版

図版1



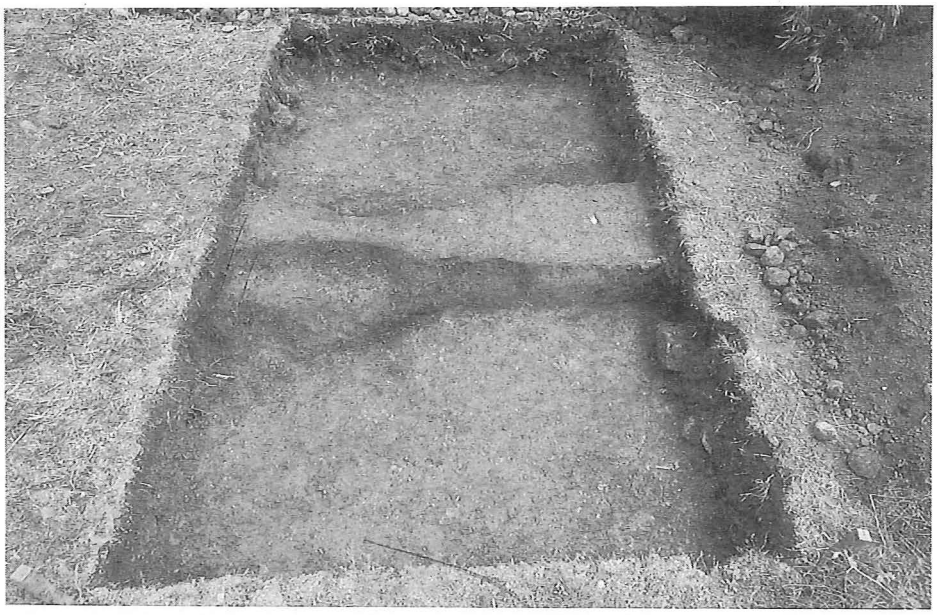
遺跡遠景

（遺跡近景
本丸南より出丸方向を
望む）

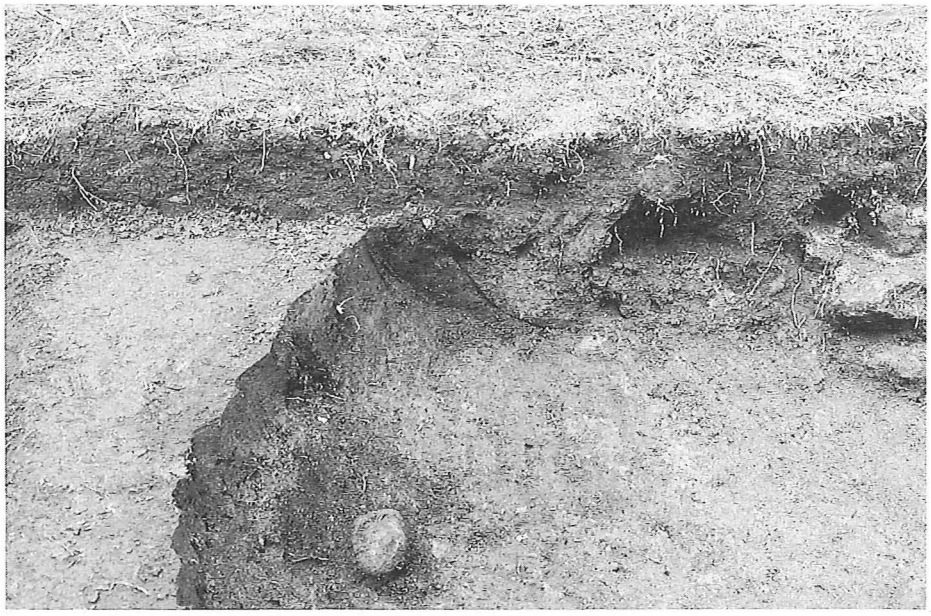
本丸東側より

杉峰城址遠景・近景

図版２



TP.6
土塁状遺構



TP.6
土塁状遺構の立ち上がり

TP.6
土塁状遺構除去後
のピット検出状況

TP－６ 土塁状遺構

本丸と出丸との境界
の北側空堀
（東側から西壁を撮る）

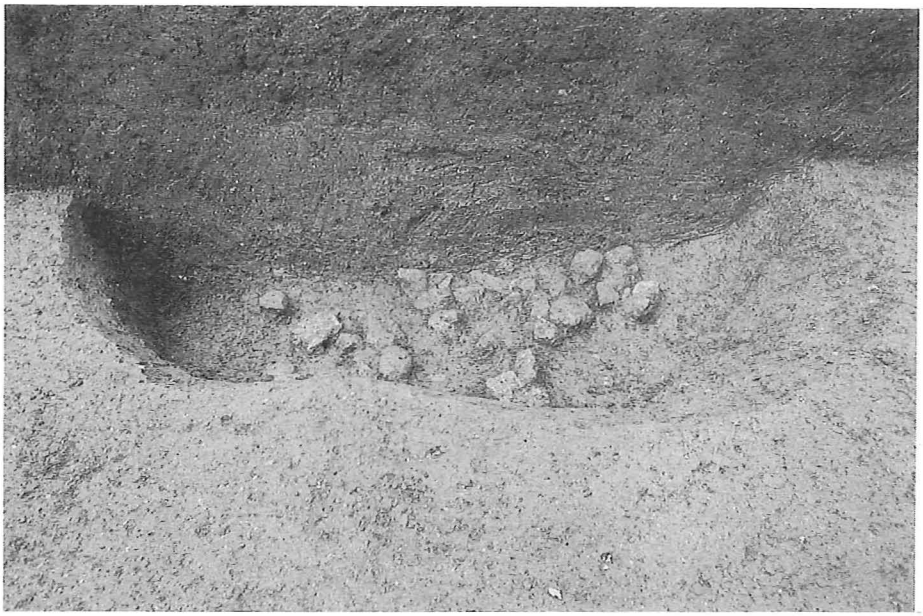
TP.9
南側セクション

空堀の岩盤に
四角い穴を穿つ
（この穴に木をさし込み
本丸と出丸をつなぐ
木橋として使用か？）

空堀遺構

図版４

TP.4
土塁状遺構
表土除去



TP.16 内検出土壙

TP.16
土壙内五輪塔出土
状況

TP－４の土塁及びTP－16の土壙

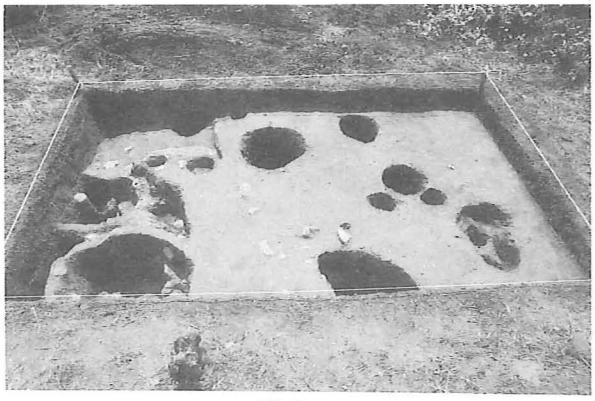
南側空堀
東側から

南側空堀
西側から

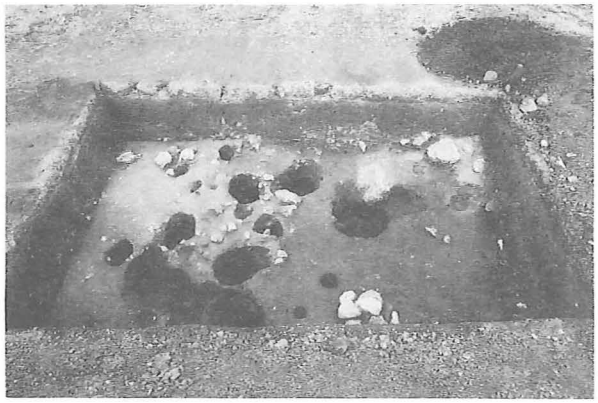
南側空堀
西側の石積
下方の穴が排水口

南側空堀（水堀？）

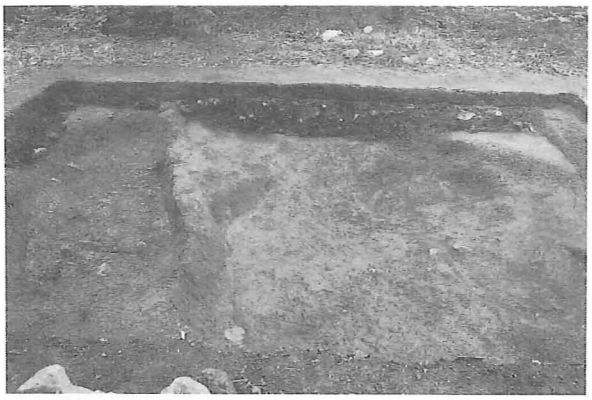
図版6



TP.3

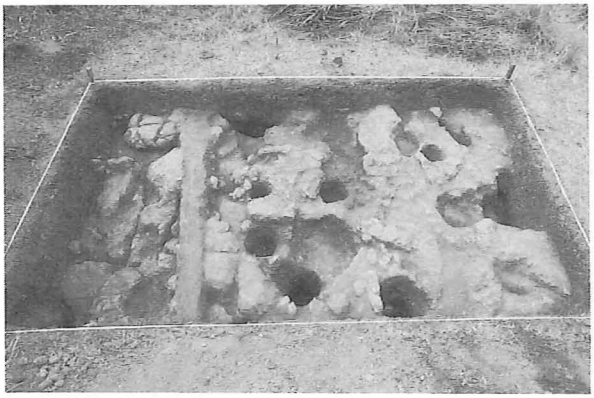


TP.12

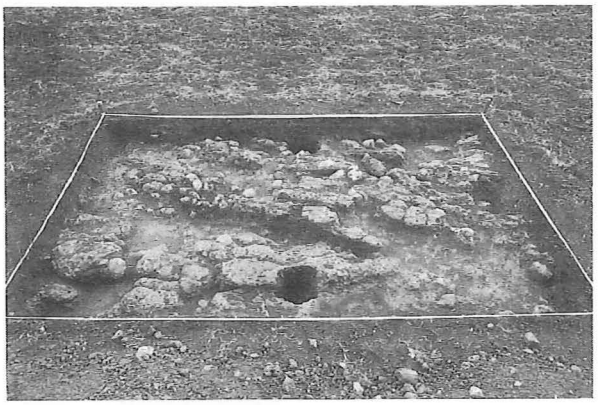


TP.5

TP.13

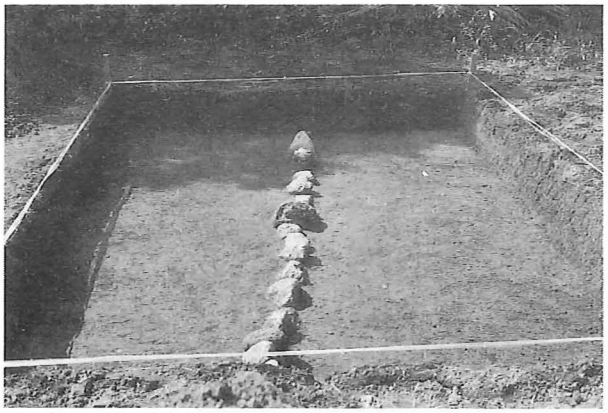


TP.7



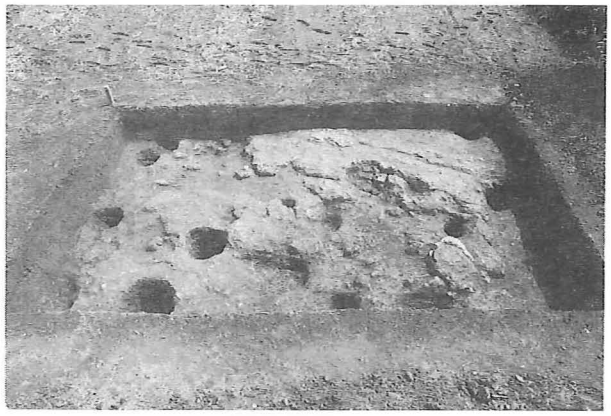
TP.14

TP.8



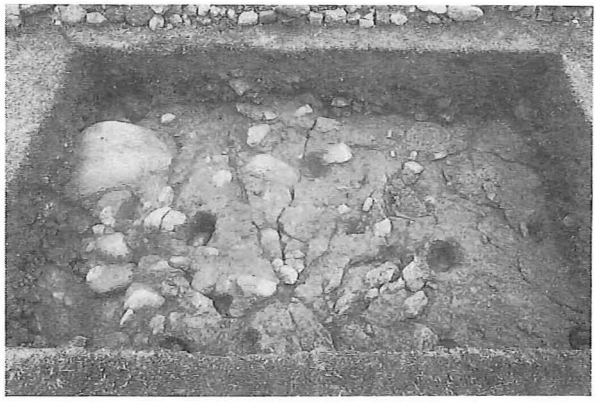
TP.16

各グリッド遺構検出状況

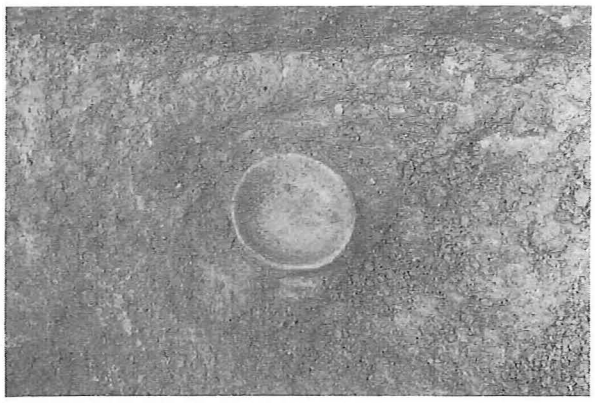


TP.17

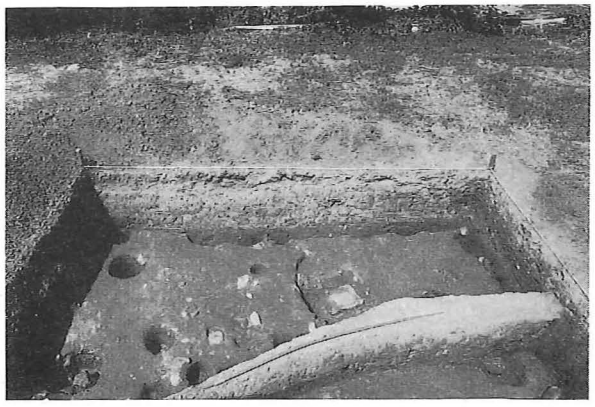
TP.24



TP.18

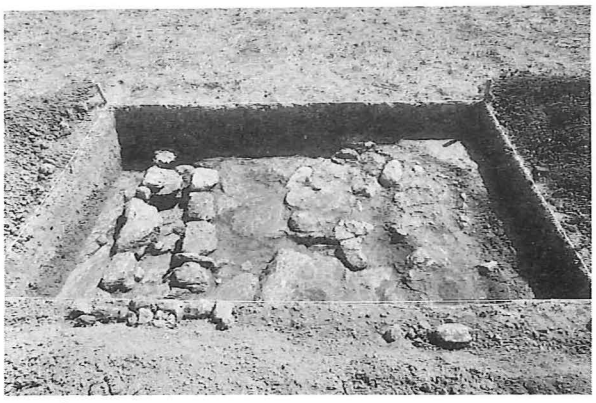


TP.6　土師小皿出土状況



TP.22

TP.6 青磁盤出土状況



TP.23

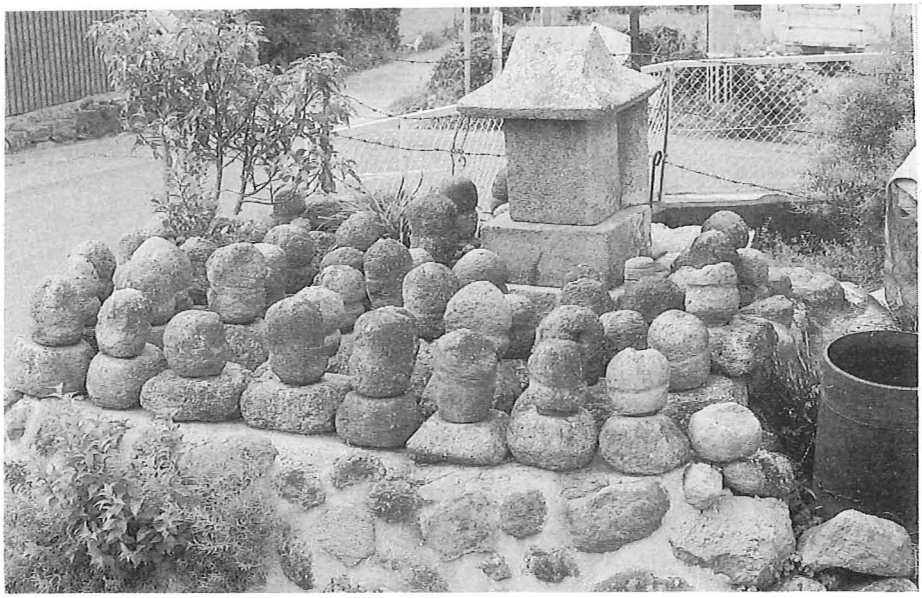
TP.6 土師杯出土状況

各グリッド遺構及び遺物検出状況

図版8

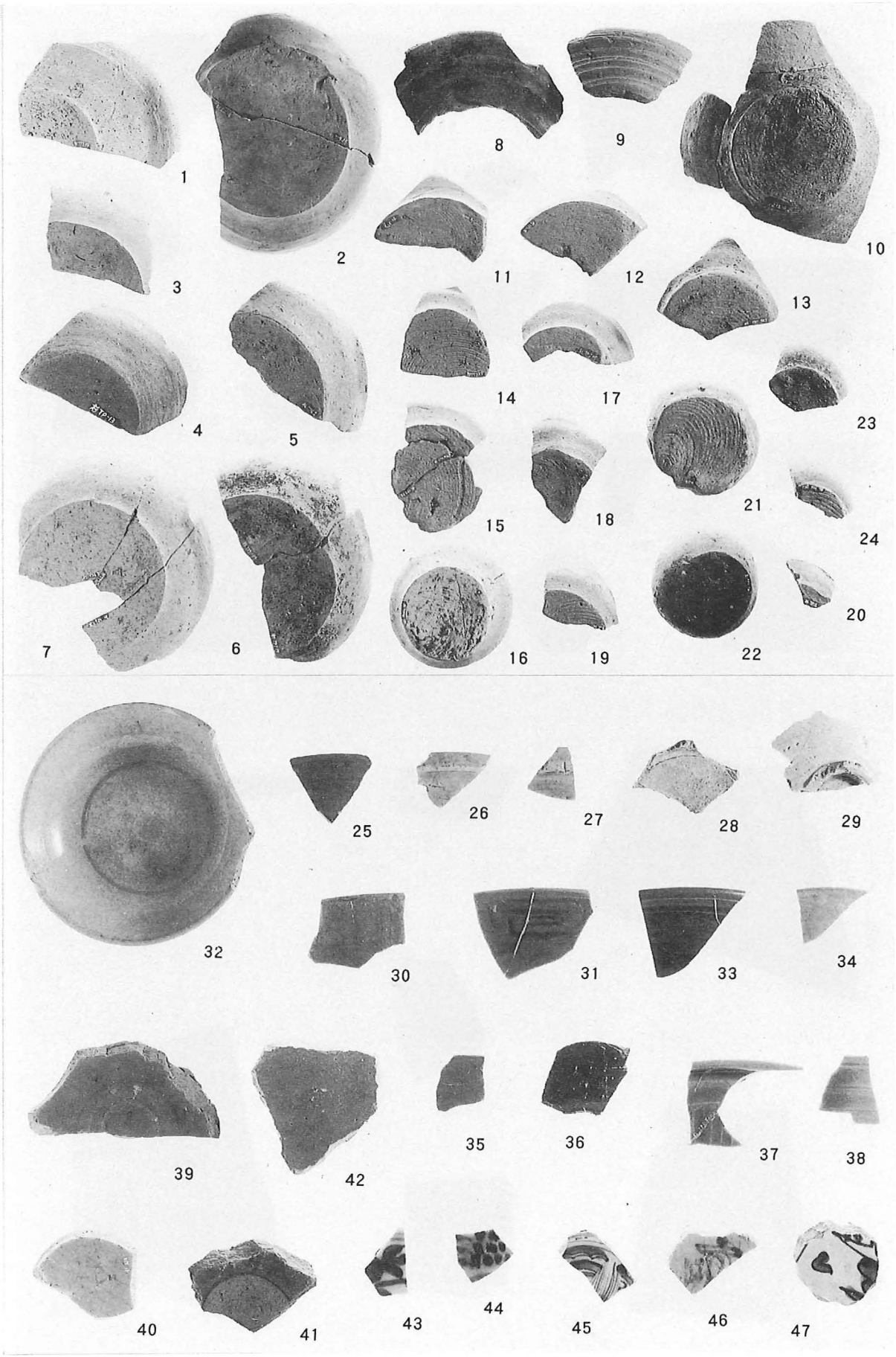
宝篋印塔
五輪塔群

五輪塔



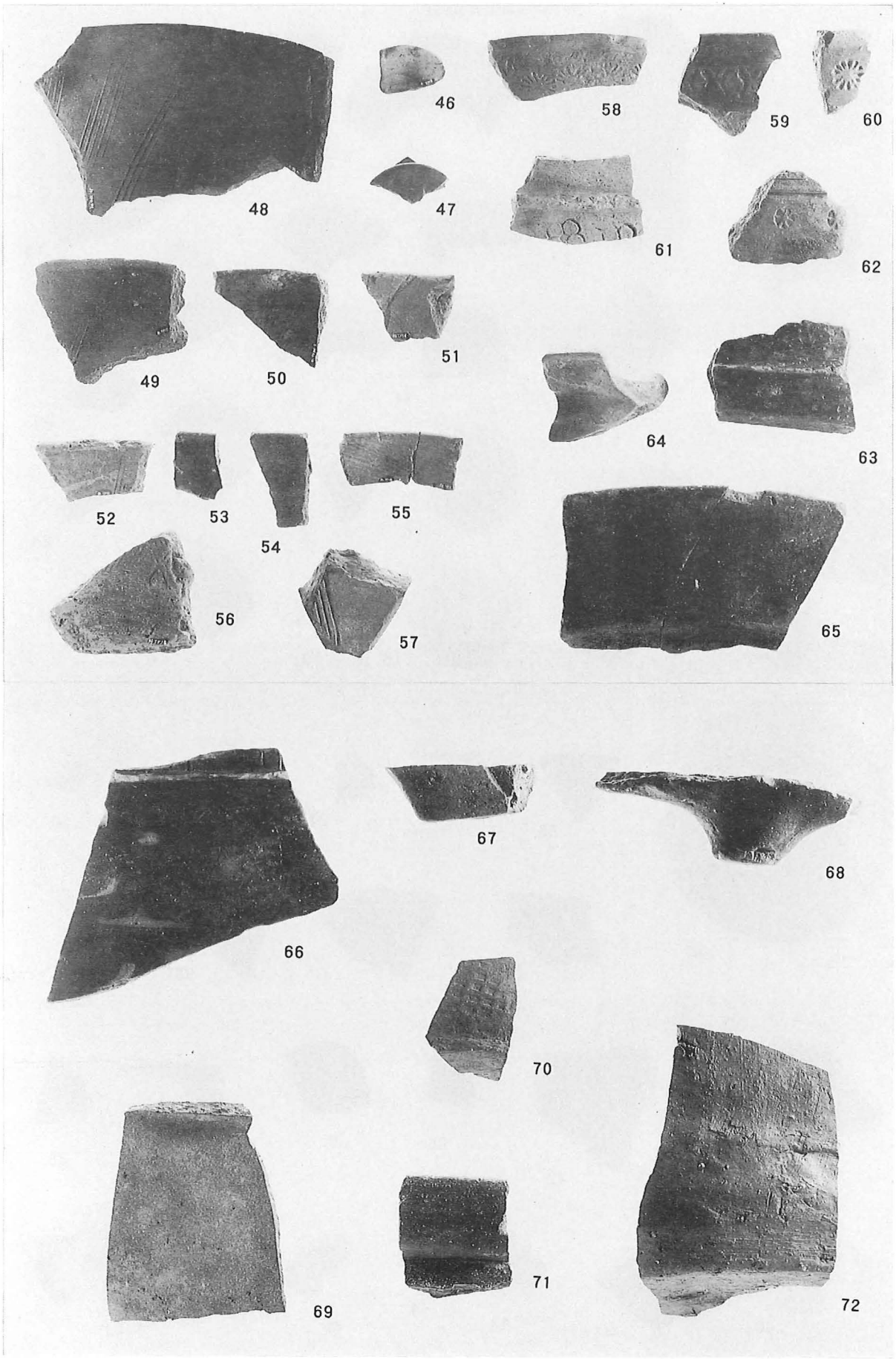
五輪塔群

城周辺五輪塔群

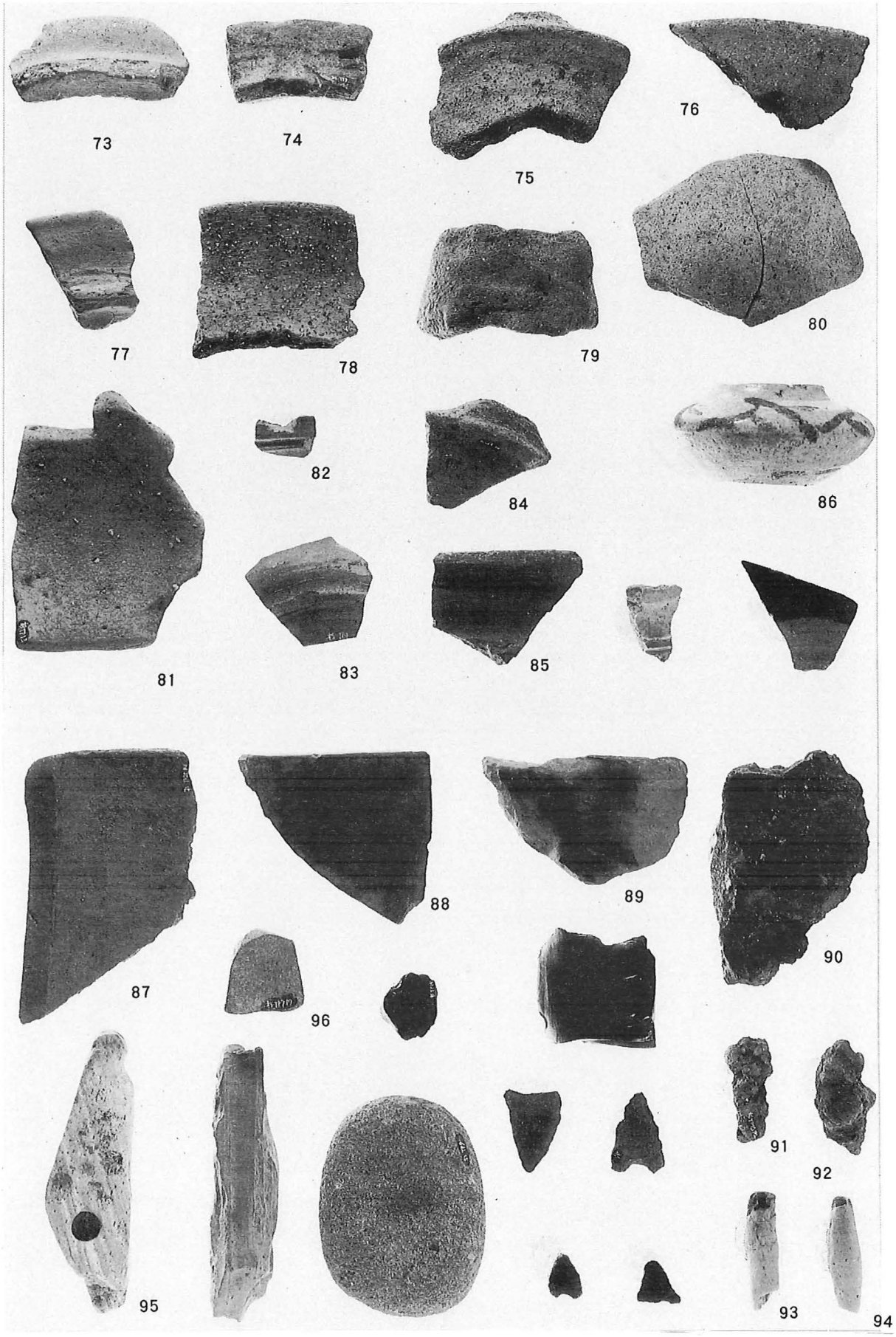

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47

出土遺物（1）

図版10


46
58
59
60
48
47
61
62
49
50
51
64
63
52
53
55
54
56
57
65
67
68
66
70
69
71
72

出土遺物（2）



出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	けんないじゅうよういせきはんいかくにんちょうさほうこくしょ
書名	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ
副書名	
巻次	3
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第１２１集
編著者名	寺田正剛
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850 長崎県江戸町2-13 TEL 0958-24-1111
発行年月日	西暦 １９９５年 ３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ながせかいづか 永瀬貝塚	ながさきけんみなみたかきぐん 長崎県南高来郡 かづさちょうみなつきみょう 加津佐町水月名	42369	100-20	32° 35' 32"	130° 10' 24"	19930525～ 199305281	38m²	学術調査
なきり 名切遺跡	ながさきけんいきぐん 長崎県壱岐郡 ごうのうらちょう 郷ノ浦町 かたはらふれ 片原触	42421	18-11	33° 44' 42"	129° 41' 20"	9940221～ 199403041	32m²	学術調査
すぎみねじょうあと 杉峰城跡	ながさきけんみなみたかきぐん 長崎県南高来郡 みずほちょうこえみょう 瑞穂町古江名・ すぎみねみょう 杉峰名	42363	85-59	32° 51' 30"	130° 14' 30"	9930702～ 19930908	375m²	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永瀬貝塚	貝塚	縄文・弥生		縄文後期土器、石器、獣骨	今回の調査では弥生土器の出土が確認されなかった。
名切遺跡	遺物包含	縄文		縄文中期土器、石器、白磁等	かつて、貯蔵穴が検出されている。
杉峰城跡	地城跡	室町	空堀、土塁、柱穴	輸入陶磁器、土師質土器等	

長崎県文化財調査報告書　第121集

県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ

平成７年３月31日

発　　行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2-13

印　　刷　㈱クイックプリント
長崎市江戸町４－１